多賀城市文化財調査報告書第81集

山　王　遺　跡

— 第51・54・57次調査報告書 —

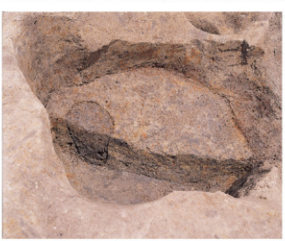
平 成 18 年 3 月

多 賀 城 市 教 育 委 員 会

ＳＤ1094・1227・1228溝跡、ＳＸ1223土橋（東より）

上左：B区V層水田跡（東より）
上右：SD1127溝跡、SX1224・1225畦畔（東より）
下　：中世の遺物

上：西７南北道路ほか検出状況
下：西７南北道路西側溝断面



上　：調査区東端部古代の遺構（東より撮影）
下左：ＳＢ1190・Ｐ３断面
下右：ＳＢ1190・Ｐ１断面

序　文

古代に陸奥国府が置かれた多賀城の南面一帯には、東西1.7㎞、南北0.9㎞の範囲に方格地割りが施され、整然とした都市空間が形成されていました。メインストリートとなる東西大路沿いには国司クラスの邸宅が立ち並び、多くの人々が行き来している様子が目に浮かびます。山王遺跡は、この東西大路が遺跡のほぼ中央を貫いており、これまでの調査によって「国守館」として特別史跡に追加指定された千刈田地区や、庭園風の遺構が発見された多賀前地区など、地割り内部の様相を解明する上で重要な発見が相次いでいる遺跡であります。

さて、今回報告いたします山王遺跡第51・54・57次調査は、平成17年度に受託事業または市単独事業として実施した緊急発掘調査であります。いずれの調査区でも、古墳時代には水田稲作が行われていたことや、古代・中世では掘立柱建物や井戸・区画溝が発見されるなど、長期にわたって人々の生活の場として使用されていたことが判明しました。このうち、第51次調査で発見した古墳時代前期の水田跡では、東西方向に延びる畦畔に伴い水路が付設されており、この時代の水田経営の一端を知る貴重な成果となりました。

このように、開発行為に因るものとはいえ、発掘調査が実施され新たな情報が蓄積されていくことは、郷土の歴史を理解する上では欠くことのできないものと考えております。今回の報告書が、市民をはじめとして広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地調査から報告書作成に至るまで、ご理解とご協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成18年３月

多賀城市教育委員会
教育長　菊　地　昭　吾

例　　言

1　本書は、平成17年度の受託事業で実施した第51・54次調査及び市単独事業で実施した第57次調査の成果をまとめたものである。

2　遺構の名称は、各遺跡とも第１次調査からの連続番号である。

3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系Ⅹ」を用いている。

4　挿図中の高さは標高値を示している。

5　土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。

6　執筆は、Ⅰを武田健市、Ⅱを村松　稔、Ⅲを武田が担当し、編集は武田が行った。なお、本書作成に係る資料整理、図版作成及び出土遺物の写真撮影等の作業については以下のように分担した。

第51次調査　・資料整理：村松稔、廣瀬真理子　・図版作成：村松稔、廣瀬真理子、大友貴晴
・写真撮影：廣瀬真理子

第54次調査　・資料整理：武田健市、岩永知子　・図版作成：武田健市
・写真撮影：廣瀬真理子

第57次調査　・資料整理：村松稔、廣瀬真理子　・図版作成：村松稔、廣瀬真理子

7　調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．　本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
ＳＢ：建物　ＳＡ：柱列　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土壙　Ｐｉｔ（Ｐ）：柱穴及び小穴
ＳＸ：道路、河川及びその他の遺構

2．　奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』に従った。

3．　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4．　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考えと（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）、『扶桑略記』延喜15年（915）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

調査要項

1	調査主体	多賀城市教育委員会	教育長　菊地昭吾
2	調査担当	多賀城市埋蔵文化財調査センター	所長　佐藤慶輝
3	調査担当者	多賀城市埋蔵文化財調査センター	研究員　武田健市
			技師　村松　稔
			発掘調査員　岩永知子　大友貴晴　廣瀬真理子
4	調査協力者	熊谷　學　阿部勝雄　大東住宅株式会社	
5	調査従事者	赤間かつ子　浅野喜久男　井口幸男　伊丹一欽　伊東泰彦　遠藤一代　大場勝喜	
		大場孝也　大山貞子　岡本典子　小野玉乃　小野寺恵子　小幡武　小幡浩	
		菊田百合子　小松まり　今野和子　齋藤金茂　佐藤十五　塩井一征　清水亮	
		鈴木政義　鈴木芳恵　田中裕子　南城美岐子　浜田優美子　平山節子　藤澤拓司	
		藤田恵子　星美由紀　松田正樹　宮川ハルミ　柳裕順　若生美津枝　渡辺ゆき子	
6	整理従事者	遠藤友美　高木一枝　中村千恵子　松崎祥子　村上和恵　横山佳織	

No.	調査次数	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	第51次 (受託)	山王字三千刈25－1 山王字掃下し1－1	平成17年4月8日～6月22日	412 ㎡	村松　稔 廣瀬真理子
2	第54次 (受託)	山王字前田9－1、10－1、19－3 山王字山王四区7	平成17年5月31日～8月4日	264 ㎡	武田　健市 岩永　知子
3	第57次 (市単独)	山王字三千刈25－1 山王字掃下し1－1	平成17年10月3・6・18日	30㎡	村松　稔 廣瀬真理子

目　次

序　文
例　言
凡　例
調査要項
目　次
Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ．第51・57次調査 …… 4
　1．調査に至る経緯と経過 …… 4
　2．調査成果 …… 5
　3．考　察 …… 29
　4．ま と め …… 37
　5．多賀城市山王遺跡第51次調査のプラント・オパール分析 …… 43
Ⅲ．第54次調査 …… 46
　1．調査区の位置と周辺の調査成果 …… 46
　2．調査に至る経緯と経過 …… 47
　3．調査成果 …… 48
　4．考　察 …… 87
　5．ま と め …… 95
　6．多賀城市山王遺跡第54次調査のプラント・オパール分析 …… 103

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境

１．地理的環境

多賀城市は、宮城県の中央やや北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塩釜線沿いには標高５～６mの微高地が延びており、その北側は利府町に跨る低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などが分布しており、海岸に近い地域には浜堤列も確認できる。このうち、県道沿いに確認できる微高地は七北田川や砂押川の沖積作用によって形成された自然堤防と考えられており、本遺跡をはじめ新田・市川橋遺跡など市内でも大規模な遺跡が隣接して所在している。

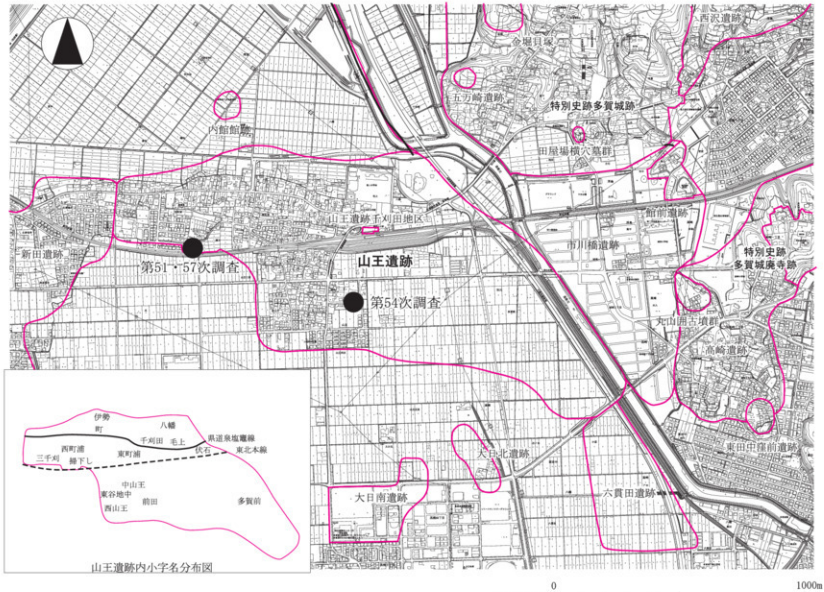
第１図　多賀城市の位置

本遺跡は、七北田川の東岸約１km付近から砂押川西岸にかけての微高地及び低湿地上に立地している。東西約２km、南北約１kmの範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積を有している。遺跡内の地形について詳細にみると、中央県道沿いにある東西方向の微高地は、遺跡西端付近が6.5m前後と最も高く、南東側に向かって緩やかに傾斜している。南東部は標高3.5m程の低湿地であり、砂押川西岸に至る範囲が現在の水田地帯となっている。また、遺跡の南側には東西方向に延びる旧七北田川の流路があり、終戦直後に撮影された航空写真にその痕跡を確認することができる。一方、近年の発掘調査により、本遺跡の旧地形についての資料も増えつつある。古墳時代においては、北東部の八幡地区や西側の掃下し地区から南側の多賀前地区にかけて水田跡が発見されており、遺跡の南半部に限ってみれば、新田遺跡で発見されたものも含めると大規模な生産域が広がっていた可能性がある。これら水田域の多くは奈良時代にはすでに乾燥した地層で覆われており、かつては低湿地と考えられていた多賀前地区においても９・10世紀にかけて遺構が密集していることが確認されている。このことから、七北田川と砂押川に挟まれた本遺跡周辺は、微地形とともに土地利用のあり方も変化していることが明らかとなってきている。

２．歴史的環境

本遺跡では、これまで市教育委員会や宮城県教育庁文化財保護課が数多くの調査を実施しており、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を発見している。ここでは各時代の代表的な成果を概観しておきたい。

弥生時代：北東部の八幡地区では中期以前の水田跡や中期の遺物包含層が発見されているが、集落跡は



第２図　山王遺跡と周辺の遺跡

未発見である。

古墳時代：前期では、中央部の町地区で方形周溝墓や竪穴住居跡、北東部の八幡地区や西側の掃下し地区から南側の多賀前地区にかけては水田跡が発見されている。遺跡南側に展開する広大な水田域に対して、発見された竪穴住居跡は町地区の１軒のみであり、未だ集落といえるものは確認されていない。中期では、微高地上に多数の竪穴住居跡が発見され、集落が形成されていたことが明らかとなっている。八幡地区では前半段階にはすでに鍛冶工房が出現し、遺物包含層からは多量の土師器のほか、鹿角製刀装具や琴柱形角製品、ト骨など特殊な遺物も多く出土している。東町浦地区では大規模な区画溝が発見され、西町浦地区では続縄文土器や黒曜石製の石器が出土するなど、地域の拠点的な集落であった可能性が考えられる。後期になると、八幡地区で100軒を超す竪穴住居跡が発見されている。重複するものが多数認められることから、集落が長期間にわたって営まれていたと考えられている。また、集落内を流れていた河川跡からは、多量の土器のほかに柄香炉、ト骨、斎串が出土しており、本地区周辺における仏教文化の受容やト骨を用いた祭祀の変遷過程を知る上で貴重な資料といえる。

奈良・平安時代：奈良時代では、八幡地区で掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡が発見されている。しかし、遺構の密度としては、後述する平安時代に比べれば極めて散在的であり、未だこの時期の様相については不明な点が多い。なお、発見された溝跡からは漆紙文書や漆付着土器が多数出土しており、周辺に漆工房の存在が想定されている。平安時代になると城外の方格地割りが完成し、地方都市としての景観を見せるようになる。西端部を除く本遺跡内のほとんどがこの地割りに組み込まれ、各地区で道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡などが多数発見されている。これまでの成果によると、外郭南辺築地に平行する東西大路沿いには「国守館」をはじめとする国司クラスの邸宅が立ち並び、それより１区画離れた場所には下級役人の住まいが設けられるなど、区画内で土地の選定が行われていたことが明らかになっている。また、東町浦地区の土壙から多数の灯明皿が出土しており、この周辺で「万燈会」のような仏教行事が行われていたと推測される。

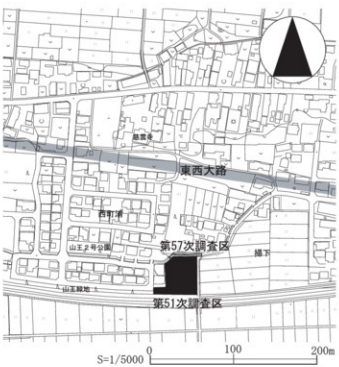
中世：八幡・伏石・中山王地区では、大規模な溝に区画された屋敷跡が発見されている。このうち八幡・伏石地区では、12～13世紀頃の「古い屋敷跡」と15～16世紀頃の「新しい屋敷跡」が発見されており、「新しい屋敷跡」については、新田遺跡と同様な屋敷群の一部であると考えられている。これら屋敷の居住者については、本遺跡一帯が留守氏の支配する「高用名」及び「南宮庄」に比定されている地域であることから、それに関連した武士層であったと推測される。

近世：塩竈街道を踏襲しているとされる県道泉塩釜線に面した西町浦・町・伊勢各地区で、近世の掘立柱建物跡や区画溝跡、井戸跡などが発見されている。このうち西町浦地区では、かつて酒造業を営み塩竈一の宮の「御神酒屋」であった賀川家の敷地内を調査している。大規模な東西・南北の堀跡と井戸跡が発見され、堀跡からは陶磁器や土器・木製品・石製品が多量に出土している。また、町・伊勢地区でも堀で区画された南北に長い屋敷跡が発見され、多数の掘立柱建物跡や井戸跡が確認されている。町・伊勢地区周辺は、17世紀初頭に伊達家家臣成田氏とその足軽が移住した地とされており、街道沿いには上述したような屋敷が立ち並んでいたと考えられる。

Ⅱ．山王遺跡第51・57次調査

１．調査に至る経緯と経過

本調査は、山王字三千刈と同字掃下し地内の宅地造成工事に伴うものである。平成16年11月22日に地権者より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、５区画の宅地を造成し、その南側に新規の道路を建設して、既存の道路を拡幅するというものであった。工事計画は、山王遺跡の範囲を越え、さらに南側に及んでいた。このことから、平成17年３月23日に遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査（第49次調査）を実施したところ、現地表から15～20cm下に溝跡や土壙を、また、その約30cm下層に古墳時代の水田耕作土と考えられる黒色粘土層を発見した。

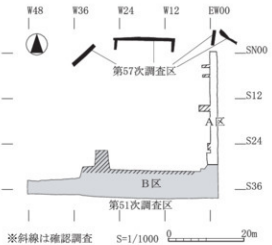


第１図　調査区位置図

この結果、遺跡が南側へ広がっていることが明らかになったため、市教育委員会にて検討を重ねた後、地権者からの快諾を得てその範囲を南側に拡げた。その後、地権者および施工業者と調査に関する協議を行った結果、宅地部分については現地表の上に0.7～１ｍの盛土を行うこと、これに付随する上下水道と農業用配水管については範囲が狭小であることから工事立会で対応することとし、道路部分については平成17年４月から本発掘調査を行うこととなった。

平成17年４月４日、地権者より発掘調査の依頼書および承諾書の提出を受け、８日から12日まで重機による表土（Ⅰ層）除去を行った。掘削した土砂は全て場内にて管理した。なお、便宜上南北方向の調査区をＡ区、東西方向の調査区をＢ区とした（第２図）。12日からⅡ・Ⅲ層上面の遺構検出を行い、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙を発見した。13日に基準杭の設定を行い、14日にＸ＝-189,094.000、Ｙ＝12,323.000を東西・南北の原点と定め、ここから１ｍ離れるごとに、東西方向は東にＥ１・Ｅ２・・、西にＷ１・Ｗ２・・、南北方向は北にＮ１・Ｎ２・・、南にＳ１・Ｓ２・・と表示することとした。21日からＢ区で発見したＳＤ1094・1227・1228溝跡の埋土を掘り下げた。27日にはＡ区北半部で発見した柱列跡のあり方を確認するため一部西側に調査区を拡張したところ、組み合う柱穴は確認できなかった。したがって、東側に展開する掘立柱建物跡（ＳＢ1089）と考え、５月２日にその柱穴を半裁した。10日にⅢ層上面で発見した遺構の写真撮影を行い、12日にそれらの調査を完了した。13日から16日にかけて、下層の水田跡の調査を目的とし、重機によってⅢ層を除去した。ただし、Ｂ区の西側は住宅地に近接しておりその造成時の盛土が約１ｍあることから、安全を確保するためⅢ層上面までの調査にとどめた。18日にはV-１層上面にて畦畔や水路跡を発見し、また古墳時代前期の遺物が出土したことから、この頃の水田跡である

ことが明らかとなった。６月７日にＢ区Ｖ層の水田跡の写真撮影を行い、８日から10日までＶ－１層を除去してＶ－２層上面で遺構検出作業を行ったが、畦畔などは発見できなかった。13日からⅦ層上面まで掘り下げたところ溝状の落ち込みを発見し、これの埋土を掘り下げた。17日に、Ⅶ層上面で発見した遺構の写真撮影と補足的な調査を行った後、器材を撤収した。22日に重機により埋め戻しを行い、第51次調査の現地発掘調査を終了した。

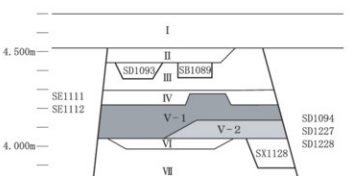


第２図　調査区配置図

７月12日に第51次調査の北側隣接地において農業用水管埋設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、ついで８月23日に宅地造成に伴う上下水道計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書がそれぞれ提出された。農業用水管工事の規模は、長さ約30m、幅80cmで、上下水道工事の規模は、長さ約７m、幅51cmであった。このように工事の範囲が狭いことと、一部は道路を横断するために一時通行を規制して作業を行わなければならなかったことから、工事立会として10月３日から実施した。その結果、現在の道路面から約75cmの深さでＳＤ1208溝跡やＳＫ1211土壙などを発見したため、第57次調査として本発掘調査を実施した。調査期間は工事の進捗状況に合せて３・６・18日の計３日間で行った。発掘基準線は、第51次調査と同じものを使用し、以後実測図作成、写真撮影など随時行った。６日に南側へ延びる宅地への引き込み部分を調査し、ＳＤ1209溝跡を発見した。18日に東側の農業用配水管部分の調査を行ったところ、ＳＤ1207溝跡を発見し、埋土を掘り下げた。その後器材を撤収し、第57次調査の現地発掘調査を終了した。

２．調査成果

（１）層序



第３図　層序模式図
※トーンは水田層

Ⅰ　層：現代の水田耕作土で、厚さは10～25cm。

Ⅱ　層：オリーブ黒色または暗オリーブ褐色砂質土層で、厚さは６～18cm。Ａ区の一部に確認できる程度であるが、本来は広い範囲に分布していた可能性が考えられる。古代の遺構を覆っており、この上面が中世の遺構検出面となる。遺物は出土していない。

Ⅲ　層：浅黄色シルト層で、一部に粗い暗褐色砂を筋状に含む。厚さは16～40cm。古代・中世の遺構検出面。遺物は出土していない。

Ⅳ　層：黒色粘土層で、黄褐色粘土層を筋状に含む。厚さは２～15cm。後述するＶ層水田跡の低い部分に厚く堆積しており、これを覆う自然堆積層と考えられる。古墳時代中期の遺物が出土している。

Ⅴ　層：２層に細分できる。いずれの層も底面に凹凸が有り、分析の結果多量のプラント・オパールを検出していることから水田耕作土と考えられる（附章１参照）。上層のⅤ－１層は黄灰色粘土層で、厚さは４～24cm。一部、Ⅴ－２層を壊しⅥ層に達している。Ⅴ－２層はオリーブ黒色粘土層で、厚さは４～20cm。Ⅴ－１層から古墳時代前期の遺物が出土している。

Ⅵ　層：Ｂ区東側にのみ分布する黒色粘土層で、Ⅶ層の砂をブロック状に少量含む。厚さは６～12cm。

Ⅶ　層：灰白色砂層。この上面が最終遺構検出面となる。

（２）発見した遺構・遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙、水田跡等を発見した。以下、各層ごとに発見した遺構について述べる。

Ⅶ層上面

ＳＸ1128（第４・５・６図）

第４図　ＳＸ1128 断面図

Ｂ区中央で発見した浅い溝状の落ち込みである。規模は、長さ11.7m以上、上幅3.5m、下幅1.5m、深さ25cmである。方向は、東で約26度南に偏する。底面はやや起伏があり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は４層に区分でき、１層は黒褐色粘質土、２層は１層の粘質土をブロック状に少量含む灰オリーブ色粘土、３層はⅦ層の砂を筋状に少量含む黒色粘土、４層は筋状の黒色粘土とブロック状の細かい砂をそれぞれ少量含む灰オリーブ粘質土である。

遺物は出土していない。

ＳＸ1129（第６図）

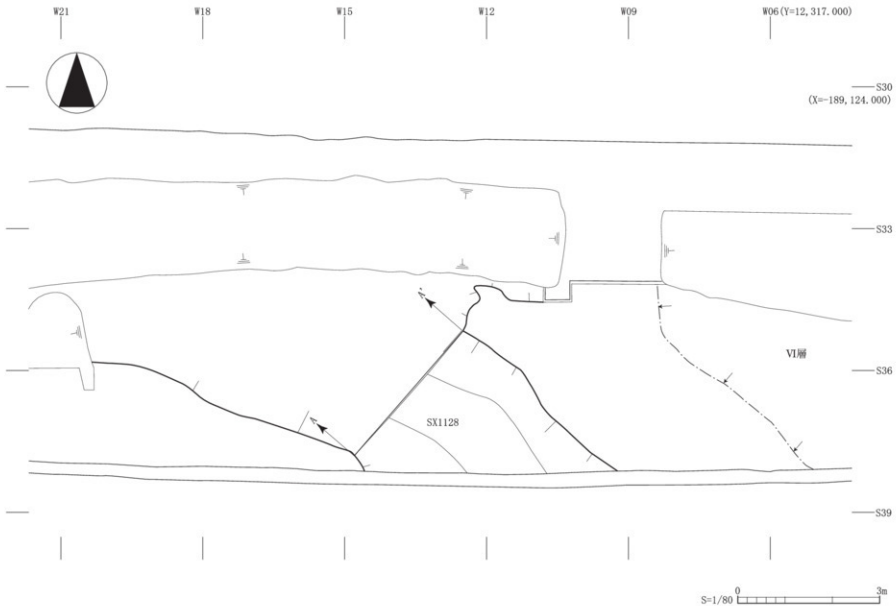
Ｂ区西側で発見した浅い落ち込みである。この地点ではⅢ層上面までの調査にとどめたことから、調査区南壁の断面でのみ確認した。規模は、上幅2.4m、下幅46cm、深さ26cmである。底面はやや窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は２層に区分でき、１層は浅黄色粘土、２層は黒色粘土である。

遺物は出土していない。

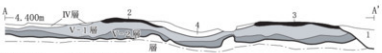
Ⅴ層水田跡（第６・７図、第１表）

Ⅴ層は二つの層に細分できる。畦畔等はⅤ－１層でのみ発見しており、Ⅴ－２層では確認できなかった。しかし、Ⅴ－１層とⅤ－２層が調査区全域で明瞭に区分できること、どちらの底面にも凹凸が認められ、多量のプラント・オパールが検出されたことから、ここでは２時期の水田跡と考えた。なお、本来Ⅴ－２層に存在した畦畔等の施設は、新しいⅤ－１層の水田をつくる際に壊されたものと理解しておきたい。以下、Ⅴ－１層で検出した遺構について述べる。

水田区画はＡ区の南側からＢ区にかけて13区画確認し、北側ほど遺存状態が悪い。古代・中世の遺構や攪乱に壊されており、区画の全体を把握できたものはない。平面形は、多くは方形を基調とし、ＳＸ1124・1125およびＳＤ1127の方向に規制されることで台形となるものもある。規模は、一辺1.8～6.2mである。水田面の標高は平均4.25mで、区画の①～③・⑬が約4.3mであるのに対して、④～⑫は約4.2mであることから、おおむねＳＤ1127、ＳＸ1224・1225の北側が高く、南側が低い。その比高は約11cmである。

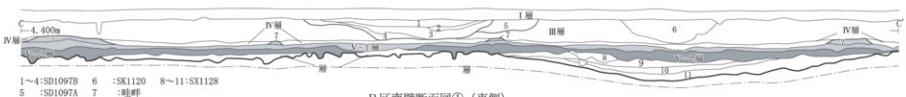

W21
W18
W15
W12
W09
W06(Y=12,317.000)
S30
(X=-189,124.000)
S33
S36
S39
VI層
SX1128
S=1/80
0
3m

第５図　遺構平面図（１）

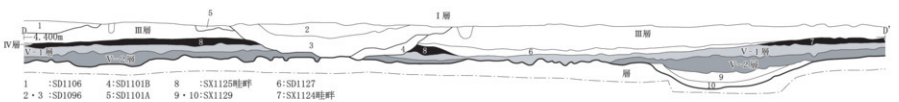


ＳＸ1124・1125、ＳＤ1127断面

ＳＸ1124断面図

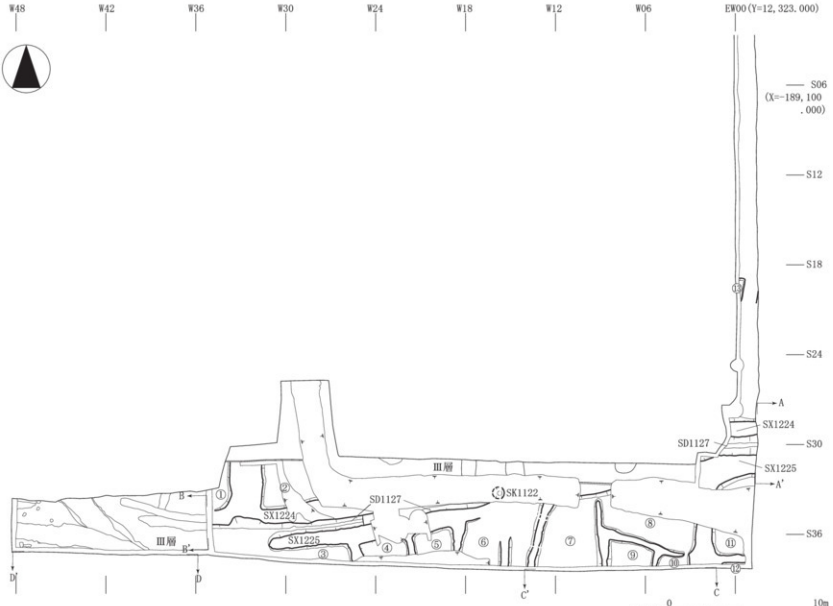


Ｂ区南壁断面図①（東側）



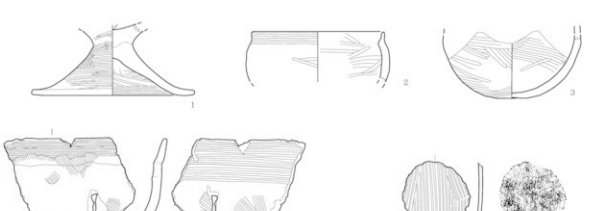
Ｂ区南壁断面図②（西側）

第６図　古墳時代水田跡断面図



第７図　Ⅴ層水田跡平面図

※○中の数字は第１表の水田区画番号に対応する



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・器台	Ⅴ－1層	ハケメ→ヘラミガキ	シボリメ→ハケメ→ヨコナデ	－	(13.1) 1/24	－	4-1	R27	（または高杯）
2	土師器・杯	Ⅴ－1層	口縁：ヨコナデ、体部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	(10.4) 4/24	－	－	4-3-1	R15	
3	土師器・杯	Ⅴ－1層	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	－	－	4-3-5	R25	
4	土師器・杯	Ⅴ－1層	口縁：ヨコナデ→ナデ、体部：ヘラミガキ、粘土紐積み上げ痕		－	－	－	4-3-4	R24	煤付着
5	土師器・甕	Ⅴ－1層	ハケメ→手持ちヘラケズリ	ナデ	－	－	－	4-3-2	R23	土器片円板

第８図　Ⅴ層水田跡出土遺物

区画番号	形状	面積(㎡)	長辺（m） 最大	長辺（m） 最小	短辺（m） 最大	短辺（m） 最小	水田面の標高 最高値(m)	水田面の標高 最低値(m)	水田面の標高 平均値（m）	水田面の標高 高低差(cm)	備考
①	方形か	1.68以上	3.09		0.4		4.35	4.26	4.3	9	
②	方形	9.60以上	3.74		2.86		4.33	4.24	4.28	9	長辺は推定
③	方形	4.37以上	4.77		1.12		4.29	4.25	4.27	4	
④	方形	3.36以上	3.13		0.98	0.82	4.23	4.22	4.22	1	
⑤	方形	3.13以上	2.84		1.18	0.53	4.26	4.17	4.21	9	
⑥	方形	6.61以上	3.88	2.58	1.34		4.2	4.16	4.18	4	
⑦	台形	16.04以上	4.42	3.73	4.28	2.71	4.22	4.16	4.19	6	
⑧	台形	12.39以上	6.21		2.04	1.65	4.22	4.16	4.19	6	
⑨	方形か	4.53以上	3.07		1.77	1.01	4.24	4.16	4.2	8	
⑩	方形か	1.34以上	1.75		0.88	0.48	4.23	4.18	4.2	5	
⑪	方形	13.44以上	4.63		2.86	1.89	4.27	4.19	4.23	8	長辺は推定
⑫	－	0.17以上	1.14		0.12		4.25	4.19	4.2	6	
⑬	－	0.40以上	1.21		0.31		4.31	4.3	4.3	1	

第１表　Ⅴ層水田跡計測表

ＳＤ1127を挟んで２本のＳＸ1224・1225畦畔が平行して東西方向に延びており、そこから分岐して南北の畦畔がある。この２本の畦畔は、黒褐色粘土を盛り上げてつくられているため、水田耕作土とは明瞭に区分することができる。他の畦畔はこれよりも低くなっており、その土はⅤ－１層とほとんど変わらない。ＳＸ1124・1125の長さはＢ区西側の調査区南壁断面にて確認した長さを含めると45m以上で、そのうち平面で確認したのは約36.9mである。方向は、東で約12度北に偏する。規模は、ＳＸ1224・1225については上幅0.7～1.3m、下幅1.3～2.1m、高さ５～13㎝で、ＳＤ1127については、上幅0.6～1.4m、下幅20～26

cm、深さ８～17cmである。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がっている。この底面は水田面との標高を比べると、底面の方が約13cm低くなっている。その他の畦畔についてみると、規模は、上幅0.2～1.3m、下幅0.5～1.7m、高さ２～７cmである。また、水口はＢ区東側の２カ所で確認しており、規模は、上幅33～50cm、下幅8～23cmである。

遺物は、古墳時代前期の土師器杯（第８図２～４）・器台（第８図１）・甕（第８図５）が出土している。

ＳＫ1122土壙（第７・15図）

Ｂ区中央のＳＤ1227の底面で発見したもので、埋土の特徴がＶ層に近似することから、Ｖ層水田跡に近い時期と考えた。平面形はほぼ円形で、規模は上幅78cm、下幅52cm、深さ30cmである。底面は平坦で壁は斜めに立ちあがる。埋土は黒褐色粘土である。

遺物は出土していない。

Ⅱ層・Ⅲ層上面

ＳＢ1089掘立柱建物跡（第９・31図）

Ａ区北側のⅢ層上面で発見した桁行４間、梁行１間以上の南北棟掘立柱建物跡と考えられる。その西側では組み合う柱穴を確認できなかったことから、調査区の東側に展開すると考えられる。ＳＢ1090と重複しているが、柱穴に直接切り合いがないため、新旧関係は不明である。全ての柱穴で柱のあたり痕跡を残す抜取り穴を確認した(註)。方向は北で１度東に偏しており、総長は9.31m、柱間は北より1.96m、2.61m、2.75m、1.99mである。掘り方の平面形は概ね方形で、規模は１辺54～98cm、深さは16～39cmである。掘り方埋土は灰オリーブ色砂で、Ⅲ層の浅黄色シルトと灰白色火山灰をブロック状に含む。柱抜取り穴は黒褐色・オリーブ黒色・暗オリーブ褐色の砂である。

遺物は、掘り方から土師器杯（ＢⅤ類）（第14図１）・甕（Ｂ類）、須恵器甕、須恵系土器杯が出土しており、このうち土師器甕（Ｂ類）は、ＳＤ1096から出土したもの（第17図２）と接合している。柱抜取り穴からは須恵器杯・甕、土師器杯（ＢⅤ類）、須恵系土器杯が出土している。

第９図　ＳＢ1089掘立柱建物跡柱穴断面図

ＳＢ1090掘立柱建物跡（第32図）

Ａ区中央のⅢ層上面で発見した南北２間、東西１間以上の掘立柱建物跡である。ＳＢ1089、ＳＥ1109と重複しているが、直接柱穴との切り合いがないため、新旧関係は不明である。全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、北で約６度東に偏しており、柱間は北より約3.9m、約4.2mである。柱穴の平面形は

（註）柱のあたり痕跡を残す抜取り穴としたものは、その形状をみると平面が円形で、断面もほぼ直立するなど柱痕跡と類似した特徴をもっている。しかしその埋土は、木材が腐食した粘土ではなく砂であること、また遺物も出土することから、柱痕跡とは明確に区別するべきものであると考えられる。ただし、柱の位置については本来の位置を反映していると考えられることから、柱痕跡と同様の精度・計測で表示している。

概ね円形で、規模は直径34～44cmである。柱抜取り穴の埋土は黒色シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＥ1109井戸跡（第11・32図）

A区ほぼ中央のⅢ層上面で発見した素掘りの井戸跡である。ＳＢ1090掘立柱建物跡と重複しているが、直接柱穴との切り合いが無いため新旧関係は不明である。平面形は円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、直径1.1m、深さは90cmである。埋土は３層に区分できる。１層は黒褐色粘質土で、黒色粘土とⅡ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。２層は、黒褐色砂で、３層はオリーブ黒色砂質土と黒色砂質土を互層に堆積している。

遺物は、１層から須恵器甕、土師器杯（ＢＶ類）・甕（Ｂ類）、須恵系土器杯が、３層から土師器杯（Ｂ類）、ヘラ状木製品（第14図８）が出土している。ヘラ状木製品については使用痕が無く、付着物もない。また、厚さが2.5mmと非常に薄く、ヘラとして実用に耐えるものとは考えにくいと思われる。

ＳＥ1110井戸跡（第32図）

A区中央のⅢ層上面で発見した素掘りの井戸跡である。ＳＫ1116・1117・1121と重複しており、これらより新しい。平面形は円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、直径約90cmである。調査中に、埋土が崩落したため、埋土の状況および深さは不明であるが、確認できた最上層の埋土は黒色シルトである。

遺物は、１層から土師器甕（Ｂ類）が出土している。

ＳＥ1111井戸跡（第11・33図）

A区南側のⅡ層上面で発見した素掘りの井戸跡である。ＳＤ1097Ｂと重複しており、これより新しい。平面形は円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上方でやや開く。規模は、長径が1.4m、短径は80cmで、深さは１mである。埋土は２層に区分できる。１層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む黒色シルトであることから人為的に埋め戻されたと考えられる。２層は褐灰色砂である。

遺物は、１層から須恵器杯が出土している。

ＳＥ1112井戸跡（第11・32図）

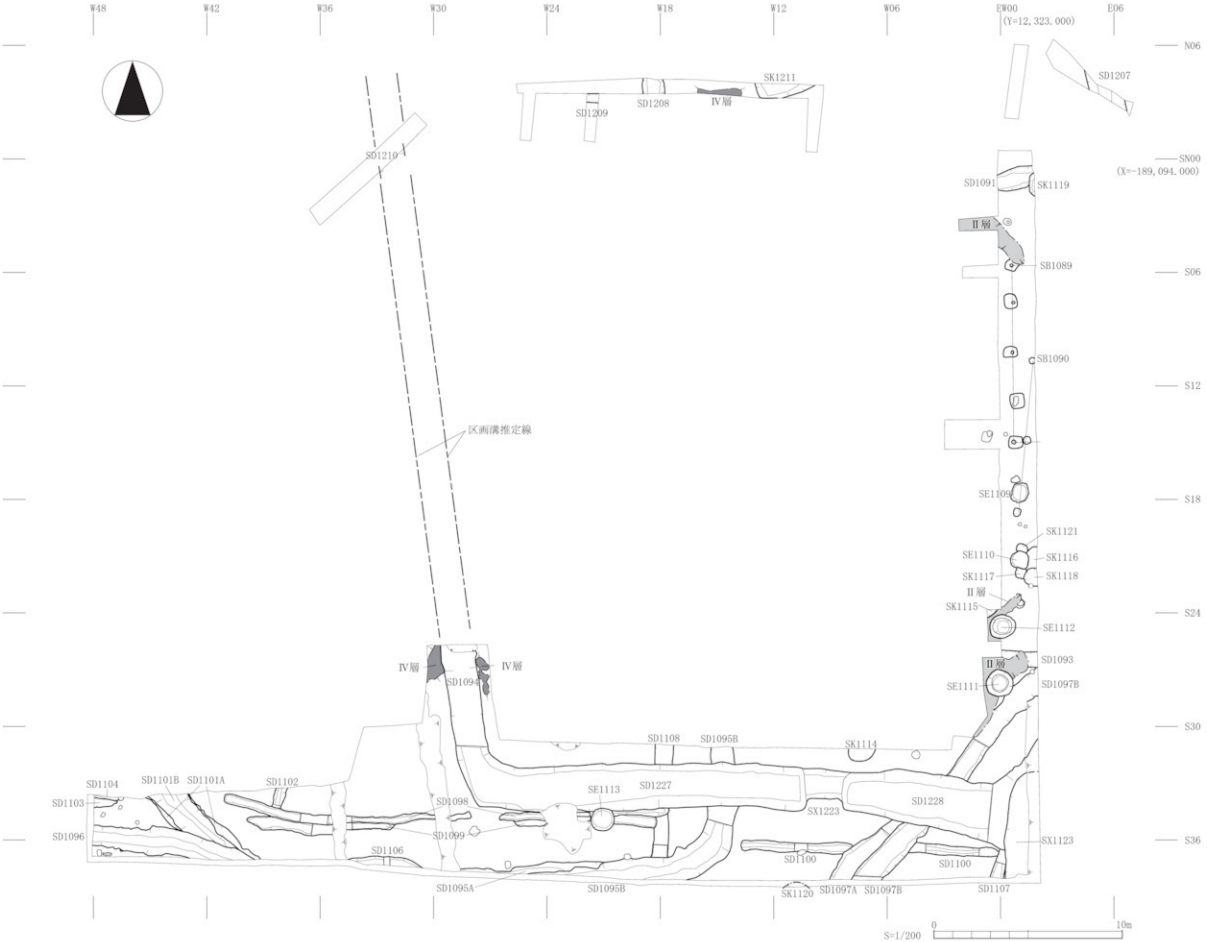
A区南側のⅡ層上面で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上方でやや開く。規模は、直径約1.3m、深さは1.2mである。調査中に、埋土が崩落したため、その状況は不明であるが、最上層で確認できた埋土は、黒色シルトである。

遺物は、１層から須恵器杯（Ｖ類）、土師器杯・甕、須恵系土器杯、銭貨〔天聖元寶〕（第14図９）が、２層から無釉陶器擂鉢（第14図４）が、３層から須恵器杯（Ⅲ類）・甕、無釉陶器甕（第14図５）が出土している。

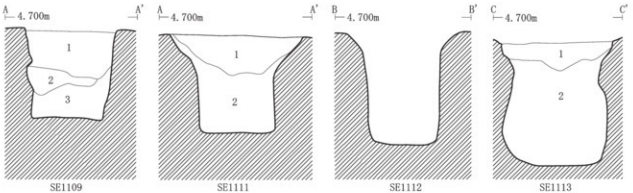
ＳＥ1113井戸跡（第11・34図）

B区のⅢ層上面ほぼ中央で発見した素掘りの井戸跡である。ＳＤ1098・1099・1227と重複しておりこれらより新しい。平面形は円形で、壁は底面から左右に膨らみながら立ち上がり、上方でやや開く。規模は直径1.2mで、深さ1.3mである。埋土は２層に区分でき、１層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に少量含む黄灰色粘土で、２層は植物遺体を多く含む黒色粘土である。

遺物は、土師器甕（Ｂ類）、須恵系土器杯が出土している。



第10図　第51・57次調査区　Ⅱ・Ⅲ層上面検出遺構平面図

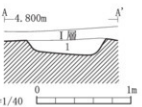


第11図　井戸跡断面図

ＳＤ1091溝跡（第12・31図）

Ａ区北側のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＫ1119と重複しており、これより古い。規模は長さ２m以上、上幅0.7～1.2m、下幅50～70cm、深さ11～19cmである。方向は東で約11度北に偏している。底面はほぼ平坦で、調査区内での比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は下層にやや粗い砂と灰白色火山灰を粒状に少量含んでいる暗灰黄色砂質土である。

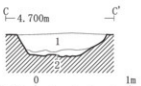
遺物は、土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵系土器杯が出土している。



第12図　ＳＤ1091断面図

ＳＤ1093溝跡（第13・32図）

Ａ区南側のⅡ層に覆われ、Ⅲ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ1097Ｂと重複しており、これより古い。規模は長さ2.8m以上、上幅70～92cm、下幅48～64cm、深さは16～21cmである。方向は東で約１度南に偏している。底面はほぼ平坦であり、調査区内での比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は２層に区分でき、１層は白い砂粒を含む暗灰黄色砂で、２層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む暗灰黄色砂である。

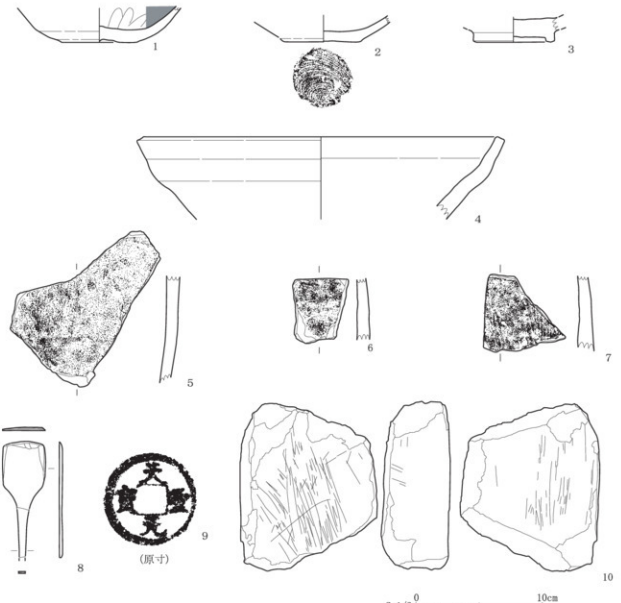


第13図　ＳＤ1093断面図

遺物は、灰釉陶器瓶、須恵器杯（Ｖ類）（第14図２）・甕、土師器杯（ＢＶ類）・甕、須恵系土器杯が出土している。

ＳＤ1094・1210・1227・1228溝跡、ＳＸ1223土橋（第10・15・33・34図）

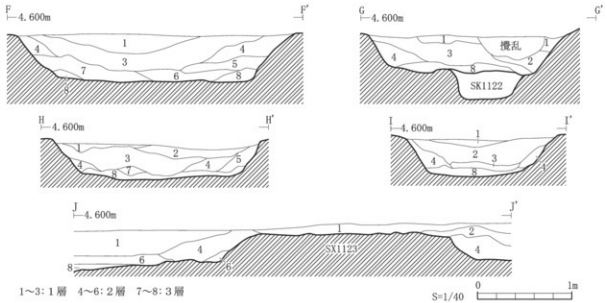
Ｂ区および第57次調査区西側のⅢ層上面で発見した区画溝である。南辺については、ＳＸ1223土橋を境に西側をＳＤ1227、東側をＳＤ1228とし、西辺についてはＳＤ1094とした。また、ＳＤ1094の北側延長線上ではＳＤ1210を発見しており、同一の区画溝と考えられる。また、ＳＤ1228については、南東隅付近で北に曲がる様子を示しながら、調査区外へと延びている。ＳＤ1095Ｂ・1097・1098・1107・1108、ＳＥ1113、ＳＸ1123と重複しており、ＳＥ1113、ＳＸ1123より古く、ＳＤ1098Ｂ・1097・1098・1107・1108より新しい。区画の範囲は東西28.1m以上、南北34.2m以上である。溝の規模は上幅1.6～3.6m、下幅１～２m、深さ31～55cmである。底面に凹凸は無く、おおむね平坦である。壁は斜めに立ち上がっている。方向は、ＳＤ1227・1228では東で約１度南に偏しており、ＳＤ1094では北で約８度西に偏している。埋土は全て自然堆積であり、３層に大別される。１層は黒褐色砂質土もしくは粘土であり、上層ほど砂を多く含む。２層は黒褐色砂質土でⅢ層の浅黄色シルトもしくは砂をブロック状に含んでおり、上層ほど砂が多い。３層は黒褐色粘質土で下層ほどⅦ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む。ＳＸ1223土橋は、南辺やや



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	SB1089・P6 掘り方埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	－	4.8 24/24	－	－	R2	BV類
2	須恵器・杯	SD1093・1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	4.6 24/24	－	－	R18	V類
3	青磁・椀	SD1094・1層	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	5.8 24/24	－	5-1-7	R12	
4	無釉陶器・擂鉢	SE1112 2層	ヨコナデ	ヨコナデ	(28.4) 4/24	－	－	5-1-3	R8	
5	無釉陶器・甕	SE1112 3層	ヘラナデ	ヨコナデ	－	－	－	5-1-4	R89	
6	無釉陶器・甕	SD1227・1層	ナデ	ナデ	－	－	－	5-1-2	R11	
7	無釉陶器・甕	SD1227・1層	ヘラナデ	ヨコナデ	－	－	－	5-1-1	R17	
8	木製品・ヘラ状木製品	SE1109・3層	長さ：9.2　幅：3.3　厚さ：0.25　木取り：板目					－	R1	
9	銭貨	SE1112・1層						－	R1	天聖元寶
10	砥石	SD1227・1層	長さ：10.8　幅：8.8　厚さ：4.25　砥面3面					－	R20	

第14図　SB1089、SE1112、SD1093・1094出土遺物



第15図　ＳＤ1094・1227・1228、ＳＸ1123断面図

東寄りで確認した。規模はＳＤ1227・1228間で2.3m、幅1.4～1.7mであり、区画溝より幅がやや狭い。検出面より10cm深く掘り込まれているものの、ＳＤ1227・1228底面から約30cm高く残されている。

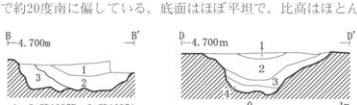
遺物は１層から須恵器杯（Ｖ類）・甕、土師器杯（ＢⅠ類）・甕、須恵系土器杯・高台付杯、砥石（第14図10）が、２層から須恵器杯・甕、土師器杯（ＢⅤ類・ＢⅡ類・Ａ類）・甕、須恵系土器杯、無釉陶器甕（第14図６・７）、青磁椀（第14図３）、砥石、鉄滓が出土している。

ＳＤ1095・1096・1106溝跡（第10・16・34・35図）

Ｂ区中央のⅢ層上面で発見した溝跡で、２時期の変遷（Ａ→Ｂ）があることを確認した。ＳＤ1095・1096・1106は、調査区の南側へとそれるため、これらが同一の溝跡かどうか確認することはできなかったが、位置関係や規模、埋土についてみると、ＳＤ1095のＡ期はＳＤ1106に、またＢ期はＳＤ1096にそれぞれ近似しており、一連の溝跡と考えられる。以下、この対応関係にしたがって述べる。

Ａ期：ほとんどがＢ期に壊され、東西方向の溝跡のみを発見した。規模は、長さ18.9m以上、上幅54cm以上、下幅26cm以上、深さ10～13cmである。方向はおよそＢ期と同じと思われる。底面はほぼ平坦で、比高はほとんど無い。壁はやや急に立ち上がる。埋土はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む黄灰色砂である。遺物は出土していない。

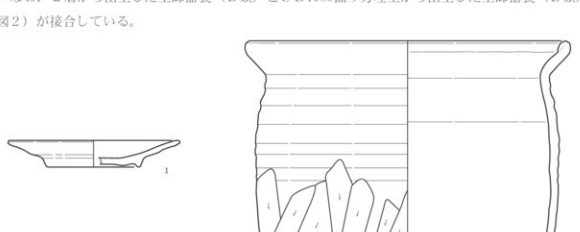
Ｂ期：ＳＤ1108・1227と重複しており、ＳＤ1227より古く、ＳＤ1108より新しい。規模は、長さ38.3m以上、上幅1.1～1.7m、下幅34～86cm、深さ23～40cmである。方向は、ＳＤ1095の東西方向でみると東で約12度北に、南北方向でみると北で約２度東に偏している。またＳＤ1096の西側では東で約６度南に、東側ではやや南に屈曲し東で約20度南に偏している。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立



第16図　ＳＤ1095・1096断面図

ち上がっている。埋土は４層に区分でき、１層は黒色粘土、２層は褐灰色粘質土、３層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に少量含む褐灰色粘質土、４層は黄灰色粘土である。

遺物は、１層から須恵器杯・甕、土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵系土器杯・高台付杯（第17図１）、２層から須恵器杯、土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵系土器杯、３層から須恵系土器杯が出土している。なお、２層から出土した土師器甕（Ｂ類）とＳＢ1089掘り方埋土から出土した土師器甕（Ｂ類）（第17図２）が接合している。



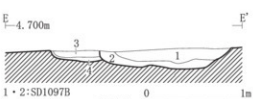
単位：cm

番号	種　類	遺構・層位	特　徴 外　面	特　徴 内　面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
1	須恵系土器・高台付杯	ＳＤ1095・１層	ロクロナデ、底部：不明	ロクロナデ	(11.0) 8/24	(6.0) 10/24	1.7		R６	
2	土師器・甕	ＳＤ1096・２層	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(25.2) 16/24	－	17.0		R19	B類

第17図　ＳＤ1095・1096出土遺物

ＳＤ1097溝跡（第18・33図）

Ａ区南側からＢ区東側にかけて発見した南西から北東方向に延びる溝跡である。Ⅱ層に覆われ、Ⅲ層上面で発見した。また２時期の変遷（Ａ→Ｂ）があることを確認した。ＳＤ1093・1100・1228、ＳＥ1111と重複しており、ＳＤ1093・1100より新しく、ＳＤ1228、ＳＥ1111より古い。



第18図　ＳＤ1097断面図

Ａ期：Ｂ期とＳＤ1228に壊されているため、ＳＤ1228の南側で約4.8m発見したのみである。規模は、上幅94cm以上、下幅54～74cm、深さは８～13cmである。方向はおよそＢ期と同じと思われる。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は２層に区分でき、１層は砂を多く含む黒褐色粘土、２層は暗灰黄色砂である。

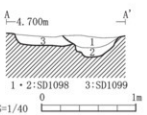
遺物は出土していない。

Ｂ期：南西から北東方向に延びており、北側でやや東に曲がる。規模は、長さ14.8m以上、上幅１～1.3m、下幅0.6～１m、深さ９～18cmである。方向は北で約41度東に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は２層に区分でき、１層は黒色粘土と黒褐色砂の互層で、２層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む暗灰黄色砂層である。

遺物は、１層から土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）が出土している。

ＳＤ1098溝跡（第10・19・34・35図）

B区中央から西側のⅢ層上面で発見した東西溝である。遺存状態が悪く、また削平がやや深く及んでいる部分で途切れているが、その位置関係や規模、埋土の特徴などから同一の溝跡と判断した。ＳＤ1099・1102・1108・1227、ＳＥ1113と重複しており、ＳＤ1099・1102・1108より新しく、ＳＤ1227・ＳＥ1113より古い。規模は、長さ22.1m、上幅52cm、下幅36cm、深さ５～16cmである。方向は東側では東で約２度北に、西側ではやや北に曲がり東で約14度南に偏している。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は２層に区分でき、１層は灰白色火山灰を少量含む黄灰色土、２層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む黄灰色土である。



第19図　ＳＤ1098・1099断面図

遺物は１層から土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）が出土している。

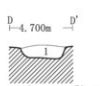
ＳＤ1099溝跡（第10・19・34・35図）

B区中央から西側にかけてのⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。遺存状態が悪く、また削平がやや深く及んでいる部分で途切れているが、その位置関係や規模、埋土の特徴などから同一の溝跡と判断した。ＳＤ1098・1108、ＳＥ1113と重複しており、ＳＤ1108より新しく、ＳＤ1098、ＳＥ1113より古い。規模は、長さ22m、上幅72cm、下幅58cm、深さ７～16cmである。方向は、東側でほぼ東西方向の発掘基準線と一致し、西側ではやや北に曲がり東で約３度南に偏している。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は２層に区分でき、１層は灰白色火山灰を少量含む黄灰色土、２層は灰白色火山灰とⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に少量含む黄灰色土である。

遺物は１層から土師器杯（Ｂ類）が出土している。

ＳＤ1100溝跡（第20・33図）

B区東側のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ1097・1107と重複しており、これらより古い。規模は、長さ12.9m、上幅42～62cm、下幅12～24cmである。方向は東で約２度南に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。急に立ち上がっている。埋土は粗砂とⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に含む暗褐色砂質土である。



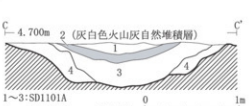
第20図　ＳＤ1100断面図

遺物は検出時に最上層から土師器甕（Ｂ類）が出土している。

ＳＤ1101溝跡（第21・35図）

B区西側のⅢ層上面で発見した北西から南東方向に延びる溝跡である。ＳＤ1096と重複しており、これより古い。２時期の変遷（Ａ→Ｂ）があることを確認した。

Ａ期：ほとんどをＢ期によって壊されており、規模は、長さ5.1m以上、上幅1.8m、下幅0.5～1.1m、深さ26～40cmである。方向はおよそＢ期と同じと思われる。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は１層確認でき、Ⅲ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む黄灰色土である。



第21図　ＳＤ1101断面図

遺物は、土師器杯（Ｂ類）が出土している。

B期：規模は、長さ4.1m以上、上幅1.5m、下幅24～64cm、深さ25～48cmである。方向は、北で31度西に偏している。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がる。埋土は３層に区分でき、１層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む黄灰色土、２層は灰白色火山灰の自然堆積層、３層は黄灰色粘質土である。

遺物は土師器杯（B類）が出土している。

ＳＤ1102溝跡（第22・35図）

B区西側のⅢ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ1098と重複しており、これより古い。規模は、長さ1.2m以上、上幅44～60cm、下幅22cm、深さ７～10cmである。方向は、北で約21度東に偏している。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は２層に区分でき、１層は灰白色火山灰とⅢ層の浅黄色シルトを粒状に少量含むオリーブ黒色砂質土、２層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む灰オリーブ砂質土である。

第22図　ＳＤ1102断面図

遺物は出土していない。

ＳＤ1103溝跡（第23・35図）

B区西側のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ1104と重複しており、これより古い。規模は、長さ1.6m以上、上幅58cm以上、下幅28cm以上、深さ10cmである。方向は概ね東西方向の発掘基準線と一致している。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。埋土はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む灰色粘土である。

第23図　ＳＤ1103・1104断面図

遺物は出土していない。

ＳＤ1104溝跡（第23・35図）

B区西側のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。ＳＤ1103と重複しており、これより新しい。規模は、長さ1.7m以上、上幅18cm以上、下幅16cm以上、深さ14cmである。方向は東で約６度南に偏している。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は暗オリーブ褐色粘土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ1107溝跡（第24・33図）

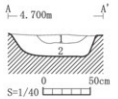
B区東側のⅢ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ1100・1228、ＳＸ1123と重複しており、ＳＤ1100より新しく、ＳＤ1228、ＳＸ1123より古い。規模は、長さ1.9m以上、上幅70cm、下幅44cm、深さ14cmである。方向は北で約19度東に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は急に立ち上がっている。埋土は粗砂を少量含む黒褐色砂質土である。

第24図　ＳＤ1107断面図

遺物は出土していない。

ＳＤ1108溝跡（第25・34図）

B区中央のⅢ層上面で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ1095B・1098・1099・1227と重複しており、これらより古い。規模は、長さ８m以上、上幅76～98cm、下幅70～76cm、深さ22cmである。方向は北で約２度東に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は２層に



第25図　ＳＤ1108断面図

区分でき、１層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に少量含む黄灰色砂質土、２層はⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に含む暗灰黄色砂である。

遺物は出土していない。

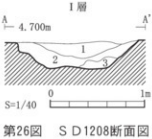
ＳＤ1207溝跡（第10図）

第57次調査区東端のⅢ層上面で発見した南北方向の溝跡である。規模は、長さ2.6m以上、上幅1.7m、下幅68cm、深さ65～68cmである。方向は、北で約13度西に偏する。その規模と位置関係から、ＳＤ1094と同一である可能性もある。埋土は黒色シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＤ1208溝跡（第26・36図）

第57次調査区中央のⅢ層上面で発見した南北方向の溝跡である。規模は、長さ83cm以上、上幅１～1.2m、下幅60～70cm、深さ16cmである。方向は北で約１度西に偏する。底面はほぼ平坦で、比高はほとんどない。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は３層に区分でき、１層は灰白色火山灰を小さいブロック状に多く含む黒褐色粘質土、２層は砂粒と灰白色火山灰を小ブロック状に多く含む黒褐色粘質土、３層は黒褐色粘質土と灰白色火山灰をブロック状に少量含む黄褐色シルトである。



第26図　ＳＤ1208断面図

遺物は、須恵器杯（Ⅲ類）が出土している。

ＳＤ1209溝跡（第36図）

第57次調査区中央のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。規模は、長さ63cm以上で、上幅48cmである。方向はほぼ東西方向の発掘基準線と一致している。

遺物は出土していない。

ＳＫ1114土壙（第33図）

Ｂ区中央北側のⅢ層上面で発見した土壙である。本発掘調査区の外にあるため精査は行わなかった。最上層の埋土は、黒色シルトである。平面形は円形と推測され、規模は、東西1.4m以上である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1115土壙（第32図）

Ａ区南側のⅡ層上面で発見した土壙である。本発掘調査区の外にあるため精査は行わなかった。最上層の埋土は、黒色シルトである。平面形は円形と推測され、規模は東西54cm以上である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1116土壙（第32図）

Ａ区のⅢ層上面で発見した土壙である。ＳＥ1110、ＳＫ1117・1118・1121と重複しており、ＳＫ1118・1121より新しく、ＳＥ1110、ＳＫ1117より古い。埋土が崩落したため、平面的な調査にとどまった。確認できた最上層の埋土は、黒色シルトである。平面形は円形で、規模は南北で上幅1.1m以上である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1117土壙（第32図）

Ａ区のⅢ層上面で発見した土壙である。ＳＥ1110、ＳＫ1116・1118と重複しており、これらより古い。埋土が崩落したため、平面的な調査にとどまった。最上層の埋土は、黒色シルトである。平面形は他の遺

構に壊されているため不明である。規模は64cm以上である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1118土壙（第32図）

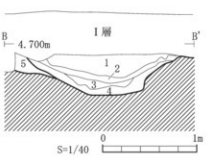
Ａ区中央のⅢ層上面で発見した土壙である。ＳＫ1116・1117と重複しておりこれらより新しい。調査区の際に位置しているため平面的な調査にとどまった。最上層の埋土は、黒色シルトである。平面形は円形で、規模は南北96cmである。

遺物は出土していない。

ＳＫ1119土壙（第27・31図）

Ａ区北側のⅢ層上面で発見した土壙である。ＳＤ1091と重複しており、これより新しい。東側のほとんどが調査区外へ広がっているため平面形は不明である。規模は、上幅1.2m以上、下幅72cm以上、深さ22～27cmである。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は４層に区分でき、１層は上方にⅢ層の浅黄色シルトをブロック状に多く含む黒褐色砂質土、２層は黒色粘土、３層は黒褐色砂質土、４層は砂を含む黒褐色砂である。

遺物は１層から土師器甕（Ｂ類）が出土している。



第27図　ＳＫ1119土壙

ＳＫ1120土壙（第６・33図）

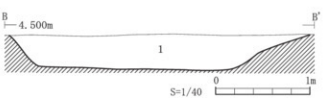
Ｂ区中央南壁のⅢ層上面で発見した土壙である。土層観察と排水のための溝によって壊されており、平面での確認はできなかった。規模は、上幅1.4m、下幅92cm、深さ34cmである。底面はやや窪んでおり、壁は斜めに立ち上がる。埋土は砂を筋状に含むオリーブ褐色シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＫ1121土壙（第32図）

Ａ区中央のⅢ層上面で発見した土壙である。ＳＥ1110、ＳＫ1116と重複しており、これらより古い。埋土が崩落したため、平面的な調査にとどまった。確認できた最上層の埋土は、黒色シルトである。平面形は円形で、規模は東西58cmである。

遺物は出土していない。

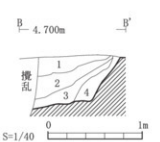


第28図　ＳＫ1211断面図

ＳＫ1211土壙（第28・36図）

第57次調査区中央のⅢ層上面で発見した土壙である。北側のほとんどが調査区外へ延びているため全体を把握することが出来なかったが、平面形は方形と考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。規模は、上幅３m以上、下幅1.8m以上、深さ29～37cmである。埋土は黒色粘土で底面に植物遺体を大量に含んでいる。

遺物は出土していない。



第29図　ＳＸ1123断面図

ＳＸ1123（第29・33図）

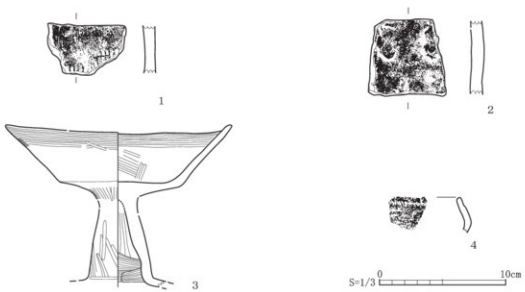
Ｂ区東側のⅢ層上面で発見した土壙状の落ち込みである。平面形は不明である。ＳＤ1228・1107と重複しており、これらより新しい。規模は、南北5.4

m以上、東西1.2m以上、深さ54cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。埋土は４層に区分でき、１層は白色砂をわずかに含む黒褐色砂質土、２層はオリーブ黒色粘質土、３層は暗オリーブ褐色砂質土、４層は暗灰黄色砂である。

遺物は出土していない。

（３）遺構外出土の遺物

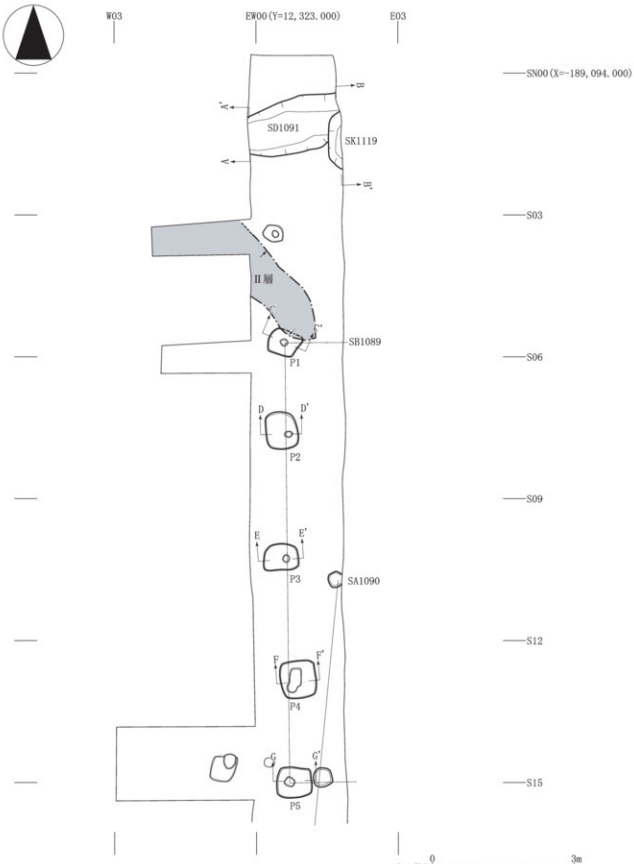
Ⅰ層からは、縄文土器深鉢（第30図４）、土師器杯（Ｂ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（ＢⅣ類）・高台付杯・甕、須恵系土器杯・高台付杯、無釉陶器甕（第30図１・２）が、Ⅳ層から古墳時代中期の土師器高杯（第30図３）が出土している。



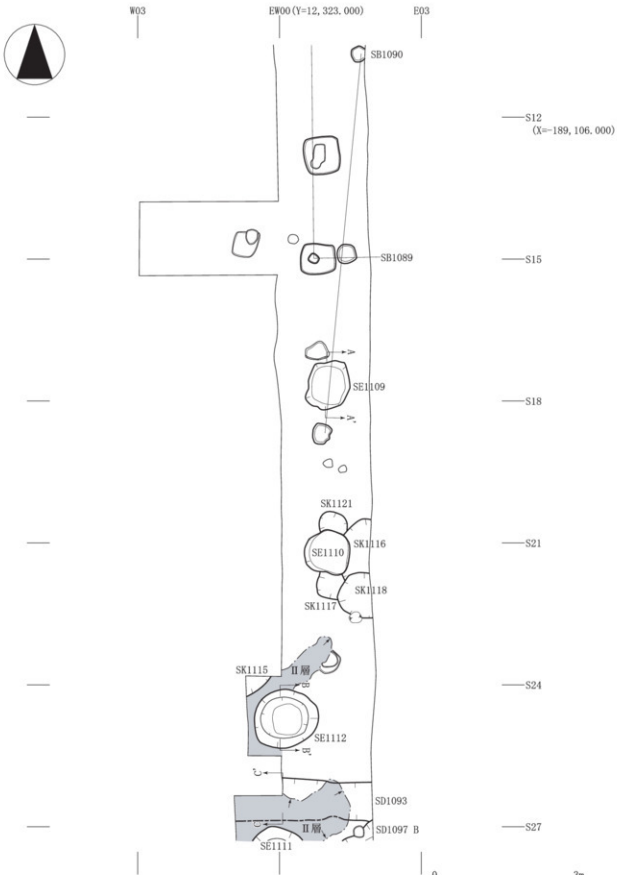
単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	無釉陶器・甕	攪乱	ヘラナデ	ヨコナデ	－	－	－	5-1-6	R7	押印（格子）東海地方産
2	無釉陶器・甕	Ⅰ層	ヘラナデ	ヘラナデ	－	－	－	5-1-5	R10	
3	土師器・高杯	Ⅳ層	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ→ヘラミガキ、シボリメ→ナデ	18.0 24/24	－	13.0以上	4-2	R26	
4	縄文土器・深鉢	Ⅰ層	横位に沈線文と刺突文		－	－	－	－	R14	縄文時代晩期

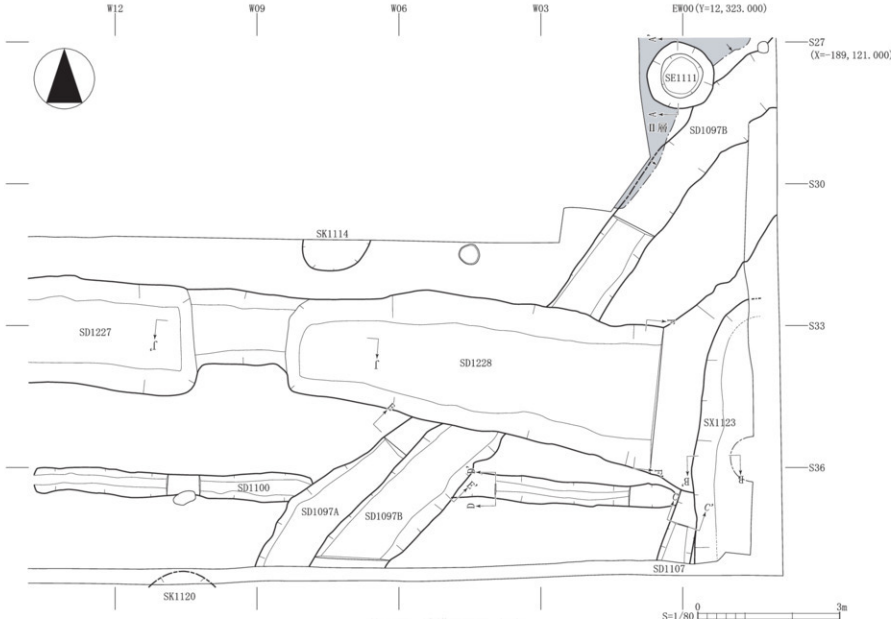
第30図　遺構外出土遺物


W03
EW00(Y=12,323.000)
E03
SN00(X=-189,094.000)
S03
S06
S09
S12
S15
SD1091
SK1119
II層
SB1089
P1
P2
P3
P4
P5
SA1090
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
S=1/80
0
3m

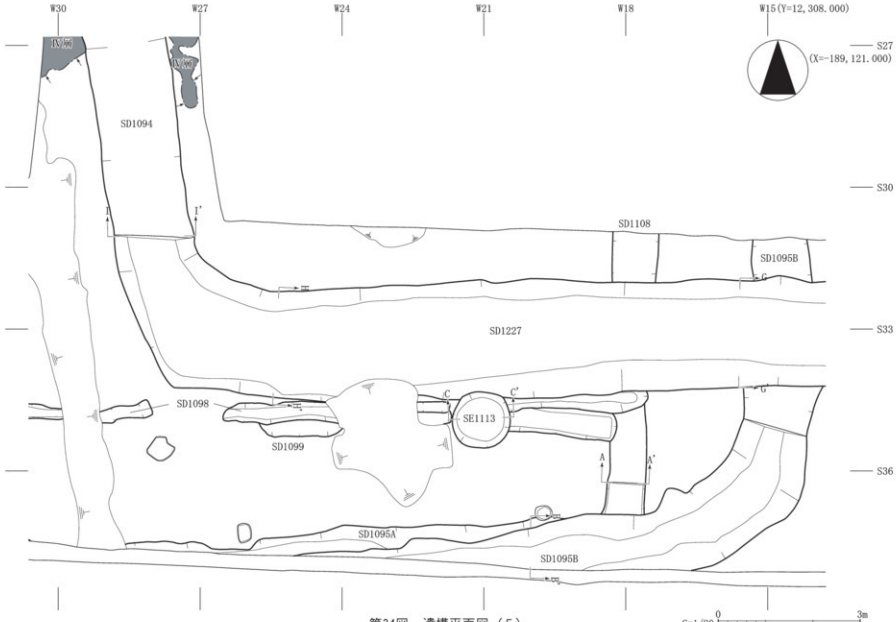
第31図　遺構平面図（2）


W03
EW00 (Y=12,323.000)
E03
SB1090
S12
(X=-189,106.000)
SB1089
S15
SE1109
S18
SK1121
SK1116
SE1110
S21
SK1118
SK1117
SK1115
II 層
S24
SE1112
SD1093
II 層
SD1097 B
S27
SE1111
0
3m
S=1/80

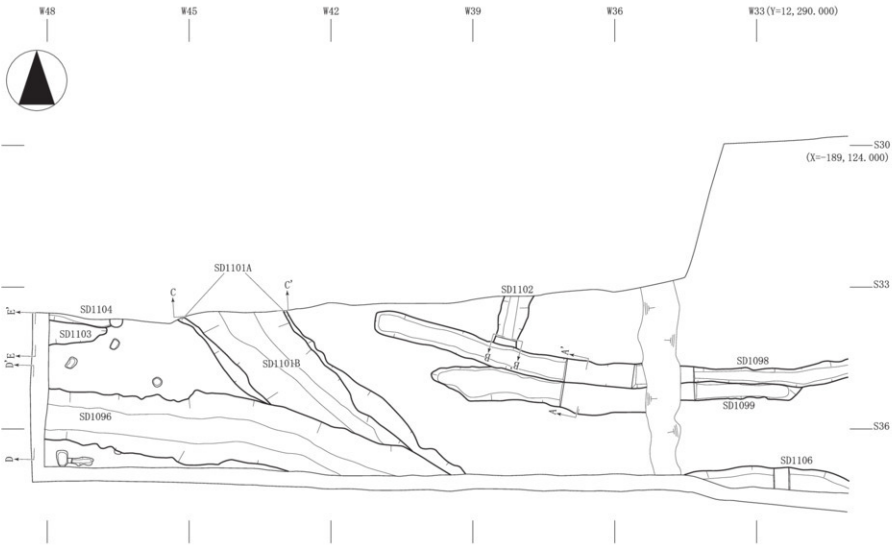
第32図　遺構平面図（３）


W12
W09
W06
W03
EW00(Y=12,323.000)
S27
(X=-189,121.000)
S30
S33
S36
SE1111
SD1097B
SK1114
SD1227
SD1228
SX1123
SD1100
SD1097A
SD1097B
SD1107
SK1120
0
3m
S=1/80

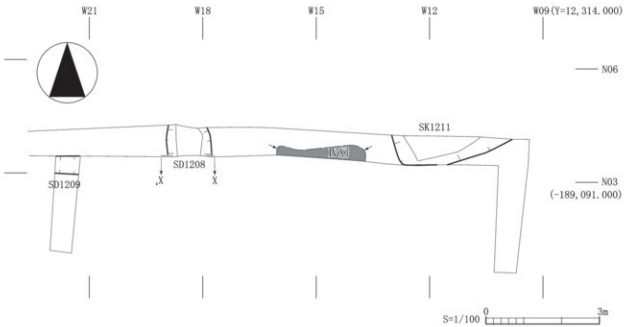
第33図　遺構平面図（4）


W30
W27
W24
W21
W18
W15(Y=12,308.000)
S27
(X=-189,121.000)
S30
S33
S36
SD1094
SD1108
SD1095B
SD1227
SD1098
SD1099
SE1113
SD1095A
SD1095B
I
I'
C
C'
G
G'
A
A'
0
3m
S=1/80

第34図　遺構平面図（5）


W48
W45
W42
W39
W36
W33(Y=12,290.000)
S30
(X=-189,124.000)
S33
S36
SD1101A
SD1101B
SD1102
SD1104
SD1103
SD1096
SD1098
SD1099
SD1106
C
C'
D
D'
S=1/80
0
3m

第35図　遺構平面図（6）



第36図　遺構平面図（７）

３．考察

（１）遺構の年代

各層ごとに今回発見した遺構の年代を考えていく。

①Ⅶ層上面

ＳＸ1128・1129を発見した。いずれも、遺物が出土しなかったため年代を考える手がかりが得られなかった。しかし、後述するⅤ層水田跡からは古墳時代前期の土師器が出土しており、それが年代の下限と考えられる。また、上限の年代については手がかりが得られなかったことから、古墳時代前期、あるいはそれ以前と考えておきたい。

②Ⅴ層水田跡

水田跡の耕作土から、古墳時代前期の土師器器台（第８図１）・杯（第８図２～４）・甕（第８図５）が出土している。器台は、脚部に透孔がなく、横方向にヘラミガキが施されるものである。ヘラミガキ前段階のハケメが観察されるなど、調整に簡略化の傾向が窺える。これらは前期でも新しい様相として捉えられるものであることから、出土した器台についても新しい段階のものと思われる。したがって、水田跡については、この頃を中心とした年代を想定しておきたい。ところで、この水田跡を覆うⅣ層から中期の土師器高杯（第30図３）が出土している。Ⅳ層は、土壌分析の結果プラント・オパールの検出密度が1,200個/ｇと水田耕作の判断基準とされる3,000個/ｇに比べて少ないことや、黒色粘土層で黄褐色粘土層を筋状に含むことなどから自然堆積層と考えられる。このことから、本地区においては、古墳時代中期頃には稲作は行われなくなったと推測される。

③Ⅱ・Ⅲ層上面

今回、Ⅱ層はＡ区のごく一部でしか確認はできなかったことから、ここでは、Ⅱ・Ⅲ層上面で発見した遺構を一括して述べる。また、出土した遺物の量が少ないことから、年代を考える際には10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰、須恵系土器や無釉陶器などの遺物に着目し考えていきたい。

灰白色火山灰や須恵系土器を含まない遺構、もしくは重複関係からこれらを含む遺構より古いことが明らかな遺構として、ＳＤ1100・1101Ａ・1103・1107・1108がある。また、ＳＤ1101Ｂについては、その埋土上層に灰白色火山灰が自然堆積していることから、10世紀前葉頃にはほとんど埋没していたと考えられる。したがって、これらの遺構は10世紀前葉以前を下限と捉えることができる。上限については、詳細に検討する資料が得られなかったが、土師器のＡ類が出土していないことからおおむね８世紀後葉以降と考えておきたい。

灰白色火山灰や須恵系土器を含む遺構には、ＳＢ1089、ＳＤ1091・1093・1095～1099・1102・1104・1208があり、10世紀前葉頃が上限年代として考えられる。また、これらの遺構はＳＤ1096・1104・1208を除き、その重複関係から後述する中世の遺構より古いことが明らかとなっている。ＳＤ1096については、出土した土師器甕（Ｂ類）がＳＢ1089の掘り方埋土から出土した土師器甕（第17図２）と接合していることから、それとほぼ同時に存在していた可能性がある。ＳＢ1089は掘り方埋土にブロック状の灰白色火山灰を含んでいることから、10世紀前葉以降に建てられたものであり、Ⅱ層に覆われていることからこの上面で検出している中世の遺構より古い。ＳＤ1104・1208については、中世の遺物が出土しておらず、また埋土が古代の遺構のものと近似していることから、中世までは降らないものと推定できよう。以上のことから、年代を限定するほどの資料が得られなかったが、上述した遺構群についてはおよそ古代の範疇におさまるものと捉えておきたい。

次に中世の遺構について考えてみる。ＳＤ1094・1227・1228からは、無釉陶器甕（第14図６・７）と12世紀中頃～13世紀前半の青磁椀（第14図３）が出土している。またＳＥ1112から1023年初鋳の「天聖元寶」（第14図９）と無釉陶器甕（第14図５）・擂鉢（第14図４）が出土している。擂鉢の特徴についてみると、体部は直線的に外傾し口縁部で内湾気味に立ち上がること、口縁端部の断面を方形に仕上げていること、内面に筋目が認められないこと、内外面ともにヨコナデ調整が施されていることがあげられる。口縁から体部中ほどまでの破片であるため、片口や高台の有無は確認できなかった。さて、このような特徴を持つ擂鉢は、宮城県北部から福島県北部の窯跡出土遺物にみられるものであり、県内では宮城県白石市一本杉窯跡群や栗原市熊狩Ａ窯跡、三本木町多高田窯跡で出土している。このうち、体部が直線的に外傾し口縁部で内湾気味に立ち上がる点に注目すれば、一本杉窯跡群のものと近似している。この窯跡の調査では、第１群遺物（13世紀中葉～後半）から第２群遺物（第１群遺物の年代以降から14世紀初頭）への変遷が示されているが、その変化は微妙な器形の違いや器種構成の割合の変化という程度で、型式的に大きな差異は認められないとしている。今回出土した擂鉢については、破片資料１点のみであり、器形の違いや器種構成を検討することが不可能であることから、ここではおよそ13世紀中葉～14世紀初頭頃のものと捉えておきたい。したがって、ＳＥ1112についてはそれ以降のものと考えられる。

一方、年代を示す遺物が出土していない遺構には、ＳＢ1090、ＳＥ1109～1111、ＳＫ1114～1119・1121・1211、ＳＤ1207がある。このうち井戸跡については井戸側などは確認できず、全て素掘りの井戸であった。また、その埋土についても黒色シルトを基本としており、中世の遺構としたＳＤ1094やＳＥ1112と近似している。多賀城市内の調査例をみると、古代には井戸側を備えたものが一般的であり、素掘りの井戸は中世以降に多い傾向が窺えることから、これらの井戸跡についても概ね中世の遺構と考えられる。ＳＢ1090やＳＤ1207、ＳＫ1114～1119・1121・1211についても埋土の状況がＳＤ1094やＳＥ1112と類似していることから、それらと近い年代が推測される。

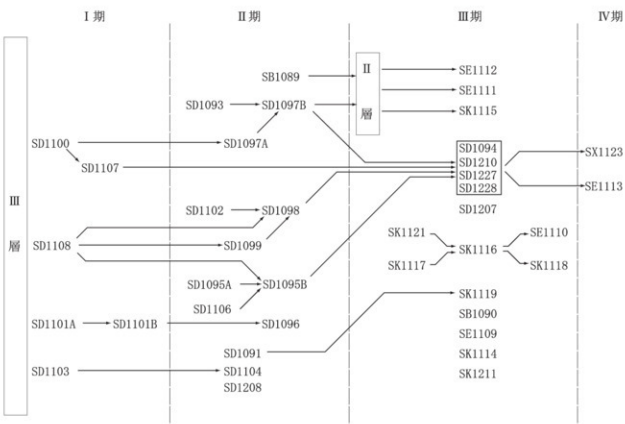
さて、これら中世として捉えた遺構の位置関係についてみると、全ての遺構が区画溝であるＳＤ1094・1227・1228の内側に存在しており、区画内部を構成している施設であると推測される。区画溝の内側に建物や井戸が配置されている様子は、本遺跡八幡地区や新田遺跡寿福寺地区で発見された屋敷跡と類似しており、今回発見した遺構も同様な屋敷跡であると考えられる。この屋敷跡については、出土した遺物が極めて少なかったことから、具体的な年代を考えるための手がかりが乏しい。したがって、屋敷跡の年代は前述したＳＥ1112の年代から推測して、およそ14世紀以降にあるものと考えておきたい。なお、ＳＤ1094からは、12世紀中頃～13世紀前半の青磁椀が出土しており、この頃の遺構の存在も推測される。

また、屋敷廃絶後の遺構と考えられるＳＥ1113とＳＸ1123は、具体的な年代を示す遺物は出土しなかったため、これ以降とだけ捉えておく。

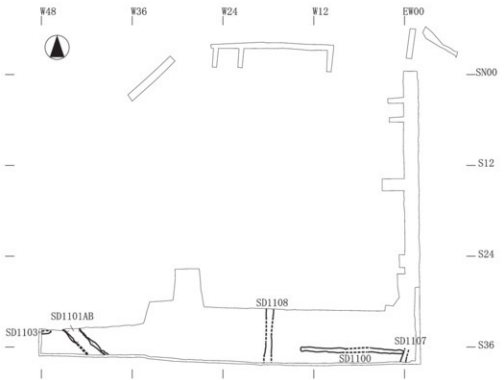
以上のことを踏まえ、遺構とⅡ層との重複関係を整理・図示すると、第37～39図の変遷図として把握することが出来る。以下、各時期の性格やその様相をまとめてみたい。

Ⅰ期：年代は８世紀後葉～10世紀前葉頃と考えられる。溝のみが存在し、その数も少ない。

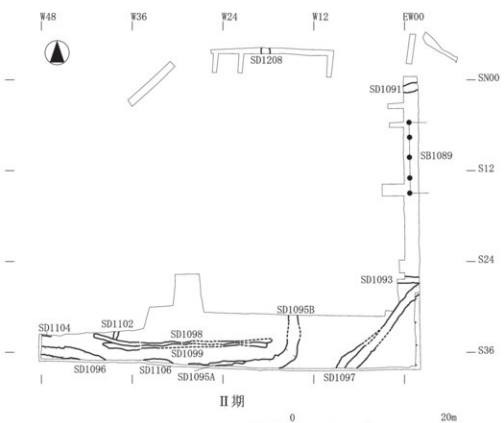
Ⅱ期：年代は10世紀前葉以降の古代と考えられる。桁行４間の南北棟掘立柱建物が建てられ、多くの溝が確認できるなどⅠ期と比べて遺構の数が増えている。ＳＢ1089とＳＤ1093の方向をみるとＳＢ1089では北で約１度東に、ＳＤ1093では東で約１度南に偏しており、同様な傾きを示している。また、ＳＤ1095Ｂについては、ＳＤ1096と同一の溝と推測でき、ＳＢ1089とＳＤ1096の出土遺物が接合したことを踏まえると、ＳＢ1089とＳＤ1093・1095Ｂ・1096はほぼ同時に存在した可能性が考えられよう。



第37図　古代・中世遺構変遷図

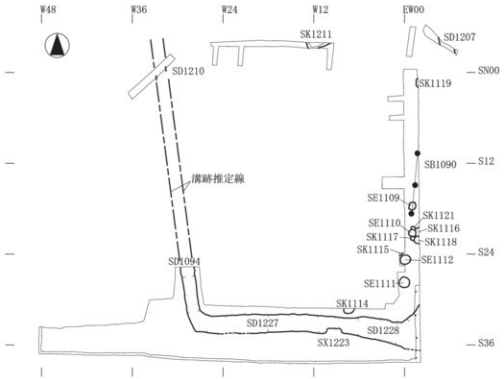


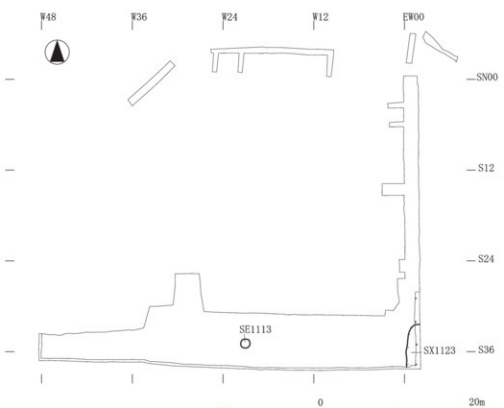
Ⅰ期



Ⅱ期

第38図　遺構変遷図（1）


W48
W36
W24
W12
EW00
SN00
S12
S24
S36
SD1210
SK1211
SD1207
SK1119
SB1090
溝跡推定線
SE1109
SK1121
SE1110
SK1116
SK1117
SK1118
SK1115
SE1112
SD1094
SE1111
SK1114
SD1227
SD1228
SX1223
Ⅲ期


W48
W36
W24
W12
EW00
SN00
S12
S24
S36
SE1113
SX1123
Ⅳ期
0
20m
S=1/500

第39図　遺構変遷図（2）

第40図　多賀城外の方格地割り

さて、Ⅰ期とⅡ期は多賀城南面に方格地割りが施工・整備された時期である（第40図）。Ⅰ期については、遺構が閑散としている状況からみて、まち並みの範囲外であった可能性が考えられる。また、地割りについて着目すると、ＳＤ1095・1096・1106が南１道路の西側延長線上に位置している。しかし、今回の調査では、調査区の制限上これらの遺構と道路跡との関係を明らかにすることはできなかった。

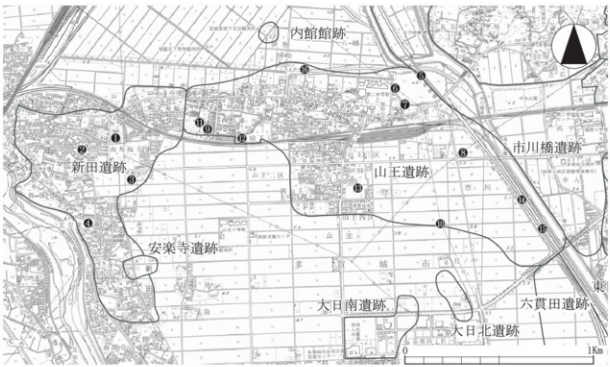
Ⅲ期：年代は14世紀以降と考えられる。ＳＤ1094・1227・1228によって区画された屋敷が出現する。このような屋敷跡は新田遺跡寿福寺地区や山王遺跡八幡・伏石地区、大日南遺跡、湧ノ巣遺跡（仙台市）、洞ノ口遺跡（仙台市）などで発見されている。いずれも掘立柱建物や井戸などが区画溝によって方形に囲まれたものであり、年代は12世紀～14世紀頃の古い時期のものと、15世紀～16世紀頃の新しい時期のものが確認されている。このように、中世において岩切から新田、山王にかけての広い範囲に屋敷が隣接して存在したことが明らかとなっており、今回調査した屋敷跡もそれらと同様のものと考えられる。屋敷の居住者については、これら屋敷跡の所在するこの地域一帯が中世において高用名と呼ばれる留守氏が支配する行政区域であったことから、これと何らかの関わりのあった武士階級であると想定される。なお、今回の調査では屋敷の中心部は未調査であり、出土した遺物も極端に少ないことから居住者の社会的身分や経済力など具体的な様相については不明である。

Ⅳ期：Ⅲ期の屋敷跡が廃絶した後の時期で、遺構はＳＥ1113とＳＸ1123のみである。閑散とした状況になり、積極的な土地の利用がされなくなったことがうかがわれる。

（2）古墳時代の水田跡について

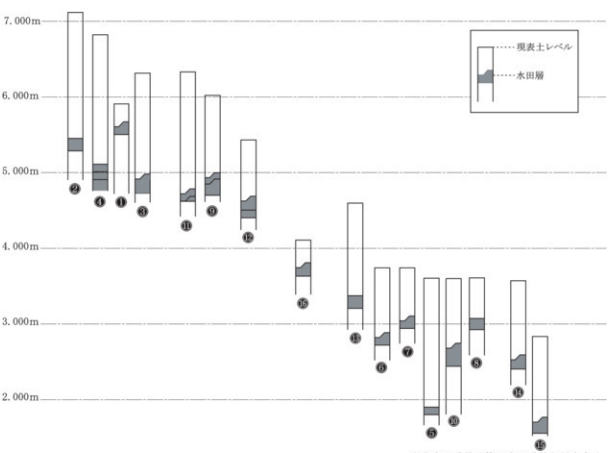
今回の調査では、古墳時代前期の水田跡をほぼ調査区全域で発見した。このうち注目されるものとしてB区のほぼ中央で発見した、東西方向のＳＤ1127水路跡がある。ＳＤ1127は、ＳＸ1224・1225の２条の畦畔に挟まれており、底面は水田耕作土の上面より低くつくられている。水田面の標高についても、ＳＤ1127の北側が高く南側が低いことから、この水路が水田の水量管理に重要な役割を担っていたものと推察される。古墳時代前期における同様の遺構に、山王遺跡多賀前地区の調査で発見されたＳＦ3124水田跡の大畦３や、山王遺跡町地区の調査で発見されたＳＦ3552水田跡に伴う畦畔であるＳＸ2842がある。いずれもやや高い２条の畦畔を近接させ、その間に水路を通しており、溝の底面は水田耕作土の上面より低くなっている。これら水路は、広範囲にわたる水田域に水を行きわたらせ、稲の生育や気象変化に応じて水量調節をするために不可欠のものと考えられ、また水田区画の標高を変える境界や水田域と非耕作域の境界となっていたと思われる。また、これの大規模なものとして、留沼遺跡（古川市）の堤１・２に挟まれたＳＤ30がある。これは溝の上幅2.3～3.6mと規模が大きく、基幹水路と考えられている。このように水田への給排水を行うための水路には、大規模な基幹水路と小規模な水路が巧みに組み合わされることで行われていたと推測され、今後新田遺跡や山王遺跡において大規模な水路跡が発見される可能性があると考えられる。

次に、このような水田跡の分布について考えてみる。同様のものはこれまで新田遺跡と山王遺跡などの調査で発見例がある。さらに畦畔など水田跡に伴う遺構が発見できなくても層位的な関係や出土遺物、プラント・オパール分析などからその存在が推定できる箇所もあり、それらの分布を示したものが第41図である。これによると砂押川より東側では、城南土地区画整理事業に伴う調査をはじめとして多くの調査を実施しているが、これまでこの時期の水田跡は見つかっていない。西側については、およそ七北田川付近まで広がっていることが周辺の調査で明らかとなっている。また、現在の県道泉・塩釜線付近は東西方向に延びる微高地になっており、それの北側と南側に水田域が分布していると推察される。水田面の標高は、微高地の南側では南東に向かって低くなっており、北側では東に向かって低くなっていることが読み取れ、これは当時の地形をそのまま利用して水田がつくられていたことによるものと考えられる（第42図）。このような水田跡は、遺跡の範囲を超え広い範囲に及ぶ可能性があり、さらにはこの水田を生活基盤としていた集団、すなわち大規模な集落の存在が推定できる。したがって、これら集落と水田域を明らかにしていくことが今後の課題と考えられる。



※○中の番号は第２表の番号と対応する

第41図　古墳時代（前期）水田跡分布図



※○中の番号は第２表の番号と対応する

第42図　古墳時代（前期）水田跡柱状模式図

番号	遺跡	調査次数 調査地区	調査 年度	水田耕作に 関わる施設	出土遺物	プラント・ オパール密度	水田面の 標高（m）	文　献
①	新田遺跡	第15次	1996	畦畔	－	平均5，000個/ｇ	5．56～5．62	多賀城市文化財調査報告書第43集
②	新田遺跡	第19次	1996	畦畔	土師器	－	5．44	平成８年度　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨資料
③	新田遺跡	第29次	2004	畦畔・水口	－	4，400～4，900個/ｇ	4．92	多賀城市文化財調査報告書第78集
④	新田遺跡	第30次	2004	－	－	2，900～3，800個/ｇ	5．1	多賀城市文化財調査報告書第78集
⑤	山王遺跡	第17次	1992	－	－	4，000個/ｇ	1．9	多賀城市文化財調査報告書第45集
⑥⑦	山王遺跡	第24次	1994	畦畔・水口	土師器甕・台付甕・壺・鉢	平均94，000個/ｇ	2．78～3．06	多賀城市文化財調査報告書第45集
⑧	山王遺跡	第25次	1994	－	土師器高杯・壺・甕	3，600～6，400個/ｇ	30．8	多賀城市文化財調査報告書第38集
⑨	山王遺跡	第30次	1996	畦畔・水口	土師器高杯・壺	－	4．7	平成８年度　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨資料
⑩	山王遺跡	第39次	2001	畦畔	土師器高杯	－	2．66	多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成13年度－
⑪	山王遺跡	第43次	2004	畦畔・水口	土師器甕	－	5．02	多賀城市文化財調査報告書第77集
⑫	山王遺跡	第51次	2005	畦畔・水口・溝跡	土師器杯・器台・甕	3，000～5，400個/ｇ	4．16～4．35	本　書
⑬	山王遺跡	第54次	2005	－	－	7，100～7，200個/ｇ	3．37	本　書
⑭⑮	山王遺跡	多賀前	1994	畦畔・溝跡・水口	土師器甕・壺	－	1．6～2．6	宮城県文化財調査報告書第167・170集
⑯	山王遺跡	町	1995	畦畔	土師器甕	－	3．1～3．5	宮城県文化財調査報告書第175集

第２表　水田一覧

４．まとめ

①今回の調査では、古墳時代から中世にかけての遺構を発見した。

②古墳時代前期では水田跡を発見しており、東西方向に延びる水路跡や畦畔、水口などの施設を確認した。この水田は中期頃には廃絶したものと考えられる。

③古代の遺構では、２時期の変遷（Ⅰ→Ⅱ期）を確認した。Ⅰ期においては、やや閑散とした状況で、まち並みの外れに位置していたと思われる。Ⅱ期においては、掘立柱建物が建てられ、溝が掘られるなど積極的に土地利用が行われた様子がうかがえる。

④中世になると東西28m以上、南北34m以上の区画溝を巡らせた屋敷がつくられる。このような屋敷は、本遺跡や新田遺跡の広い範囲で確認されており、今回発見した屋敷もこれらと一連のものと考えられる。

⑤今回の調査区は、遺跡の南西端部に位置しており、発見した遺構はさらに遺跡南側へと延びていることが明らかである。したがって、本遺跡の範囲も南へ広がることが確実であり、今後の調査でその範囲を明らかにしていく必要があると考えられる。

参考文献

東北歴史資料館　『伊豆沼古窯 熊狩入窯跡発掘調査報告』　東北歴史資料館資料集１　1979

宮城県教育委員会　『山王遺跡Ⅱ』-多賀前地区遺構編-　宮城県文化財調査報告書第167集　1995

宮城県教育委員会　『山王遺跡Ⅲ』-多賀前地区遺物編-　宮城県文化財調査報告書第170集　1996

宮城県教育委員会　『一本杉窯跡群』　宮城県文化財調査報告書第172集　1996

宮城県教育委員会　『山王遺跡町地区の調査』-県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ-　宮城県文化財調査報告書第175集　1998

多賀城市教育委員会　『山王遺跡・市川橋遺跡』　多賀城市文化財調査報告書第38集　1995

多賀城市教育委員会　『新田遺跡』-第15・17・18次調査報告書-　多賀城市文化財調査報告書第43集　1997

多賀城市教育委員会　『山王遺跡Ⅰ』-仙塩道路建設に係る発掘調査報告書-　多賀城市文化財調査報告書第45集　1997

多賀城市教育委員会　『多賀城市内の遺跡Ⅰ』-平成15年度発掘調査報告書-　多賀城市文化財調査報告書第77集　2005

多賀城市教育委員会　『多賀城市内の遺跡２』-平成16年度発掘調査報告書-　多賀城市文化財調査報告書第78集　2005
多賀城市埋蔵文化財調査センター　『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報』-平成７年度-　1997
多賀城市埋蔵文化財調査センター　『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報』-平成８年度-　1998
多賀城市『多賀城市史』　第１巻　原始・古代・中世　1997
古川市教育委員会　『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第25集　1999
菊地逸夫「一本杉窯跡群」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会編　2003
藤沼邦彦「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館 研究紀要 第２巻』　東北歴史資料館　1976
山本信夫「中世前期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995

1：B区Ⅶ層上面全景（東より）

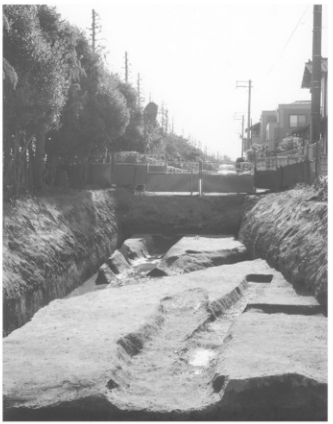
2：B区Ⅴ層水田跡（東より）

3：SD1127溝跡、SX1224・1225畦畔（北西より）

4：SD1127溝跡、SX1224・1225畦畔（東より）

写真図版1

1：ＳＢ1089掘立柱建物跡（北より）



2：調査区西端部（東より）

3：ＳＤ1101溝跡（南より）

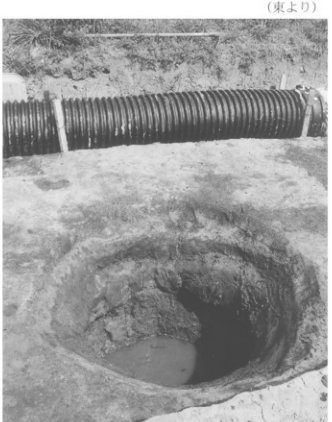
4：ＳＤ1096溝跡（東より）

写真図版２

1：ＳＤ1094・1227・1228溝跡、ＳＸ1123土橋（西より）

2：ＳＤ1094・1227・1228溝跡、ＳＸ1123土端（東より）

3：ＳＤ1094・1227・1228溝跡、ＳＸ1223土橋（復元）（東より）

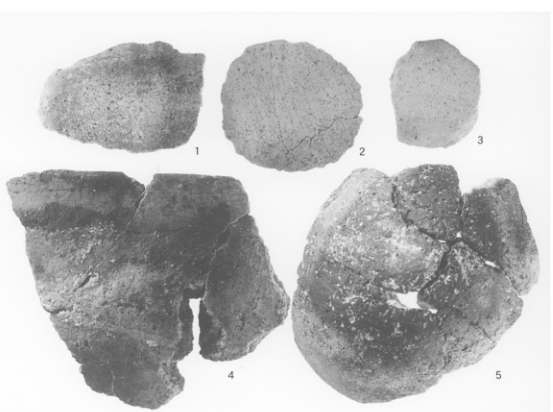


4：ＳＥ1111井戸端（西より）

写真図版３

1：土師器・器台（第８図１　R27）

2：土師器・高杯（第30図３　R26）



3：古墳時代前期の遺物　1：土師器・杯　第８図２　R15、　2：土師器・甕　第８図５　R23、
3：土師器・杯　R16、　4：土師器・杯　第８図４　R24、
5：土師器・杯　第８図３　R25

附章1　山王遺跡第51次調査のプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ここでは、山王遺跡第51次調査における稲作の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行う。

2．試料

分析試料は、調査区南壁東側において上位より、古代・中世の遺構検出面となるⅢ層（試料A）、Ⅴ層水田跡廃絶後の自然堆積層と考えられるⅣ層（試料B）、古墳時代の水田耕作土であるⅤａ層（試料C）とⅤｂ層（試料D－1，D－2）、Ⅵ層（試料E）および最終遺構検出面となるⅦ層（試料F）の７点である。なお、試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

3．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
　（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１g中のプラント・オパール個数（試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属型は0.75である。

4．結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１、図１に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

イネは試料B、試料C、試料D－1および試料D－2より検出されている。試料C、試料D－1、試料D－2では高い密度である。ヨシ属は試料Ｂ～Ｅで検出されているがいずれも低い密度である。ススキ属型とネザサ節型はいずれも試料Ｆを除く各試料より検出されている。このうち、ススキ属型は試料B、試料Cさらに試料D－2で高い密度である。クマザサ属型はすべての試料で検出されており、試料Ａ～Ｃ、試料Ｅ、試料D－2では比較的高い密度である。

5．考察

Ⅴb層では試料D-1と試料D-2について，Ⅴa層では試料Cについて分析を行ったところ，これらの試料すべてからイネのプラント・オパールが検出されている。プラント・オパール密度は前者ではそれぞれ3,000個/g，3,700個/g，後者では5,400個/gといずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを上回っている。こうしたことから，これらの遺構面において稲作の行われていた可能性が高いと判断される。一方，Ⅵ層からはイネのプラント・オパールは検出されていない。このことから，当該層において稲作が営まれた可能性を積極的に支持することはできない。なお，Ⅴ層水田跡廃絶後の堆積層となるⅣ層からもイネのプラント・オパールが1,200個/gの密度で検出されている。当該層は自然堆積層とみられることから，何らかの理由で堆積時に水田耕作土が混入したものと思われる。試料Aと試料Fの層準については調査地で稲作が行われていた可能性は考えにくい。

イネ以外の分類群の検出状況をみてみると，試料B，試料Cおよび試料Gでススキ属型が高い密度である。また，試料A，試料B，試料C，試料D-2および試料Eではクマザサ属型が比較的高い密度である。こうしたことから，Ⅶ層（試料F）を除く各層の堆積当時の調査地は概ね乾いた環境であり，ススキ属やクマザサ属などが周辺に生育していたものと考えられる。

表1　多賀城市山王遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位		A Ⅲ層	B Ⅳ層	C Ⅴa層	D-1 Ⅴb層	D-2 Ⅴb層	E Ⅵ層	F Ⅶ層
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	*Oryza sativa*		*12*	*54*	*30*	*37*		
ヨシ属	*Phragmites*		*6*	*6*	*6*	*7*	*8*	
ススキ属型	*Miscanthus type*	*18*	*47*	*66*	*18*	*45*	*8*	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*	*12*	*53*	*60*	*12*	*15*	*8*	
クマザサ属型	*Sasa (except Misakozasa) type*	*55*	*71*	*54*	*30*	*90*	*76*	*8*
その他	Others	6	6	6	18	30	8	
未分類等	Unknown	116	271	270	177	225	144	92
プラント・オパール総数	Total	207	466	516	291	449	252	100

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*		*0.35*	*1.58*	*0.90*	*1.10*		
ヨシ属	*Phragmites*		*0.37*	*0.38*	*0.38*	*0.47*	*0.48*	
ススキ属型	*Miscanthus type*	*0.23*	*0.58*	*0.82*	*0.23*	*0.56*	*0.09*	
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*	*0.06*	*0.25*	*0.29*	*0.06*	*0.07*	*0.04*	
クマザサ属型	*Sasa (except Miyakozasa) type*	*0.41*	*0.53*	*0.40*	*0.23*	*0.67*	*0.57*	*0.06*

6．まとめ

山王遺跡第51次調査においてプラント・オパール分析を行い，稲作の可能性について検討した。その結果，古墳時代とされるⅤa層およびⅤb層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことより，これらにおいて稲作が営まれていたことが分析のうえからも確認された。しかし，Ⅵ層からはイネのプラント・オパールは検出されず，当該遺構については稲作が行われた痕跡は認められなかった。

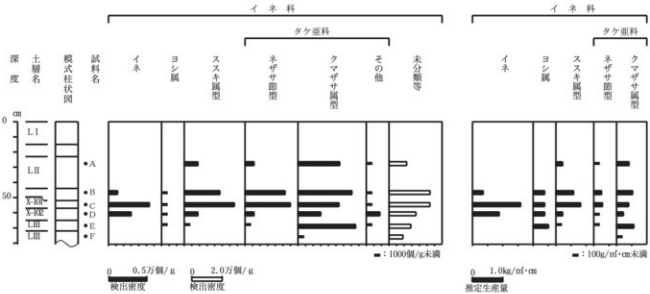
文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

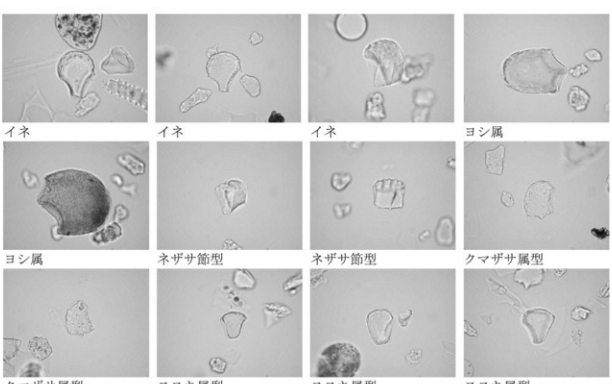
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール），考古学と植物学，同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.



第１図　山王遺跡におけるプラント・オパール分析結果



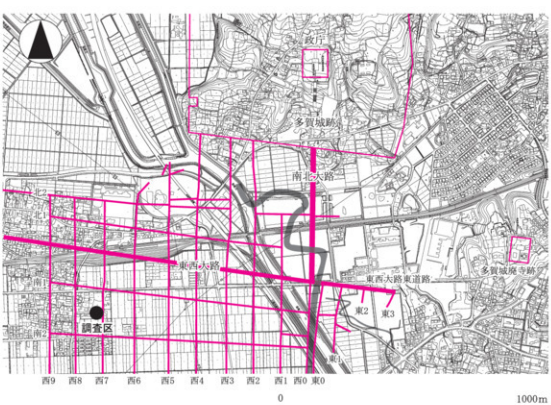
プラント・オパールの顕微鏡写真

Ⅲ．第54次調査

１．調査区の位置と周辺の調査成果

本調査区は、山王遺跡の中央南寄りに位置している。現況は畑地であり、標高は4.5～4.8mとなっている。これまで本地区周辺では数カ所で発掘調査を実施しており、古代の道路跡や掘立柱建物跡、中世の区画溝跡などが発見されている。古代の道路跡については本地区北側に位置する第13・23次調査区で南１東西道路と西７南北道路及びその交差点が発見されており、さらに東西大路と南１東西道路の中間にも東西道路があることが確認されるなど多くの成果を得ている。また、第23次調査区北半部では、東西大路沿いであるにもかかわらず、区割り内部が生産域として使用されていたことも明らかとなっている。第16次調査区では、９世紀～10世紀代の掘立柱建物跡や井戸跡、小規模な溝跡などが発見されている。

一方、南側に位置する第34次調査区では、掘立柱建物跡や溝跡が確認されている。建物跡には柱穴の規模が一辺1.3m前後のものがあることから、官人クラスの邸宅の可能性が示唆されている。これらの成果を踏まえ本調査区をみてみると、古代においては東端部が西７南北道路跡の推定線にあたり、掘立柱建物跡をはじめとする遺構が発見される可能性が非常に高い地点であることが分かる。中世の遺構については、第16次調査区で幅約３m、一辺30m以上と推測される区画溝が発見されており、本遺跡八幡・伏石地区や新田遺跡寿福寺地区など各地区で確認されている中世の屋敷跡と同様なものであると考えられている。しかし、本地区周辺では古代の遺構に比べると中世の遺構は発見例が非常に少なく、中世における歴史的な位置付けは明らかでない。



第１図　城外の方格地割りと調査区の位置

2．調査に至る経緯と経過

本件は、山王字前田・字山王四区地内における位置指定道路建設に伴うものである。平成17年４月、地権者より当該区における位置指定道路建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現在畑地として利用している場所に、幅６m、長さ65mの道路を建設し、将来的には周辺を宅地として利用するという計画であった。本地区周辺は、南東側約50mの地点で第34次調査（平成10年）を実施していたものの、小範囲な調査区であったため遺構の性格や密度など不明な点が多く、その成果を基に本調査に係る費用を積算することが困難であった。また、対象区東端部が多賀城外の方格地割りを構成する西７南北道路の推定線上にあることから、古代の方格地割りを復元する上で位置的にも重要な地点であると考えられた。そのため、地権者及び開発業者と協議を重ねた結果、事前に遺構の状況を把握するための確認調査を実施し、これを踏まえて本発掘調査の期間及び経費を積算することで合意に達した。５月９日より道路建設部分の確認調査を実施し、中旬には概ね上面（Ⅳ層）検出遺構の分布や性格が明らかとなった（第52次調査）。一方、断面観察の結果、本地区にはⅣ層下層にも２時期以上の遺構検出面があることが判明したことから、これらを踏まえた調査期間及び費用を積算し、５月20日に地権者と本発掘調査の委託契約を締結した。その後、５月23～27日にかけて調査に係る作業員や器材等の手配を行い、週明けの５月31日から調査に着手した。

第２図　第54次調査区と周辺の調査区

はじめに、Ⅳ層上面で発見した掘立柱建物跡の柱穴、井戸跡、溝跡の埋土を掘り下げ、順次断面図の作成、写真撮影、土層注記、掘り下げ完了後の平面図作成等を行う。６月７日、これらの作業が終了した北東部よりⅣ層の除去を開始し、Ⅴ層上面の遺構検出作業に取りかかる。黒褐色粘質土を主体としたⅣ層上面検出遺構の埋土に比べ、Ⅴ層上面検出遺構にはにぶい黄橙色砂質土が多量に混入するなど、埋土には明瞭な違いが見て取れたが、これらの遺構の多くがⅤ層そのものの埋土と類似していたため、検出作業に多くの時間を費やすこととなった。６月17日より検出した遺構の平面図作成を開始し、終了したものから埋土の掘り下げや断面図作成等一連の作業を行った。一方、Ⅴ層が見られない調査区南西端部では、その下層のにぶい黄橙色砂質土（Ⅵ層）上面で梁行２間、桁行２間以上の掘立柱建物跡が確認された。柱穴の規模や形態から古代のものと考えられ、Ⅴ層下層には古代の遺構が存在している可能性が高まった。このため、６月20日より、遺構の密度が比較的少ない西半部のⅤ層を先行して除去し、Ⅵ層上面での遺構検出作業及び検出した遺構の埋土掘り下げ、平面図・断面図の作成等を随時行うこととした。７月11日、中央部を除く調査区全てでⅤ層の除去が完了し、東端部では西７南北道路跡と多数の柱穴を検出した。西７南北道路は先行して実施した第52次調査段階で３時期の変遷があることを確認していたことから、それにした

がい新旧関係の新しい順に埋土の掘り下げを行った。また、道路側溝の埋土掘り下げと平行して柱穴の精査を行った結果、５棟の建物が存在していたことが明らかとなった。７月15日、平面図作成が終了したものから順次断ち割り調査を行うとともに、調査区内の土層堆積状況を記録するため北壁の断面図作成を開始する。７月19日、西７南北道路及び東端部建物群の写真撮影を行い、翌20日にかけて各遺構の埋土を完掘した。同日、当初よりⅥ層下層で確認していた黒色粘土（Ⅸ層）について、周辺地区で明らかにされている古墳時代前期の水田層との関連を探るため、後世の攪乱を受けていない東端部を対象に調査を開始した。平面及び断面観察では耕作の痕跡を示す土層底面の乱れや畦畔等の区画施設を確認することができなかったため、断面図の作成と土壌分析（プラント・オパール）のサンプルを採取して黒色粘土層の調査を終了することとした。7月22日～26日、台風等の影響で調査を１週間程中断したため、７月末日まで設定していた調査期間を１週間延長したい旨地権者と協議し、８月５日まで延長することで了解を得た。７月29日、西壁の断面図と中央部のⅥ層上面検出遺構の平面図作成を開始する。中央部では土壙、溝などが僅かに確認される程度であったが、漆容器として使用した土師器甕が完全な形で出土するなど貴重な資料を得た。８月２日、西壁付近をさらにⅩ層まで掘り下げ、黒色粘土（Ⅸ層）及びその前後に堆積する土壌のサンプルを採取した。また、建物として組み合わない柱穴の断ち割りを行うなど、補足的な調査を実施する。８月３日、これら全ての調査が終了したため、翌日より調査器材の撤収、調査区の埋め戻し作業を開始した。８月６日、調査区の埋め戻しを完了し、現地発掘調査の一切を終了した。

３．調査成果

（1）層序（第３図）

今回の調査では、現在の表土以下10層の堆積を確認した。Ⅳ層以下についてみると、西側から東側に向かって標高値が高くなっており、古代の最終遺構検出面と考えられるⅥ層上面での比高は40㎝となる。

Ⅰ－１層：現代の造成による盛土で、厚さは40～80㎝である。調査区の東側ほど厚く堆積している。

Ⅰ－２層：西端部で確認した褐灰色粘土の旧水田耕作土である。厚さは15～25㎝であるが、現在の造成工事の際に中央から東側のすべてが失われている。

Ⅱ　層：西端部で確認した褐色粘質土で、厚さは15～30㎝である。現在の造成工事の際に中央部から東側すべてが失われている。

Ⅲ　層：東半部を除く全域で確認した黒色粘質土で、厚さは10～30㎝である。近世以降の遺構検出面である。

Ⅳ　層：東端部を除く調査区全域で確認した黒褐色粘質土で、厚さは10～40㎝である。中世の遺構検出面であり、西側ほど厚く堆積している。

Ⅴ　層：東半部の一部を除くほぼ全域で確認した黒褐色粘質土で、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入する。厚さは10～20㎝であり、西端部では北側に僅かに残存するのみである。中世の遺構検出面と考えられる。なお、Ⅴ層については堆積物の状況から整地などの人為埋土の可能性が高い。

Ⅵ　層：調査区全域で確認したにぶい黄橙色砂質土で、厚さは30㎝以上である。古代の最終遺構検出面である。

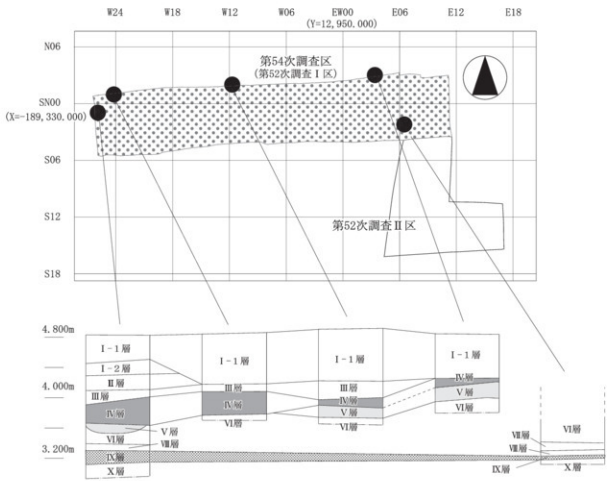
Ⅶ　層：調査区東半部で確認した灰黄褐色粗砂層で、厚さは10～40㎝である。中央部に向かって厚く

堆積している。

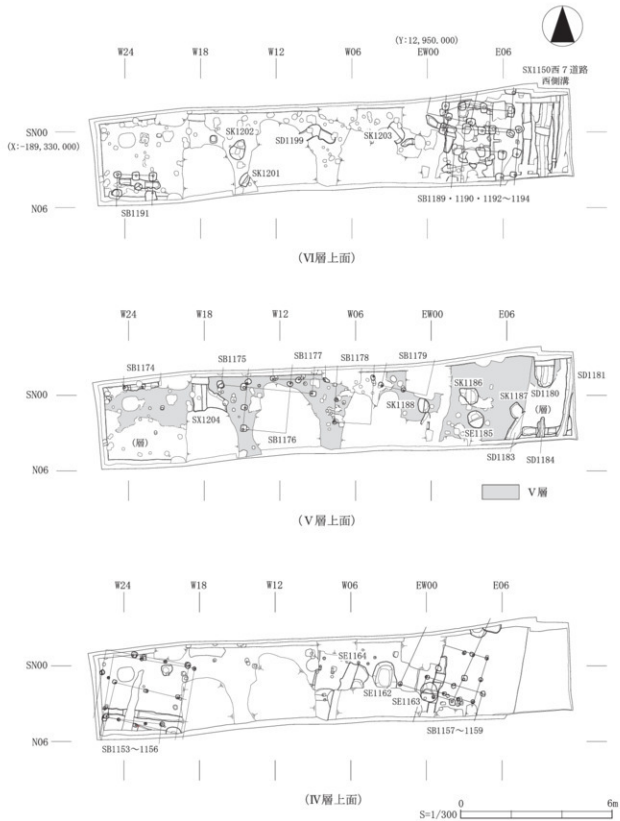
Ⅷ　層：調査区東半部及び西端部で確認したにぶい黄褐色～にぶい黄橙色砂質土で、厚さは15～20cmである。中央付近は深掘りを行っていないため明らかではないが、調査区全域に堆積しているものと考えられる。

Ⅸ　層：調査区東半部及び西端部で確認した黒色粘土であり、厚さは東半部が10cm前後、西端部が15～20cmである。Ⅷ層同様、調査区全域に堆積していると考えられる。プラント・オパール分析の結果、水田層であることが明らかとなっており、本地区周辺で確認されている古墳時代前期のものと一連であると考えられる。

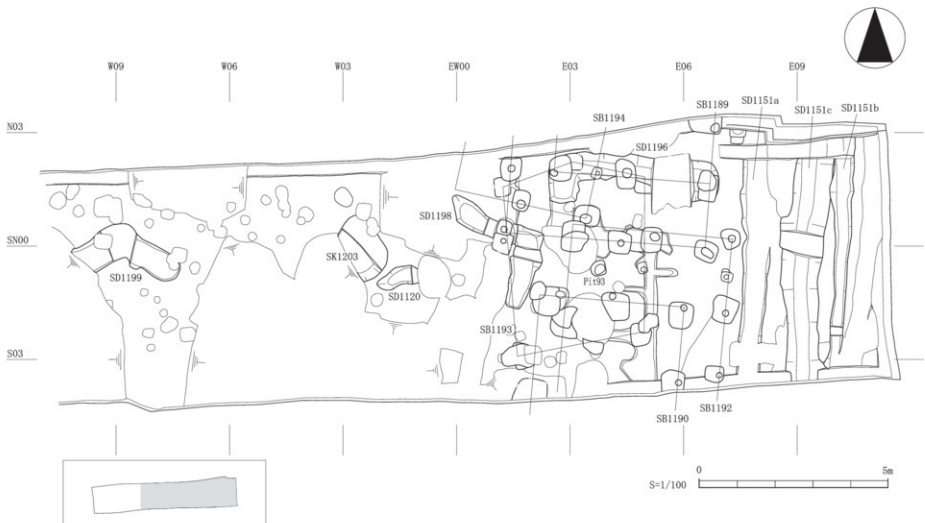
Ⅹ　層：調査区東半部及び西端部で確認した灰黄褐色～褐灰色粘土であり、厚さは30cm以上である。Ⅷ層同様、調査区全域に堆積していると考えられる。なお、東端部では、この層以下で古墳時代以前の河川と考えられる暗緑灰色粗砂層を確認しているが、湧水が激しく崩落の危険があるため調査は行っていない。



第３図　調査区配置図と層序模式図



第４図　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層上面検出遺構全体図



第５図　Ⅵ層上面検出遺構平面図（１）

（2）発見遺構と遺物

今回の調査では、Ⅸ層で古墳時代の水田層、Ⅵ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ層上面で古代から近世にかけての遺構を発見した。ここでは、本調査に先行して実施した確認調査（第52次調査）の成果も踏まえながら、Ⅸ層を除く各層ごとに、発見した遺構・遺物について記載する。

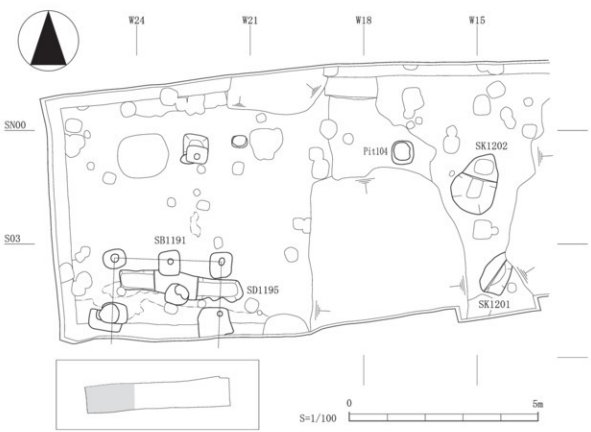
〔Ⅵ層上面検出遺構〕

西７南北道路跡、掘立柱建物跡、溝跡、土壙を発見した。西端部のＳＢ1191、ＳＤ1195を除くすべての遺構が、Ⅴ層に直接覆われている。

ＳＸ1150西７南北道路跡（第７・８・９図）

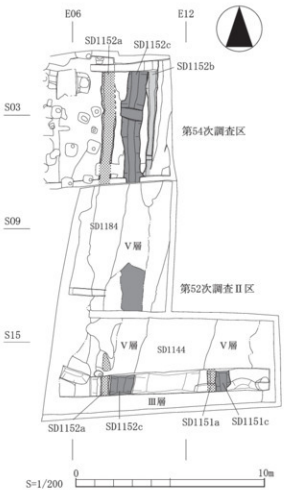
調査区東端部及び第52次調査Ⅱ区（以下Ⅱ区）で発見した南北道路跡である。南北大路から約890m西に位置しており、多賀城南面に施工された方格地割りを構成する西７南北道路に相当する。長さ約17mを検出しており、南北とも調査区外に延びている。東西両側に素掘りの側溝を伴っており（東側溝：ＳＤ1151、西側溝：ＳＤ1152）、これらの新旧関係から３時期の変遷（A→C期）があることを確認した。

A期：東・西側溝（ＳＤ1151ａ・1152ａ）を確認した。東側溝はⅡ区南端部で僅かに確認したのみであり、東半部はC期側溝により破壊されている。一方、西側溝についてもⅡ区中央部でＳＤ1184溝跡や後世の攪乱によって破壊されており、残存状況は悪い。道路の規模については、残存するⅡ区南端部で求めると、側溝心々間で5.65m、方向は西側溝で測ると北で約１度東に偏している。東側溝の規模は、上幅70cm以上、



第６図　Ⅵ層上面検出遺構平面図（２）

深さ17㎝であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入している。西側溝は、上幅42～80㎝以上、下幅31～52㎝以上、深さ12～25㎝である。壁は本調査区では垂直気味に、Ⅱ区ではやや緩やかに立ち上がっている。底面は、北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は10㎝である。埋土は３層に分けることができる。黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状及び斑状に多量に混入している。



第７図　ＳＸ1150と第52次調査区

遺物は出土していない。

Ｂ期：Ａ期より東に約2.5m移動して造り替えられている。本調査区では西側溝（ＳＤ1152ｂ）を確認したが、Ⅱ区では両側溝共に後続するＣ期側溝に破壊されており確認することができなかった。方向は北で約２度東に偏している。西側溝の規模は、上幅27～64㎝、下幅20～38㎝、深さ18㎝である。壁についてみると、東側は垂直気味に立ち上がるが、西側はやや緩やかである。底面は北から南に向かって傾斜しており、比高は28㎝である。埋土は２層に分けることができる（第８図）。上層は灰白色火山灰が二次堆積する黒褐色粘質土、下層が褐灰色砂質土である。

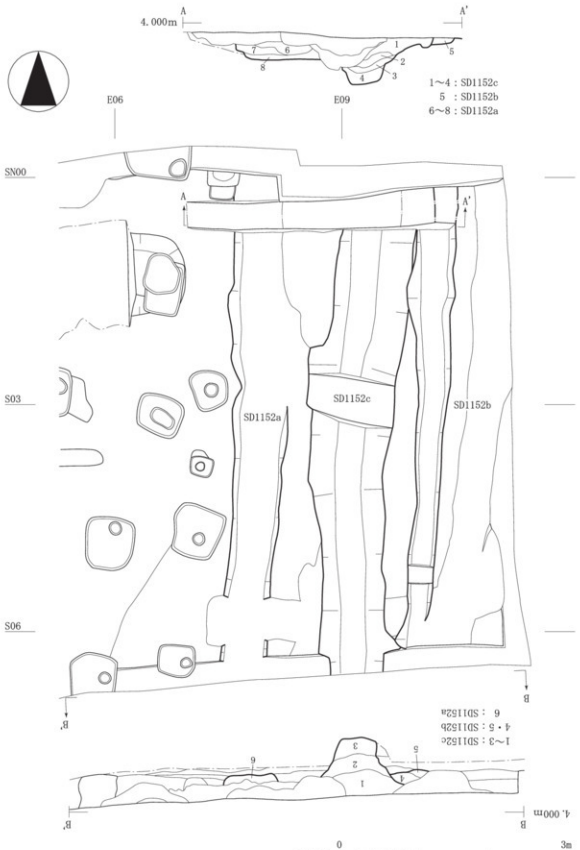
遺物は、土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）が出土している。

Ｃ期：本調査区ではＢ期より西に約１ｍ移動しているが、Ⅱ区ではほぼ同位置で造り替えられたものと考えられる。東・西側溝（ＳＤ1151ｃ・1152ｃ）を確認した。道路の規模は両側溝が確認できたⅡ区南端部で測ると側溝心々間で5.46m、方向は西側溝で測ると北で約３度東に偏している。東側溝の規模は、上幅69～80㎝、下幅34～40㎝、深さ約40㎝である。壁は下半部が垂直気味に、上半部が緩やかに立ち上がっている。埋土は、上層の黒褐色粘土と、下層の黒色粘土の２層に分けられる。西側溝は、上幅75～125㎝、下幅34～43㎝、深さ43～76㎝である。壁は下半部が垂直気味に、上半部は非常に緩やかに立ち上がっている。底面は北側から南側へ傾斜しており、比高は26㎝である。埋土は黒色粘土が主体であり、下層にはにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

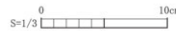
遺物は、土師器杯（ＢⅡ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅴ類）・瓶・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器椀、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＢ類）が出土している。

ＳＢ1193掘立柱建物跡（第10図）

調査区東部で発見した、桁行２間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴は８基検出しており、西側柱列北より１間目柱穴で柱痕跡、南西及び南東隅柱穴で柱抜取り穴を確認した。ＳＢ1189・1192、



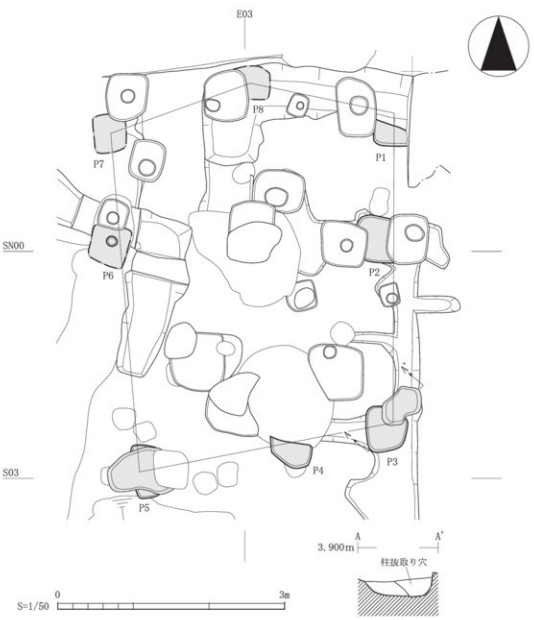
第８図　ＳＤ1152平面図・断面図



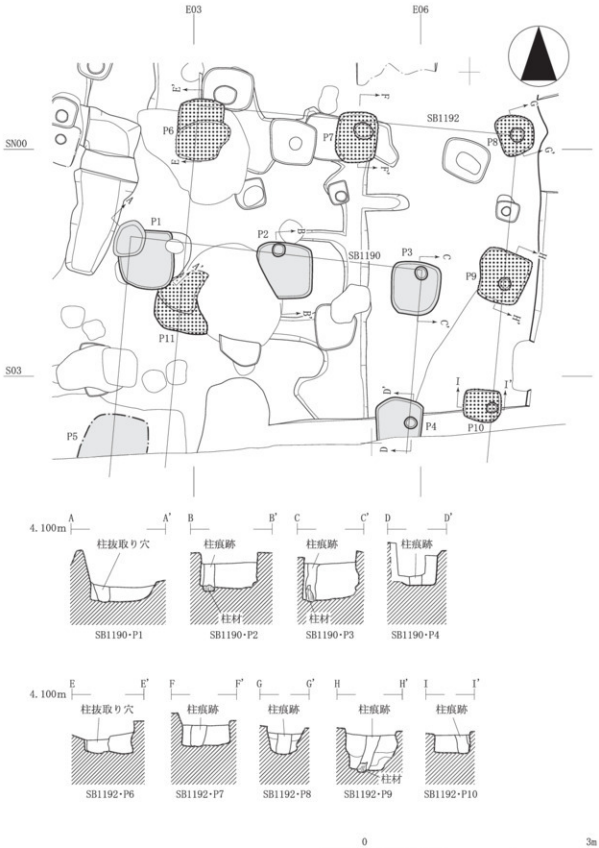
単位：cm

番号	種　類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
1	灰釉陶器・椀	ＳＤ1152ｃ・1層	ロクロナデ，体部下半：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	6.8 6/24	－	－	R4	黒笹90号窯式

第９図　ＳＤ1152出土遺物



第10図　ＳＢ1193平面図・断面図



第11図　ＳＢ1190・1192平面図・断面図

ＳＤ1196・1198と重複しており、ＳＤ1198を除くすべての遺構よりも古い。方向は、西側柱列で測ると、北で約５度西に偏している。建物の規模についてみると、桁行は西側柱列で約4.5m、柱間は北から約1.4m、約3.1mである。梁行は南妻で約3.4m、柱間は西から約2.0m、約1.4mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は南東隅柱穴で測ると長辺61㎝、短辺55㎝、深さ30㎝である。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に混入している。柱痕跡は直径14㎝の円形である。

遺物は、柱抜取り穴から土師器甕（Ａ類）が出土している。

ＳＢ1190掘立柱建物跡（第11図）

調査区東部で発見した、桁行２間以上、梁行２間の掘立柱建物跡であり、南北棟と推測される。柱穴は５基検出しており、北西隅柱穴で柱抜取り穴、北東隅柱穴と北妻棟通り柱穴・東側柱列北より１間目柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＢ1192・1193と重複し、ＳＢ1192よりも新しい。方向は、北妻で測ると、西で約７度北に偏している。建物の規模についてみると、桁行は東側柱列で1.96m以上、梁行は北妻で約3.9m、柱間は西から約2.0m、1.91mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きい北西隅柱穴で測ると、長辺77㎝、短辺72㎝、深さ70㎝である。埋土は、にぶい黄橙色砂質土が主体であり、黒褐色粘質土が斑状に僅かに混入している。柱痕跡は直径14～20㎝の円形であり、埋土は黒色粘土である。このうち、北東隅柱穴と北妻棟通り柱穴では、底面付近に柱材が僅かに残存していた。

遺物は、掘り方から土師器杯（ＢⅡ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）、柱抜取り穴から土師器杯（ＢⅡ・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯が出土している。

ＳＢ1192掘立柱建物跡（第11図）

調査区東部で発見した、桁行３間以上、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴は６基検出しており、北西隅柱穴及び西側柱列北より１間目柱穴で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＢ1190・1193・1194と重複し、ＳＢ1190よりも古く、ＳＢ1193・1194よりも新しい。方向は、東側柱列で測ると、北で８度22分東に偏している。建物の規模についてみると、桁行は東側柱列で3.65m以上、柱間は北から1.98m、1.67mである。梁行は北妻で約4.2m、柱間は西から約2.2m、約2.0mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きい東側柱列北より１間目柱穴で測ると、長辺70㎝、短辺66㎝、深さ58㎝である。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に混入している。柱痕跡は直径15～18㎝の円形であり、埋土は黒色粘土である。このうち、東側柱列北より１・２間目柱穴では、柱材が一部残存していた。

遺物は、掘り方から土師器杯（ＢⅡ類）甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ類）、須恵系土器杯が出土している。

ＳＢ1189掘立柱建物跡（第12図）

調査区東部で発見した掘立柱建物跡である。桁行２間以上、梁行２間の身舎に、南・西側に１間分の廂の付く南北棟と推測される。身舎部分と廂部分の柱穴をそれぞれ４基ずつ検出しており、身舎南東隅柱穴・南妻棟通り柱穴、廂南東隅柱穴・南側柱列東より１間目柱穴で柱抜取り穴（註）、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＢ1193・1194、ＳＤ1196と重複し、ＳＢ1193よりも新しく、ＳＤ1196よりも古い。方向

（註）このうち、南妻棟通り柱穴と廂南側柱列東より１間目柱穴で確認した柱抜取り穴については、平面・断面の形状が柱痕跡と近似しているものである。しかし、前者では炭化物やⅥ層に起因する埋土が多量に混入していること、後者では底面付近が著しく乱れていることなどから、ほぼ垂直方向に柱を抜き取った痕跡と考えられる。このような観点からすれば、厳密な意味で柱痕跡とは区別すべきものであることから、ここでは「柱のあたり痕跡を残す柱抜取り穴」として扱うこととする。なお、柱位置については原位置を明瞭にとどめていると判断できることから、柱痕跡と同様な精度で計測・表示している。

は、南妻で測ると、西で約３度北に偏している。建物の規模についてみると、桁行は東側柱列で1.4m以上、梁行は南妻で約4.0m、柱間は西から約1.9m、約2.1mである。廂の出は、南廂が棟通りで1.83m、西廂が1.14mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は身舎部分で最も大きい南東隅柱穴で、長辺69cm、短辺52cm、深さ71cmである。廂部分の柱穴の規模は、平面的には身舎部分とほぼ同規模であるが、底面は40cm以上浅く掘り込まれている。埋土は、いずれもにぶい黄橙色砂質土が主体であり、黒褐色粘質土が僅かに混入している。柱痕跡は円形であり、身舎で直径25cm、廂で18cmである。埋土は、黒色粘土である。なお、南妻棟通り柱穴で確認した柱抜取り穴には、多量の炭化物が混入していた。

遺物は、掘り方から土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）、柱抜取り穴から土師器甕が出土している。

ＳＢ1194掘立柱建物跡（第12図）

調査区東部で発見した掘立柱建物跡である。東西１間の柱列より推定したものであり、発見した柱穴は南東隅柱穴と南側柱列東より１間目柱穴であると考えられる。南東隅柱穴で柱抜取り穴、南側柱列東より１間目柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＢ1189・1192・1193と重複し、ＳＢ1193よりも古い。方向は、東で約13度南に偏しており、柱間は約1.8mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は最も大きい南東隅柱穴で測ると、長辺67cm、短辺54cm、深さ28cmである。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状及び小ブロック状に混入している。このうち、南側柱列東より１間目柱穴には、炭化物粒が多量に認められた。

遺物は、掘り方から土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯・蓋が出土している。

ＳＢ1191掘立柱建物跡（第13図）

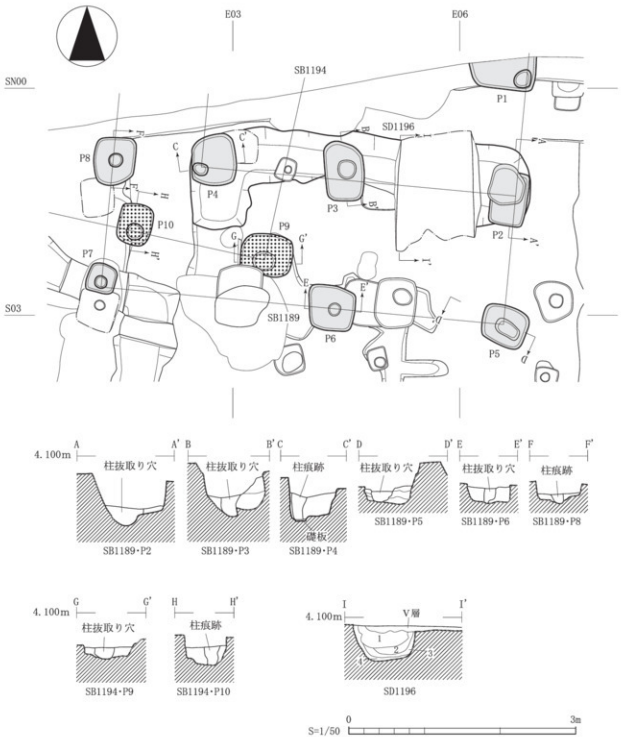
調査区西部で発見した、桁行２間以上、梁行２間の掘立柱建物跡であり、南北棟と推測される。柱穴は５基検出しており、北西隅柱穴・西側柱列北から１間目柱穴で柱抜取り穴（註）、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＤ1195と重複し、それよりも新しい。方向は、北妻で測ると、西で１度37分北に偏している。建物の規模についてみると、梁行は北妻で2.84m、柱間は西から1.48m、1.36mである。桁行の柱間は、東側柱列北から１間目が1.38mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きい東側柱列北から１間目柱穴で測ると、長辺83cm、短辺74cm、深さ44cmである。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が多く混入している。また、北西隅柱穴では、最下層に灰黄褐色砂質土を敷き嵩上げしたと考えられる痕跡が認められた。柱痕跡は直径18～24cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。このうち、北東隅柱穴と東側柱列北から１間目柱穴で柱材、西側柱列北より１間目柱穴で礎板を確認している。

遺物は、掘り方から土師器杯（ＢⅠ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）・瓶・甕、柱抜取り穴から土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）・甕が出土している。

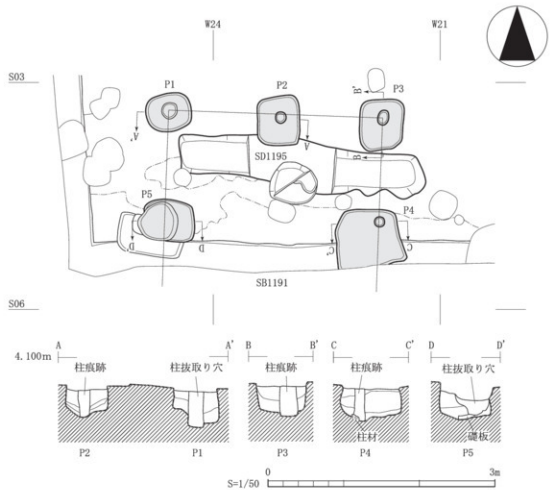
ＳＤ1195溝跡（第13・14図）

調査区西部で発見した東西方向の溝跡である。ＳＢ1191と重複し、それよりも古い。方向は、西で約７度北に偏している。規模は、長さ3.3m、上幅46～76cm、深さ25cmである。壁は南側は垂直気味に立ち上がるが、北側は緩やかである。底面は凹凸がなく、概ね平坦である。埋土は、２層に分けることができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であるが、２層には黄褐色土が多く混入している。

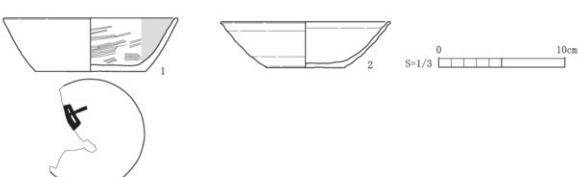
（註）このうち、北西隅柱穴では「柱のあたり痕跡を残す柱抜取り穴」を確認している。埋土にⅥ層起因のにぶい黄橙色土が多く混入していることや、その中位付近から遺物が比較的多く出土していることなどから、ほぼ垂直方向に柱を抜き取った痕跡と考えられる。



第12図　ＳＢ1189・1194ほか平面図・断面図



第13図　ＳＢ1191ほか平面図・断面図



単位：cm

番号	種　類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	ＳＤ1195・１層	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.8) 4/24	8.7 21/24	4.25	－	Ｒ４	底部外面に墨書「中？」、ＢⅠ類
2	須恵器・杯	ＳＤ1195・１層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.3) 6/24	6.2 12/24	3.65	－	R31	Ⅲ類

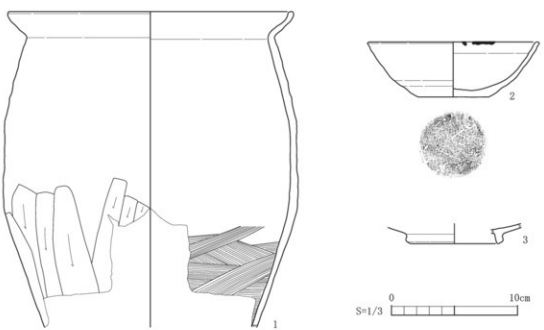
第14図　ＳＤ1195出土遺物

遺物は、土師器杯（ＢⅢ・ＢⅤ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）・甕が出土している。

ＳＤ1196溝跡（第12・15図）

調査区東部で発見した東西方向の溝跡であり、西端部で南側に屈曲する。ＳＢ1189と重複し、それよりも新しい。方向は、西で約４度北に偏しており、規模は、長さ5.1m、上幅56～108cm、下幅32～60cm、深さ37～46cmである。壁は垂直気味に立ち上がっており、底面は概ね平坦である。埋土は４層に分けることができ、いずれも黒色粘質土あるいは黒褐色粘質土が主体である。このうち、１層には灰白色火山灰が二次堆積しているほか、炭化物、焼土も多く混入している。２～４層にはにぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に多量に混入している。

遺物は、土師器杯（ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅴ類）・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器椀、平瓦（ⅡＣ類）が出土している。



単位：cm

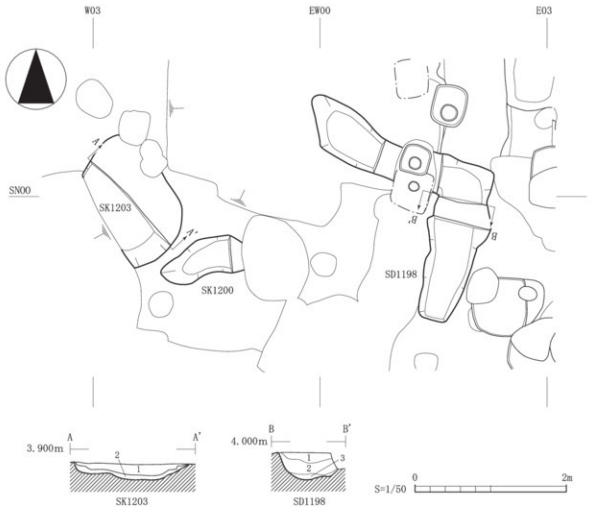
番号	種　類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
1	土師器・甕	ＳＤ1196・１層	ヘラケズリ、ロクロナデ	ヘラナデ、ロクロナデ	(22.7) 9/24	－	－	－	R21	
2	土師器・杯	ＳＤ1196・１層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.6) 9/24	5.6 24/24	4.35	5-6	R12	口縁部に油煙付着、Ｖ類
3	灰釉陶器・椀	ＳＤ1196・１層	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	(6.8) 6/24	－	－	R35	黒笹90号窯式

第15図　ＳＤ1196出土遺物

ＳＤ1198溝跡（第16図）

調査区東部で発見した鉤形の溝跡である。ＳＢ1189・1193と重複し、それよりも古い。規模は、東西方向が長さ約1.2m、南北方向が約2.1m、上幅36～96cm、下幅34～46cm、深さ10～46cmである。底面は、東西方向は比較的平坦であるが、南北方向では南から北へ18cm傾斜している。埋土は３層に分けることができる。１層が黒褐色粘質土、２・３層が黒色粘質土であり、２層には多量の炭化物が混入している。

遺物は、土師器杯（ＢⅡ・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）が出土している。



第16図　ＳＤ1198、ＳＫ1203・1200平面図・断面図

ＳＤ1199溝跡（第５図）

調査区中央部で発見した溝跡である。規模は、長さ３ｍ以上、上幅68～91㎝、下幅56～68㎝、深さ16～22㎝である。壁は急に立ち上がっており、底面にはほとんど凹凸はない。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、黄褐色砂質土やオリーブ褐色粘質土が僅かに混入している。

遺物は、土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ・Ⅴ類）・甕が出土している。

ＳＫ1200土壙（第16図）

調査区東部で発見した土壙である。規模は、長軸１ｍ以上、短軸34～50㎝、深さ８～17㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は、炭化物が多量に混入する褐灰色粘土である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1203土壙（第16図）

調査区東部で発見した土壙である。規模は長軸1.5m、深さ20㎝である。壁は若干の起伏を伴いながら緩やかに立ち上がっている。埋土は２層に分けることができる。上層は黒褐色粘質土、下層は灰黄褐色砂質土が主体であり、このうち上層にはオリーブ褐色粘質土が小ブロック状に混入している。

遺物は出土していない。

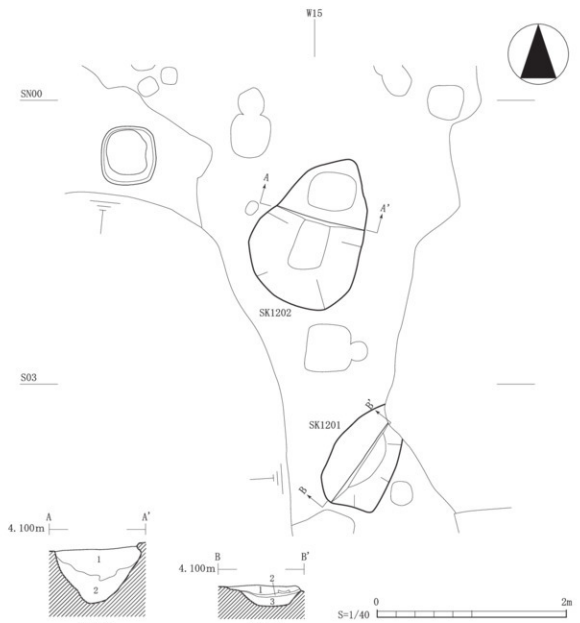
ＳＫ1202土壙（第17図）

調査区西部で発見した土壙である。規模は長軸1.64m、深さ80cmである。底面は概ね平坦であるが、上幅に比べると極端に窄まっている。壁は若干の凹凸を伴いながら、比較的急に立ち上がっている。埋土は２層に別けることができる。上層が黒褐色粘質土、下層が灰色砂であり、下層には黄褐色砂質土や黒褐色粘質土が混入している。

遺物は、土師器杯（ＢⅡ・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅴ類）・瓶、丸瓦（ⅡＢ類）が出土している。

ＳＫ1201土壙（第17・18図）

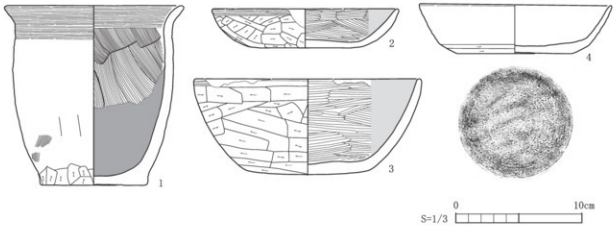
調査区西部で発見した土壙である。規模は長軸1.1m以上、短軸0.68m、深さ27cmである。壁は若干起伏を伴うものの、緩やかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。埋土は３層に分けることができる。いずれ



第17図　ＳＫ1201・1202平面図・断面図

も黒褐色粘質土を主体としており、にぶい黄褐色砂質土が僅かに混入している。また、１層には炭化物が多く混入している。

遺物は、土師器杯（A類）・甕（A類）、須恵器杯（I類）が出土している。



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・甕	ＳK1201・１層	ヘラケズリ、ハケメ、口縁部：ヨコナデ	ヘラナデ、口縁部：ヨコナデ	14.2 13/24	8.4 24/24	14.3	4-1	R23	内面に漆付着
2	土師器・杯	ＳK1201・１層	ヘラケズリ、口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.8) 6/24	9.2 12/24	3.1	－	R８	A類
3	土師器・杯	ＳK1201・１層	ヘラケズリ、口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(18.0) 3/24	(8.8) 10/24	7.6	4-2	R22	A類
4	須恵器・杯	ＳK1201・１層	ロクロナデ、底部～体部下半：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	15.2 24/24	9.1 24/24	4	4-3	R24	I類

第18図　ＳＫ1201出土遺物

〔Ⅴ層上面検出遺構〕

掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙などを発見した。東端部の溝跡を除くすべての遺構が、Ⅳ層に直接覆われている。

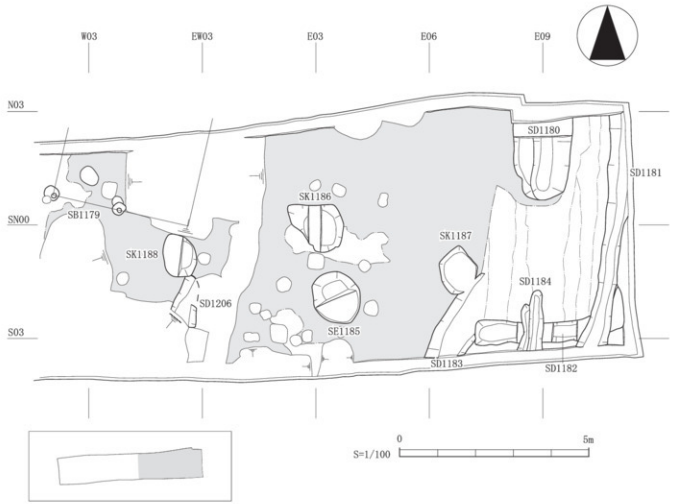
ＳＢ1178掘立柱建物跡（第21図）

調査区中央部で発見した掘立柱建物跡である。３基の柱穴から推定したものであり、桁行３間以上、梁行２間の南北棟と考えられる。南西隅柱穴と西側柱列南より１間目柱穴で柱痕跡、東側柱列南より２間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西側柱列で測ると、南で５度18分西に偏している。建物の規模についてみると、桁行は推定3.7m以上、柱間は西側柱列の南から１間目が1.78mである。梁行は西妻で約2.9mと推測される。柱穴の平面形は円形に近く、規模は南西隅柱穴で測ると、直径30㎝、深さ40㎝である。埋土は、黒褐色粘質土、褐灰色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に多量に混入している。柱痕跡は直径15㎝の円形であり、埋土は黒色粘土や黒褐色粘土である。

遺物は、掘り方から古代の土器片が少量出土している。

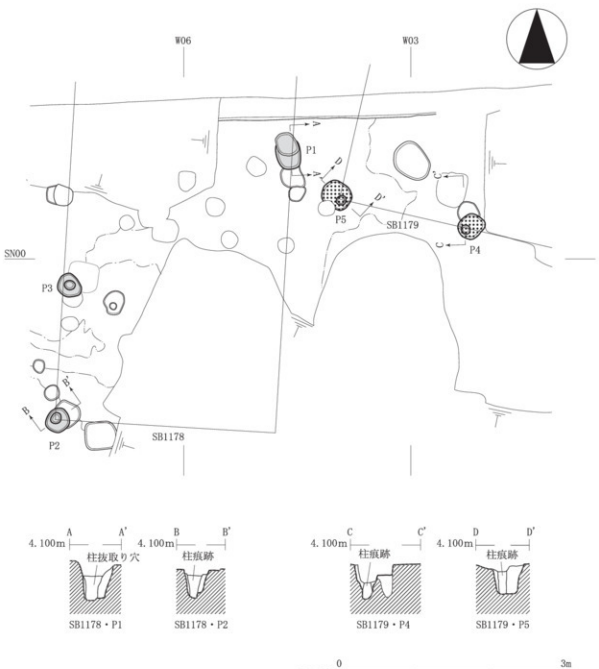
ＳＢ1179掘立柱建物跡（第21図）

調査区中央部で発見した掘立柱建物跡である。東西１間の柱列より推定したものであり、発見した柱列は建物の南妻であると考えられる。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、西で13度33分北に偏して



第19図　Ⅴ層上面検出遺構平面図（1）

第20図　Ⅴ層上面検出遺構平面図（2）



第21図　ＳＢ1178・1179平面図・断面図

おり、柱間は1.71mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は南西隅柱穴で測ると長辺39cm、短辺34cm、深さ38cmである。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径12～13cmの円形であり、埋土は黒色粘土、黒褐色粘土である。

遺物は、掘り方から古代の土器片が少量出土している。

ＳＢ1176掘立柱建物跡（第22図）

調査区中央部で発見した掘立柱建物跡である。４基の柱穴から推定したものであり、桁行３間以上、梁行２間の南北棟と考えられる。西側柱列南より１間目柱穴で柱抜取り穴（註）、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＢ1175・1177と重複しているが、新旧関係は明らかでない。方向は、西側柱列で測ると、南で４度50分西に偏している。建物の規模についてみると、桁行は3.68m以上、柱間は南より1.72m、1.96mである。梁行は南から２間目柱穴間で測ると3.44mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は西側柱列南から１間目柱穴で測ると、長辺50cm、短辺40cm、深さ50cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に多く混入している。また、南西隅柱穴と西側柱列南から２間目柱穴に灰白色火山灰が多量に混入（二次堆積）している。柱痕跡は直径10～12cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。

遺物は、掘り方や柱痕跡から古代の土器片が少量出土している。

ＳＢ1177掘立柱建物跡（第22図）

調査区中央部で発見した掘立柱建物跡である。東西２間の柱列より推定したものであり、発見した柱列は建物の南妻であると考えられる。ＳＢ1176と重複しているが、新旧関係は明らかでない。南西隅柱穴と南妻棟通り柱穴で柱痕跡、南東隅柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、発掘基準線と概ね一致している。建物の規模は、梁行約4.2m、柱間は西より2.05m、約2.1mである。柱穴の平面形は円形に近く、規模は南妻棟通り柱穴で測ると、長径45cm、深さ71cmである。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に多く混入している。柱痕跡は直径10～12cmの円形であり、埋土は黒色粘質土である。

遺物は、柱痕跡から古代の土器片が少量出土している。

ＳＢ1175掘立柱建物跡（第23図）

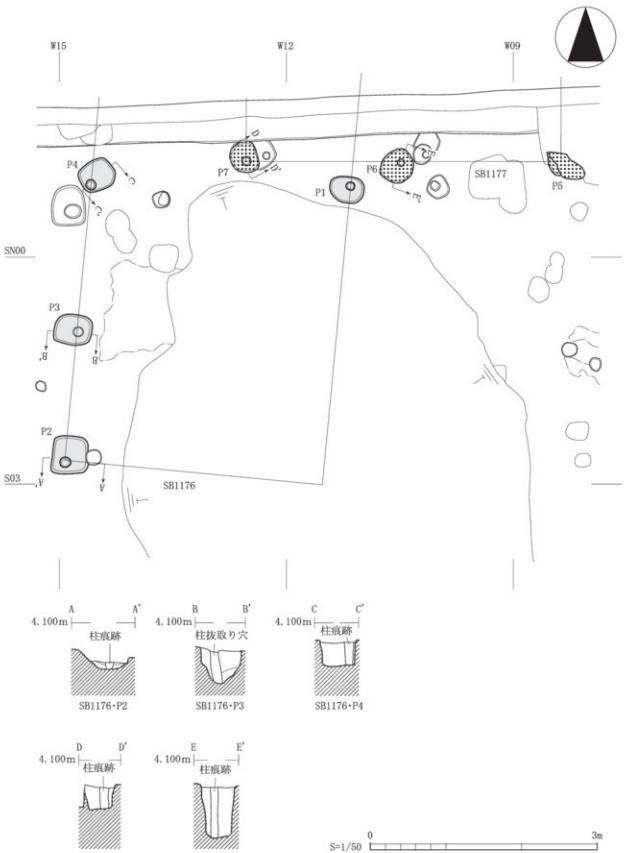
調査区中央部で発見した掘立柱建物跡である。東西の柱列より推定したものであり、発見した柱列は建物の南側柱列であると考えられる。南西隅柱穴で柱抜取り穴、その他の柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＢ1176と重複しているが、新旧関係は明らかでない。方向は、西で約５度北に偏している。建物の規模は、桁行約7.2m、柱間は西から約1.8m、5.42m（３間分）である。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は南側柱列西から１間目柱穴で測ると、長辺53cm、短辺45cm、深さ28cmである。埋土は、黒色粘土、褐灰色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が僅かに混入している。柱痕跡は直径17cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。

遺物は、掘り方や抜取り穴から古代の土器片が少量出土している。

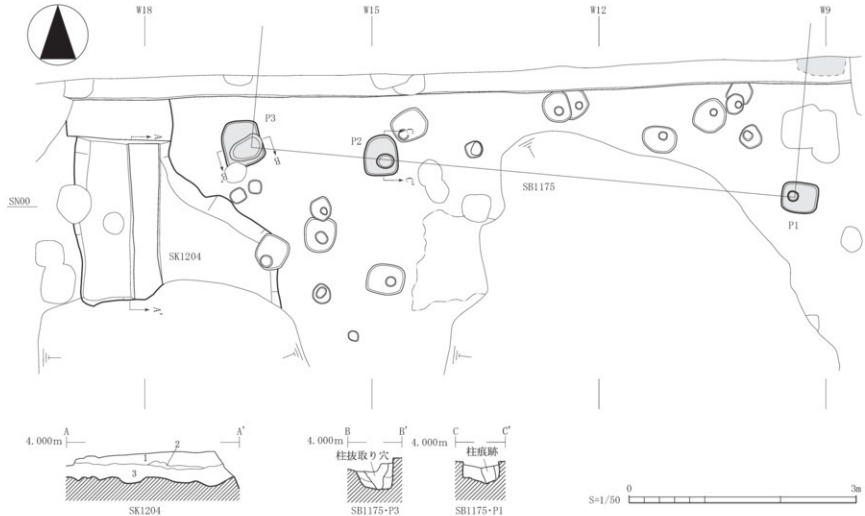
ＳＢ1174掘立柱建物跡（第24図）

調査区西部で発見した掘立柱建物跡である。東西２間の柱列より推定したものであり、発見した柱列は

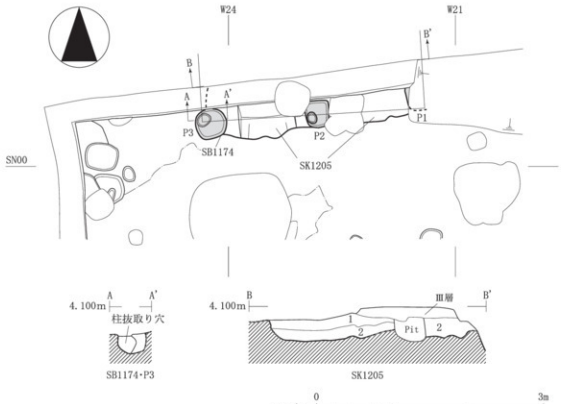
（註）このうち、西側柱列南より１間目柱穴では「柱のあたり痕跡を残す柱抜取り穴」を確認している。埋土に焼土や灰白色火山灰、土器片が多く混入していることから、ほぼ垂直方向に柱を抜き取った痕跡と考えられる。



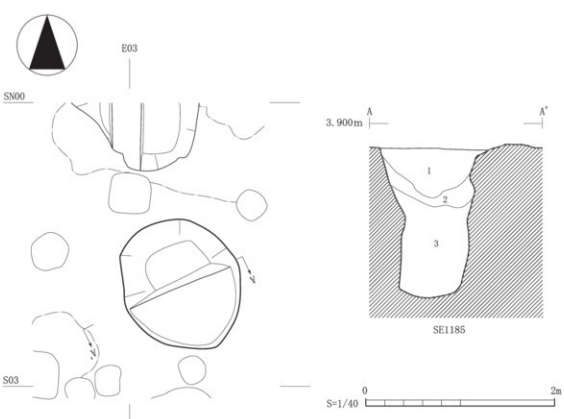
第22図　ＳＢ1176・1177平面図・断面図



第23図　ＳＢ1175、ＳＫ1204平面図・断面図



第24図　ＳＢ1174、ＳＫ1205平面図・断面図



第25図　ＳＥ1185平面図・断面図

建物の南妻であると考えられる。南西隅柱穴と南妻棟通り柱穴で柱痕跡を確認したが、南東隅柱穴は大部分が後世の攪乱に破壊されている。ＳＤ1205と重複し、それよりも新しい。方向は、西で２度南に偏している。建物の規模は、南妻西より１間目の柱間で1.43mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は南妻棟通り柱穴で測ると、一辺40cm、深さ24cmである。埋土は、黄褐色土が主体であり、黒色土が多量に混入している。柱痕跡は直径15～23cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、掘り方から古代の土器片が少量出土している。

ＳＥ1185井戸跡（第25図）

調査区東部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であり、規模は上幅約1.5m、深さ約1.6mである。壁はやや起伏が多いものの、垂直に立ち上がっている。底面はＸ層下層の粗砂層に達しており、標高値でみると2.2mになる。埋土は３層に分けることができる。いずれも黒色粘土が主体であるが、３層には緑灰色砂質土が多量に混入している。

遺物は、古代の土器片や瓦が少量出土している。

ＳＤ1180・1184溝跡（第26・27図）

調査区東部で発見した南北方向の溝であり、方向や規模等から一連の区画溝と考えられる。両溝間には約2.4mの空間があり、区画内に入る土橋状の通路を形成しているものと推測される。

ＳＤ1180：規模は、長さ2.6m以上、上幅約1.4m、深さ35～44cmである。壁は垂直またはそれに近い角度で立ち上がるが、西辺では中位に幅40cm程度の平坦面が形成されている。埋土は、２層に分けることができる。上層は、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入する黒褐色粘土、下層は黒色粘土である。

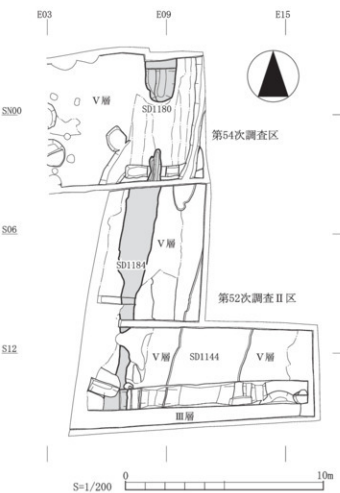
遺物は、古代の土器片や瓦が少量出土している。

ＳＤ1184：ＳＤ1182と重複し、それよりも新しい。南側の第52次調査Ⅱ区でこの延長部分を発見しており、さらに南に延びることを確認している。方向は北で約８度東に偏しており、規模は、長さ15m以上、幅1.6m、深さ25～31cmである。壁は垂直気味に立ち上がるが、西辺では中位に幅90cm程度の平坦面が形成されている。底面は、北から南に向かって傾斜しており、比高は12cm以上である。埋土は、黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が混入している。

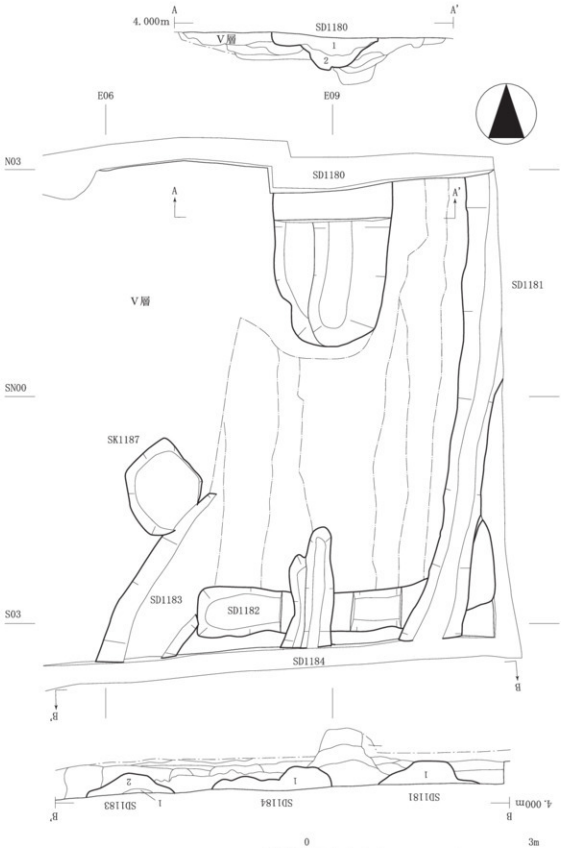
遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＤ1181溝跡（第27図）

調査区東部で発見した南北方向の溝跡であ



第26図　ＳＤ1180・1184と第52次調査Ⅱ区



第27図　ＳＤ1180・1184ほか平面図・断面図

る。ＳＤ1182と重複し、それよりも新しい。方向は、北で約11度東に偏しており、規模は、長さ6.1m以上、上幅43～75cm、深さ8～29cmである。壁は若干凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は北側から南側に傾斜しており、両端の比高は21cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に多量に混入している。

遺物は北宋銭（熙寧元寶・元祐通寶）のほか、古代の土器片が少量出土している。

ＳＤ1182溝跡（第27図）

調査区東部で発見した東西方向の溝跡であり、東壁付近で北に屈曲している。ＳＤ1184・1181・1183と重複し、それらよりも古い。方向は、西で約７度南に偏しており、規模は、東西約3.9m、上幅50～60cm、深さ５～12cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面も凹凸はなく概ね平坦である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＤ1183溝跡（第27図）

調査区東部で発見した南北方向の溝跡である。ＳＤ1182、ＳＫ1187と重複し、前者よりも新しく、後者よりも古い。方向は、北で約28度東に偏しており、規模は、長さ1.8m以上、上幅50～70cm、深さ25cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面も凹凸はなく概ね平坦である。埋土は、２層に分けることができる。上層が黒褐色粘質土、下層が黒色粘土である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1186土壙（第28図）

調査区東部で発見した土壙である。平面形は不整形であり、規模は上幅1.1～1.8m、深さ28～34cmである。底面にはやや凹凸があり、平坦ではない。壁は西側は緩やかに立ち上がるが、それ以外は垂直気味である。埋土は４層に分けることができる。１・３・４層が黒褐色粘質土であり、２層が炭化物層である。このうち４層には、にぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＫ1187土壙（第27図）

調査区東部で発見した土壙である。平面形は方形であり、規模は長辺約１m、深さ９～11cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色粘質土が主体であり、炭化物やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

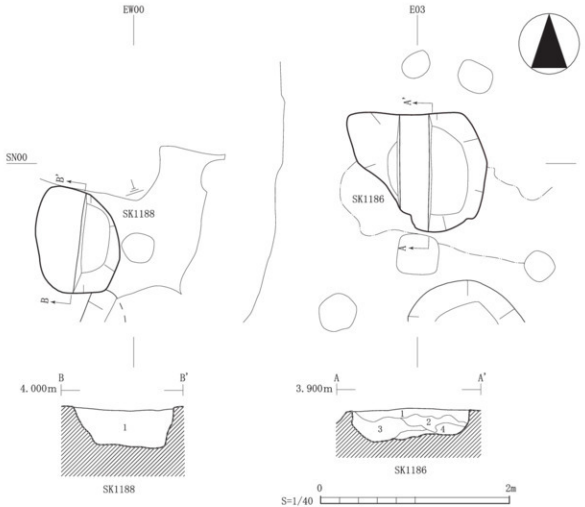
ＳＫ1188土壙（第28図）

調査区東部で発見した土壙である。平面形は楕円形であり、規模は長径1.1m、深さ40cmである。底面は概ね平坦であり、壁は垂直またはそれに近い角度で立ち上がっている。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、上位に灰白色火山灰が小ブロック状に二次堆積している。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＫ1204土壙（第23図）

調査区西部で発見した土壙である。平面形は不整形であり、規模は東西2.9m以上、南北1.4～2.6m、深さ25～46cmである。底面は凹凸が著しく、平坦ではない。壁についてみると北側は緩やかであるが、南側に向かうにつれて急な立ち上がりとなっている。埋土は３層に分けることができる。１層が黒褐色粘質土、２層がにぶい黄橙色砂質土、３層が黒色粘質土であり、このうち３層には炭化物が多量に混入してい



第28図　ＳＫ1186・1188平面図・断面図

る。

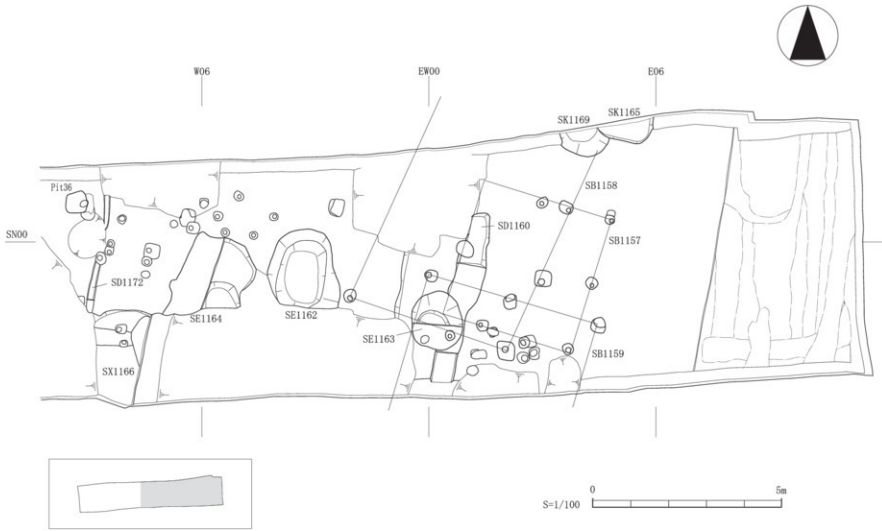
遺物は、古代の土器片が少量出土している。

〔Ⅳ層上面検出遺構〕

掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙を発見した。西半部はⅢ層に覆われているが、東半部はⅠⅠ層直下がⅣ層となっている。

ＳＢ1157掘立柱建物跡（第31図）

調査区東部で発見した南北棟掘立柱建物跡である。桁行は２間であるが、梁行は北妻が２間、南妻が３間となる。柱穴は７基検出しており、西側柱列北より１間目柱穴を除くすべての柱穴で柱痕跡を確認した。ＳＥ1163、ＳＤ1160と重複し、それらよりも古い。方向は東側柱列で測ると、北で18度23分東に偏している。建物の規模についてみると、桁行は東側柱列で3.58m、柱間は北から1.78m、1.80mである。梁行は東側柱列北より１間目柱穴と西側柱列北より１間目柱穴間で測ると、約3.5mである。柱間は南妻で東から1.22m、1.21mである。柱穴の平面形は円形と方形があり、規模は東側柱南より１間目柱穴で測ると、



第29図　Ⅳ層上面検出遺構平面図（1）

長辺31cm、短辺29cm、深さ25cmである。埋土は黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に僅かに混入している。柱痕跡は直径10～13cmであり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

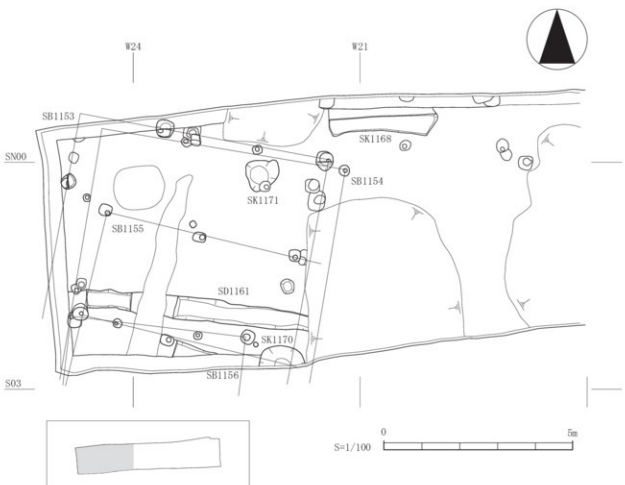
ＳＢ1158掘立柱建物跡（第31図）

調査区東部で発見した、桁行３間以上、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴は５基検出しており、南西隅柱穴で柱抜取り穴、それ以外のすべてで柱痕跡を確認した。ＳＥ1163と重複し、それよりも新しい。方向は、東側柱列で測ると、北で24度24分東に偏している。建物の規模についてみると、桁行は東側柱列で4.02m以上、柱間は南から2.01m、2.01mである。梁行は南妻で約4.3m、柱間は西から約2.8m（２間分か）、1.50mである。柱穴の平面形は円形と方形があり、規模は南東隅柱穴で測ると、長辺50cm、短辺45cm、深さ48cmである。埋土は黒色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に多く混入している。柱痕跡は直径９～13cmの円形であり、埋土は黒色粘質土である。

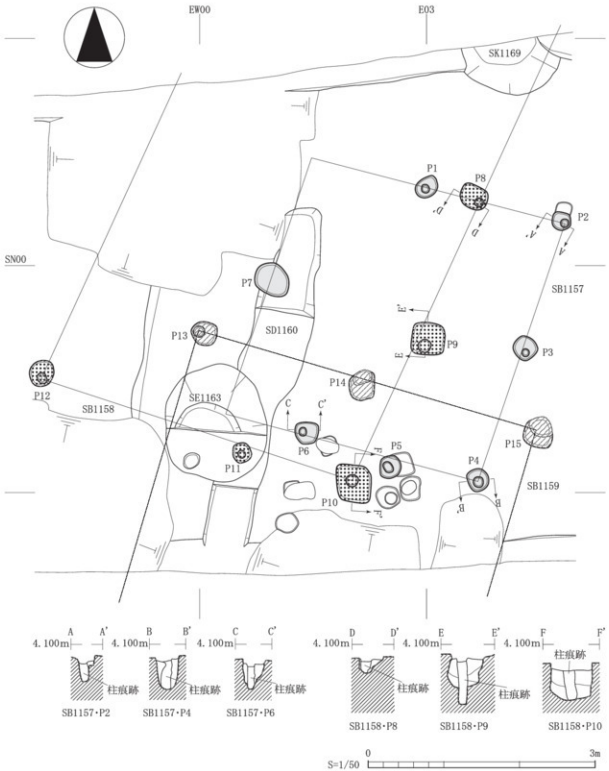
遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＢ1159掘立柱建物跡（第31図）

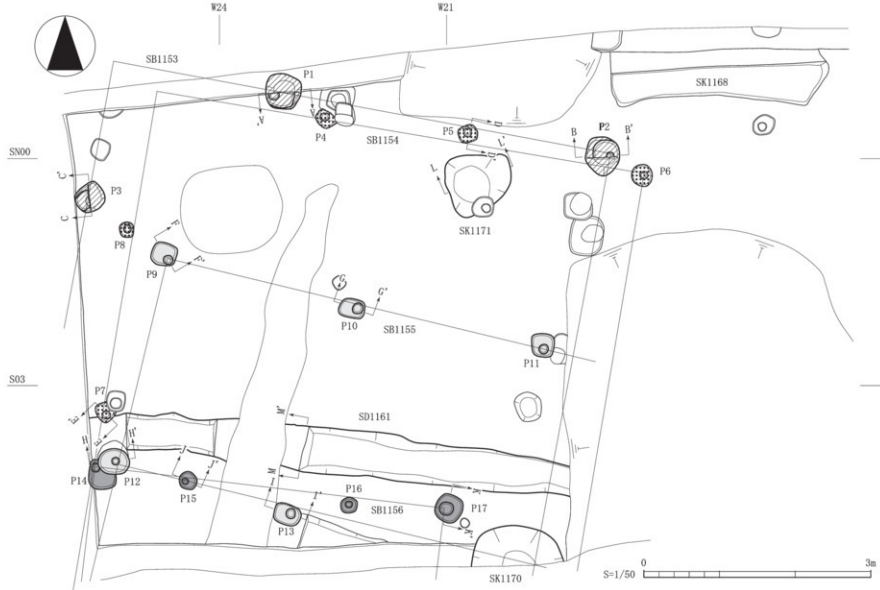
調査区東部で発見した掘立柱建物跡である。東西２間の柱列より推定したものであり、発見した柱列は建物の北妻であると考えられる。北西隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、



第30図　Ⅳ層上面検出遺構平面図（２）



第31図　ＳＢ1157・1158・1159平面図・断面図



第32図　ＳＢ1153・1154・1155・1156ほか平面図

西で約15度北に偏している。建物の規模についてみると、梁行は約4.7mであり、柱間は西から約2.3m、約2.4mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は北妻棟通り柱穴で測ると、長辺40cm、短辺33cm、深さ29cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色砂質土が斑状に多く混入している。柱痕跡は直径14cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

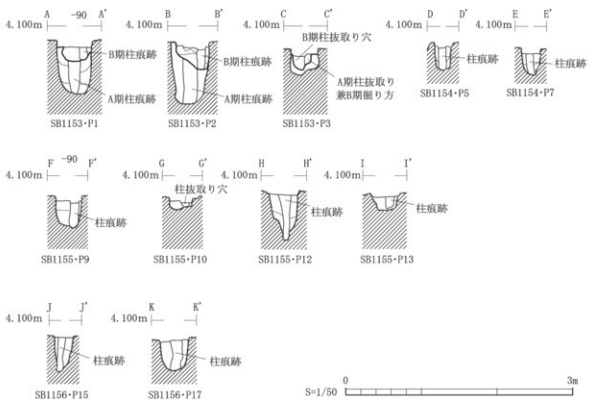
ＳＢ1153掘立柱建物跡（第32・33図）

調査区西部で発見した掘立柱建物跡である。３基の柱穴から推定したものであり、東西２間、南北２間以上と考えられる。規模は、北側柱列で約6.7mと推測される。検出したすべての柱穴で、２時期の変遷（A→B期）を確認している。

A期：北側柱列のすべての柱穴で柱痕跡、西側柱列北より１間目柱穴で柱抜取り穴（B期掘り方兼用）を確認した。方向は北側柱列で測ると、東で11度59分南に偏している。北側柱列の柱間は、東より１間目が4.33m（２間分か）である。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は北東隅柱穴で測ると、長辺50cm、短辺45cm、深さ71cmである。埋土は、黒色粘土、褐灰色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土がブロック状に多量に混入している。また、西側柱列北より１間目柱穴では、灰白色火山灰粒が僅かに認められた。柱痕跡は直径15～18cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

B期：北側柱列の全ての柱穴で柱痕跡、西側柱列北より１間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、北側柱列で測ると、東で10度20分南に偏している。北側柱列の柱間は、東より１間目が4.53m（２間分か）



第33図　ＳＢ1153・1154・1155・1156断面図

である。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は北東隅柱穴で測ると、長辺31cm、短辺29cm、深さ28cmである。埋土は、黒色粘質土、褐灰色粘質土が主体である。柱痕跡は直径11～15cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＢ1154掘立柱建物跡（第32・33図）

調査区西部で発見した掘立柱建物跡である。５基の柱穴から推定したものであり、東西３間、南北３間以上と考えられる。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、北側柱列で測ると、東で10度36分南に偏している。建物の規模は、北側柱列で約6.6mと推測され、柱間は東より2.34m、1.89mである。西側柱列は、北から１間目と２間目柱穴間で2.45mである。柱穴の平面形は方形と円形があり、規模は北東隅柱穴で測ると長径29cm、深さ21cmである。埋土は黒色粘土、黒色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や炭化物が斑状に若干混入している。柱痕跡は直径10cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＢ1155掘立柱建物跡（第32・33図）

調査区西部で発見した、南北２間以上、東西２間以上の掘立柱建物跡である。建物内部から、間仕切りの柱穴を１基検出している。柱穴は５基検出しており、そのすべてで柱痕跡を確認した。ＳＢ1153・1154・1156、ＳＤ1161と重複し、ＳＢ1156、ＳＤ1161よりも新しい。方向は、北側柱列で測ると、西で13度16分北に偏している。建物の規模についてみると、北側柱列が5.1m以上、柱間は西から2.59m、2.51mである。西側柱列の柱間は北から１間分が2.74mである。平面形は方形を基調とし、規模は西側柱列北から１間目柱穴で測ると、長辺40cm、短辺34cm、深さ33cmである。埋土は黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状または斑状に多く混入している。柱痕跡は直径12～15cmの円形であり、埋土は黒色粘土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

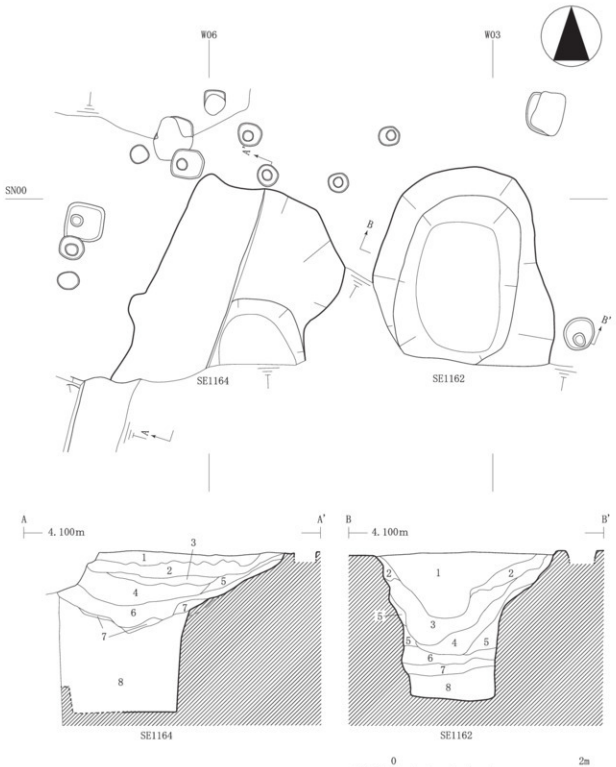
ＳＢ1156掘立柱建物跡（第32・33図）

調査区西部で発見した掘立柱建物跡である。東西３間の柱列より推定したものであり、発見した柱列は建物の北妻であると考えられる。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、北妻で測ると東で６度39分南に偏している。建物の規模は、梁行4.67mであり、柱間は西より1.20m、2.18m、1.29mである。柱穴の平面形は北西・北東隅柱穴が方形、それ以外が円形である。規模は北東隅柱穴で測ると、一辺36cm、深さ44cm、北側柱列西から１間目柱穴で測ると長径25cm、深さ48cmである。埋土は、黒色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が混入している。また、北東隅柱穴では、灰白色火山灰粒が僅かに混入している。柱痕跡は直径８～16cmの円形であり、埋土は黒色粘質土である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＥ1162井戸跡（第34・35図）

調査区東部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は楕円形であり、規模は長径約1.9m、深さ約1.5mである。壁は下方が垂直に、上方は外に広がりながら緩やかに立ち上がっている。底面はＸ層下層の粗砂層に達しており、標高値でみると2.3mになる。埋土は８層に分けることができる。１～３層が黒色粘質土、４・６・７層が亜泥炭層、５・８層が黒色粘土であり、６層に灰色粘土、７・８層に黒色砂が多量に混入している。



第34図　ＳＥ1162・1164平面図・断面図

単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	施釉陶器 丸皿	SE1102・3層	付高台	施釉	(10.6) 7/24	6.0 8/24	2.4	4-5	R2	瀬戸・美濃窯産
2	施釉陶器 丸皿	SE1162・3層	底部：回転糸切り、付高台	施釉	－	5.8 8/24	－	4-4	R1	瀬戸・美濃窯産

第35図　ＳＥ1162出土遺物

遺物は施釉陶器丸皿のほか、古代の土器片、砥石が出土している。

ＳＥ1164井戸跡（第35図）

調査区東部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は方形であり、規模は長径2.3m以上、短径1.8m、深さ1.8mである。壁は下方が垂直に、上方は外に広がりながら緩やかに立ち上がっている。底面はⅨ層下層の粗砂層に達しており、標高値でみると2.1mになる。埋土は８層に分けることができる。１層が黒褐色粘質土、２・６・７層が黒色粘質土、３～５層が黒色粘土、８層が黒色砂質土である。このうち、１・２層には明黄褐色砂質土や褐色砂質土、炭化物、３～５層にはオリーブ褐色粘質土やにぶい黄色粘質土が多量に混入しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。６層は垂泥炭層に近く、８層にはⅦ層に起因する暗オリーブ灰色砂が多量に混入している。

遺物は、古代の土器片、砥石が出土している。

ＳＥ1163井戸跡（第36・37図）

調査区東部で発見した素掘りの井戸跡である。ＳＢ1157・1158、ＳＤ1160と重複し、ＳＢ1158より古く、ＳＢ1157、ＳＤ1160よりも新しい。平面形は円形であり、規模は直径約1.3m、深さ約1.4mである。壁は下方が垂直に、上方は外に広がりながら緩やかに立ち上がっている。底面はⅨ層下層の粗砂層に達しており、標高値でみると2.4mになる。埋土は３層に分けることができる。１層が黒色粘質土、２層が黒色砂質土、３層が黒褐色粘土であり、１・３層ににぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入している。

遺物は、古代の土器片、砥石が出土している。

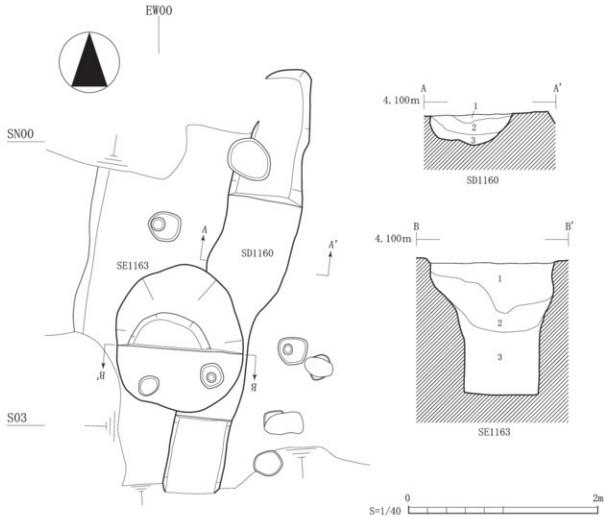
ＳＤ1160溝跡（第36・37図）

調査区東部で発見した、南北方向の溝跡である。ＳＢ1157・1158・1159、ＳＥ1163と重複し、ＳＢ1157よりも新しく、ＳＢ1158、ＳＥ1163よりも古い。方向は、北で約13度東に偏しており、規模は、長さ4.5m以上、上幅59～84cm、深さ6～32cmである。底面は若干凹凸があるものの、概ね平坦である。壁は西側が垂直に、東側はそれよりやや緩やかに立ち上がっている。埋土は、３層に分けることができる。１層が黒褐色粘質土、２・３層が黒色粘質土であり、３層には褐色砂が多く混入している。

単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	白磁・椀	SD1160	高台削り出し	施釉		(5.8) 3/24	－	－	R37	(皿か？)

第36図　ＳＤ1160出土遺物

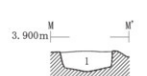


第37図　ＳＥ1163、ＳＤ1160平面図・断面図

遺物は白磁椀のほか、古代の土器片が出土している。

ＳＤ1161溝跡（第32・38図）

調査区西部で発見した、東西方向の溝跡である。ＳＢ1155・1156と重複し、それらよりも古い。方向は、西で約５度北に偏している。規模は、長さ6.4m以上、上幅39～60cm、深さ21cmである。壁はほとんど起伏が無く、垂直気味に立ち上がっている。底面は西側から東側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は８cmである。埋土は黒色粘土が主体であり、炭化物、焼土、にぶい黄橙色砂質土が斑状に若干混入している。

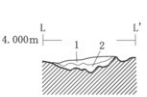


第38図　ＳＤ1161断面図

遺物は出土していない。

ＳＫ1171土壙（第32・39図）

調査区西部で発見した土壙である。平面形は不整形であり、規模は長軸66cm、深さ26cmである。底面及び壁は凹凸が著しく、立ち上がりも一様でない。埋土は２層に分けることができる。上層が黒褐色粘質土、下層が黒色粘土で、いずれにも炭化物が多量に混入している。



第39図　ＳＫ1171断面図

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＫ1165土壙（第40図）

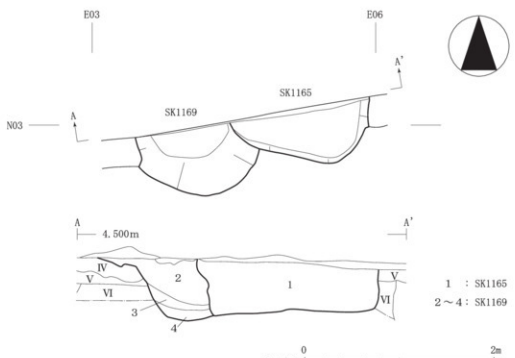
調査区東部で発見した土壙である。ＳＢ1158、ＳＫ1169と重複しており、それらよりも新しい。平面形は方形であり、規模は長軸1.5m以上、深さ50～55cmである。底面は平坦であり、断面は垂直に立ち上がっている。埋土は黒褐色粘質土であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に多量に混入している。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。

ＳＫ1169土壙（第40図）

調査区東部で発見した土壙である。ＳＢ1158、ＳＫ1165と重複し、前者よりも新しく後者よりも古い。平面形は円形であり、規模は長辺1.3m以上、深さ65cmである。底面は平坦であり、壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土は３層に分けることができる。１・３層が黒色粘質土、２層が焼土層である。

遺物は、古代の土器片が少量出土している。



第40図　ＳＫ1165・1169平面図・断面図

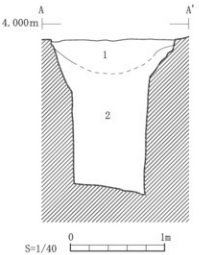
〔Ⅲ層上面検出遺構〕

井戸跡、溝跡がある。

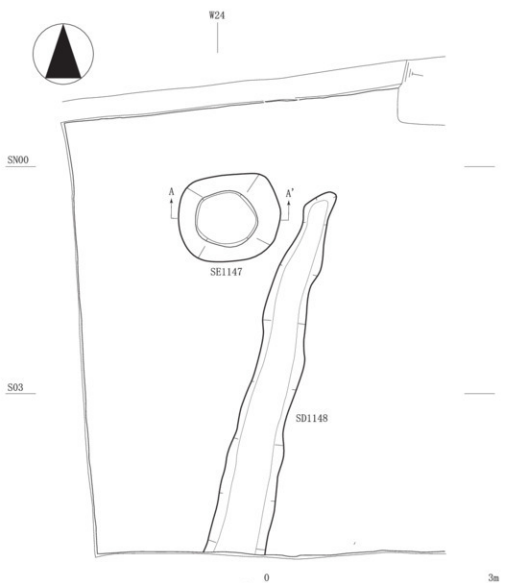
ＳＥ1174井戸跡（第41・42図）

調査区西部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であり、規模は長径1.3m、深さ1.8mである。壁は下方が垂直に、上方は外に広がりながら緩やかに立ち上がっている。底面はⅨ層下層の粗砂層に達しており、湧水が著しい。埋土は２層に分けることができる。１層が暗灰黄色砂質土、２層が黒褐色粘土であり、２層には腐食した木片が多量に混入していた。

遺物は磁器染付椀のほか、古代の土器片が出土している。



第41図　ＳＥ1147断面図



第42図　Ⅲ層上面検出遺構平面図

ＳＤ1148溝跡（第42図）

調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。方向は、北で約14度東に偏しており、規模は、長さ4.9m以上、上幅57～77cm、深さ約20cmである。底面に凹凸はほとんどなく、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、褐色粘質土（Ⅱ層）の単層である。

遺物は古代の土器片が出土している。

その他遺構・堆積層出土の遺物（第43・44図）

Ⅵ層上面検出遺構のうち、建物を構成しない柱穴や、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層、撹乱埋土などから、土師器杯（Ａ・Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類）・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器、緑釉陶器、墨書土器、ヘラガキ土器、風字硯、かわらけ、陶磁器、鉄鏃、鉄製盖などが出土している。ほとんどのものが小片であり、実測可能なものは僅かである。

４．考察

ここでは、各層ごとに発見した遺構の年代を検討したあと、周辺の調査成果を踏まえながらこれらの性格等について若干の考察を行う。

（１）遺構の年代

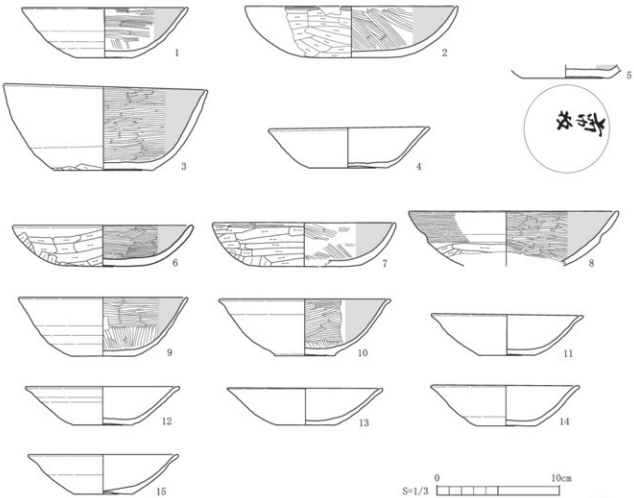
①Ⅸ層水田跡

層序でも述べたように、平面及び土層断面の調査では畦畔や水口等の施設、耕作痕などの土層の乱れを確認することができなかった。しかし、土壌分析の結果多量のプラント・オパールが検出され、非常に高い確率で水田跡である可能性が指摘されている（附章２）。層位的には、古代の最終遺構検出面であるⅥ層上面から50～60cm下層で確認している。標高値を計測すると東端部で3.2m、西端部で3.15mであり、やや西に向かって傾斜している。出土遺物がないため、直接Ⅸ層の年代を明らかにすることはできないが、本遺跡多賀前・掃下し地区や西側に隣接する新田遺跡では、これと類似する黒色粘土層が確認されている（Ⅱ-３第41図）。いずれも古代の最終遺構検出面に覆われており、標高は2.2～4.8mの範囲に分布している。これらの層では、土壌分析の結果高い密度でプラント・オパールが検出されており、特に山王遺跡第30・43・51次調査や新田遺跡第19・29次調査では、畦畔や水口などの施設も確認されている。出土した遺物から、概ね古墳時代前期頃のものと推測されている。したがって、Ⅸ層については土壌分析の結果や周辺地区との位置関係、層位及び標高値等を考慮すれば、古墳時代前期の水田層であると考えられる。

②Ⅵ層上面検出遺構

Ⅵ層上面遺構には、ＳＸ1150西７南北道路跡、ＳＢ1189～1194掘立柱建物跡、ＳＤ1195・1196溝跡、ＳＫ1201・1202土壙などがある。

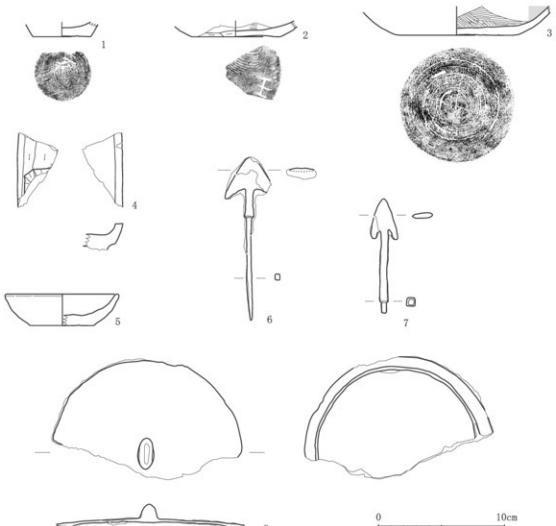
ＳＸ1150では、西側溝ＳＤ1152の重複関係から３時期の変遷（Ａ→Ｃ期）があると理解した。変遷の過程について見ると、Ａ期側溝が最も西側に位置し、Ｂ期側溝がその2.5m東側に、Ｃ期側溝がＡ・Ｂ期の中間に造られている。側溝の傾きについてみると、Ａ期が約１度、Ｂ期が約２度、Ｃ期が約３度東に偏しており、新しくなるにしたがって徐々に傾きが大きくなる傾向が窺える。年代については、Ｂ期側溝埋土に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が二次堆積していることから、Ａ期が10世紀前葉以前、Ｂ・Ｃ期はそれ以降であることが明らかである。なお、Ａ期の埋土にはⅥ層起因のにぶい黄橙色砂質土が多量に混入していることから、Ｂ期へ改修する際に埋め戻した可能性が考えられる。したがって、Ａ期の上限につい



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	P i 193 柱抜取り穴	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	13.6 16/24	4.6 24/24	4.1	—	R6	口縁部に油煙付着、BV類
2	土師器・杯	P i 1104 柱抜取り穴	ヘラケズリ。口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(17.4) 2/24	(8.0) 7/24	4.2	—	R7	A類
3	土師器・杯	P i 1104 柱抜取り穴	ロクロナデ、底部～体部下半：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	16.7 21/24	8.0 24/24	7.1	—	R26	A類
4	須恵器・杯	P i 1104 柱抜取り穴	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.0 18/24	6.4 24/24	3.4	5-1	R3	B類
5	土師器・杯	P i 1104 柱抜取り穴	ロクロナデ、底部：ヘラ切り、体部下半：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	—	7.1 24/24	—	5-8	R20	底部外面に墨書「口部口」、BIa類
6	土師器・杯	V層	ヘラケズリ。口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.8) 6/24	6.0 15/24	3.4	—	R2	A類
7	土師器・杯	V層	ヘラケズリ。口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(15.0) 16/24	9.6 9/24	3.6	—	R29	A類
8	土師器・杯	V層	ヘラケズリ。口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(18.4) 8/24	—	—	—	R28	A類
9	土師器・杯	V層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(13.8) 4/24	5.0 24/24	4.8	—	R25	BV類
10	土師器・杯	IV層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(14.0) 2/24	4.8 16/24	4.7	—	R30	BV類
11	須恵系土器杯	IV層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.5 20/24	4.6 24/24	3.4	5-2	R9	
12	須恵系土器杯	IV層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.6 16/24	4.8 16/24	3.2	5-3	R10	
13	須恵系土器杯	IV層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.7 16/24	4.8 24/24	3.1	5-4	R11	
14	須恵系土器杯	IV層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.2 14/24	4.8 24/24	3.4	5-5	R13	
15	須恵系土器杯	IV層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.2 14/24	4.8 18/24	3.2	—	R14	

第43図　その他柱穴、堆積層ほか出土遺物（1）



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	攪乱	底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	4.6 19/24	－	5-7	R18	底部外面にヘラガキ「万」
2	土師器・杯	Ⅳ層	底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	7.0 4/24	－	5-9	R19	底部外面にヘラガキ「王」 BⅡc類
3	土師器・杯	Ⅳ層	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	9.1 24/24	－	－	R33	底部外面にヘラガキ「×」 B-1類
4	風字硯	排水溝	ヘラケズリ					－	R17	
5	かわらけ・皿	Ⅲ層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	9.0 6/24	5.0 8/24	3	－	R8	
6	鉄鏃	Ⅴ層	長さ：13.0、最大幅：4.0、厚さ：0.3～0.5					5-10	R1	
7	鉄鏃	攪乱	長さ：9.0以上、最大幅：2.0、厚さ：0.4～0.6					5-11	R2	
8	鉄製盖	P1136	直径：15.25、厚さ：0.2、					－	R5	

第44図　その他柱穴、堆積層ほか出土遺物（2）

ては、10世紀前葉をさほど遡らない頃と考えたい。

掘立柱建物跡については、分布状況から東側の建物群（ＳＢ1189・1190・1192～1194）と西側の建物（ＳＢ1191）に分けることができる。このうち東側の建物群では遺構の重複関係や掘り方埋土の類似性から、ＳＢ1193（Ａ期）→ＳＢ1192（Ｂ期）→ＳＢ1189・1190（Ｃ期）といった３段階の変遷が認められた。変遷の過程をみると、Ａ期建物跡が最も西側に位置し、Ｂ期建物跡がその２～2.5m東側に、Ｃ期建物跡がＡ・Ｂ期の中間に造られている。建物の傾きはＡ期が北で５度西に、Ｂ・Ｃ期が北で８～９度東に偏しており、新しくなるにしたがって東側への傾きが大きくなる傾向が認められる。これらの年代については、ＳＢ1192（Ｂ期）掘り方から10世紀前葉頃に出現すると考えられている須恵系土器杯の小片が出土していることから、Ｂ・Ｃ期についてはそれ以降であると考えられる。Ａ期については、新旧関係でＳＢ1192より古いことが明らかであることから、10世紀前葉頃を下限として捉えておきたい。なお、調査区西端部で検出したＳＢ1191については、建物の傾きが北で２度東に偏しており、東側建物群のＡ期とＢ期の中間に位置する。一方、出土遺物を見ると、掘り方及び抜取り穴から土師器杯Ｂ類、甕Ｂ類が出土しており、須恵系土器は全く出土していない。したがって、ＳＢ1191の年代については10世紀前葉頃を下限と考えることができ、ここでは東側建物群のＡ期に相当するとしておきたい。

溝跡では、上記した建物群との新旧関係から、ＳＤ1196が10世紀前葉以降、ＳＤ1165・1198が10世紀前葉頃を下限とする年代が与えられる。このうち前者では出土遺物が古代のものに限られることから、10世紀の範疇で概ね収まるものと考えられる。一方、後者については、土師器杯・甕ともにＢ類が出土していることから、８世紀後葉を上限としておきたい。ＳＤ1199・1120では、出土した土師器杯・甕が全てＢ類であること、10世紀前葉頃に出現する須恵系土器が全く認められないことから、８世紀後葉～９世紀頃のものと考えておきたい。

土壙では、ＳＫ1201から、土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。杯はいずれも無段平底のものであり、器高の低いものと高いものが１点ずつ出土している。体部は口縁付近までヘラケズリが施されている。甕は、器高14.3cmの小型のもので、口縁部と胴部の境に僅かな段が認められる。外面は摩滅が著しいが、一部ヘラケズリ、ハケメの痕跡が確認できる。内面はナデ調整である。なお、内面には多量の漆が付着しており、漆容器に使用されたものと考えられる。須恵器杯はほぼ完全な形のものが1点出土している。底部全面及び体部下半に回転ヘラケズリを施しており、底部の切離しは明らかでない。底口比は60、径高指数は25であり、底径が大きく器高が低いものである。これらの土器と類似するものには、８世紀中頃の年代が与えられている山王遺跡ＳＤ180Ｂ溝跡出土土器（註１）や同ＳＤ677溝跡出土土器（註２）がある。いずれも土師器杯に有段丸底のものが認められ、特に前者に比較的多く認められる。須恵器杯では、ＳＤ180Ｂ溝跡出土のものが底口比53～69（56～64中心）、径高指数21～31（25～31中心）と底径が大きく器高が高いものが多いのに対し、ＳＤ677溝跡では底口比50～61（55～56中心）、径高指数23～30（24～25中心）と、ＳＤ180Ｂに比べて底径がやや小さく器高が低いものが中心となっている。これらと比べると、ＳＫ1201出土須恵器杯は、底口比はＳＤ180Ｂに近く、径高指数はＳＤ677溝跡出土のものに近似している。これらのことから、ＳＫ1201出土土器は有段丸底のものが出土していない点でＳＤ180Ｂ溝跡やＳＤ677溝跡よりも新しい要素が認められるものの、概ね８世紀

（註１）多賀城市埋蔵文化財調査センター　『山王遺跡―第10次発掘調査概報―』多賀城市文化財調査報告書第27集　1991
（註２）宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集　1997

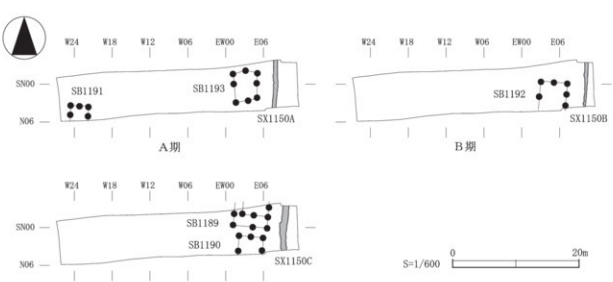
中頃とすることができる。ＳＫ1202については、土師器杯・甕共にＢ類が出土している。10世紀前葉頃に出現する須恵系土器が全く出土してないことから、８世紀後葉～９世紀頃の年代を想定しておきたい。

以上、Ⅵ層上面検出遺構の年代について検討したが、これらをまとめると第45・46図のように整理できる。これを見ると、西７南北道路とその西側の建物群には、それぞれ３時期の変遷（Ａ→Ｃ期）があり、遺構の年代や傾き、変遷の様子が概ね一致していることから、計画的に且つ同時期に存在していたものと考えられる。一方、西側ではＳＫ1201土壙やこれらを直接覆うⅤ層から８世紀の遺物が多く出土している。今回確認した遺構は僅かに土壙１基のみであるが、周辺にこの頃の遺構が分布していることも想定されよう。

③Ⅴ層上面遺構

Ⅴ層上面遺構には、ＳＢ1174～1179掘立柱建物跡、ＳＥ1185井戸跡、ＳＤ1180～1184溝跡、ＳＫ1186・1187土壙などがある。

第45図　古代の遺構変遷図



第46図　古代の道路・掘立柱建物跡変遷模式図

掘立柱建物跡は、Ⅵ層検出の建物跡に比べると掘り方の規模が一回り小さいものである。方向は西端部で西に２度傾くもの以外は、北で1～14度東に傾いている。中央部で重複関係が確認できるものもあるが、その新旧については明らかでない。

一方、東端部で検出したＳＤ1180～1182・1184溝跡については、ＳＤ1182以外はすべてⅤ層上面より掘り込まれていることを確認している。このうちＳＤ1180・1184は溝の規模や断面の形状、埋土が近似していることから、一連のものと考えられる。方向はＳＤ1184で測ると、北で８度東に偏しており、掘立柱建物跡と近い傾きを示している。このことから、ＳＤ1180・1184はそれら建物群と同時期に存在していた可能性が高く、Ⅴ層検出遺構群の東を区画する溝跡であると考えられる。

井戸跡は東半部で１基確認したのみである。素掘りのもので、平面の規模は、Ⅳ層検出の井戸跡よりもやや小さい。

これら遺構の年代については、ＳＤ1181から初鋳年代が11世紀後半の北宋銭（熙寧元寶：1068年初鋳・元祐通寶：1086年初鋳）が出土している以外は、ほとんどの遺物が古代のものに限られており、出土遺物から年代を検討することは困難である。一方、層位的に見ると、後述するⅣ層上面検出遺構との関係から下限は16世紀以前と考えられる。上限については、Ⅵ層上面で検出した遺構の年代が10世紀代にまで下ること、柱穴掘り方や井戸の形態が中世以降のものに類似することから、ここでは多少の幅を持たせて16世紀以前の中世と推測しておきたい。

④Ⅳ層上面遺構

Ⅳ層上面遺構には、ＳＢ1153～1159掘立柱建物跡、ＳＥ1162～1163井戸跡、ＳＤ1160・1161溝跡、ＳＫ1165・1169・1170・1171土壙などがある。

掘立柱建物跡は、Ⅳ層検出の建物跡に比べるとさらに掘り方が小さく、且つ円形を基調としたものとなる。方向は、北で７～24度東に偏しており、Ⅴ・Ⅵ層と比べ大きく東に振れている。

井戸跡は全て素掘りのものである。断面の形状を見ると、いずれも上方が大きく外に開き、下方が垂直に掘り込まれる、いわゆる漏斗状を呈するものである。

さて、これらⅣ層検出遺構の年代であるが、出土遺物のほとんどが古代のものに限られており、それを検討する資料に乏しい状況である。唯一、ＳＥ1162井戸跡から、藤澤良祐氏の瀬戸・美濃大窯編年（註３）で16世紀後半頃に位置付けられる施釉陶器丸皿と類似するものが出土していることから、この井戸跡についてはこの頃に年代の一端を求めることができよう。また、発見した柱穴の規模や形状などを周辺地区の成果と比較してみると、中世・近世以降とされているものと類似している。一方、これらの上面を直接覆うⅢ層及びⅢ層上面検出遺構には近世の陶磁器が伴っているのに対し、Ⅳ層上面検出遺構からは全く出土していない。したがって、ここではⅣ層上面検出遺構については、概ね16世紀頃と捉えておきたい。

ところで、本調査に先行して実施した第52次調査Ⅱ区において、幅約４m、長さ10m以上の大規模なＳＤ1144溝跡を発見している。Ⅳ層との直接的な層位関係は不明であったが、方向が北で15度東に傾いており、Ⅳ層検出の掘立柱建物跡の傾きと近似した値を示している。これらはⅢ層に直接覆われるといった共通点もあることから、Ⅳ層検出遺構群と同時期に存在した区画溝であると考えられる。

（註3）藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史　陶磁史編　四』1993

（2）遺構の性格について

ここでは、これまで明らかにされている周辺地区の様相と比較しながら、Ⅵ層上面検出遺構（古代）及びⅣ・Ⅴ層上面検出遺構（中世）の性格について若干の考察を試みたい。なお、Ⅳ・Ⅴ層上面検出遺構については、ともに中世の遺構であると考えているが、検出面が明確に異なることから、ここではⅤ層上面検出遺構を中世Ⅰ期、Ⅳ層上面検出遺構を中世Ⅱ期と記載することとする。

①古代

これまでの調査により、多賀城南面には外郭南門に向かって延びる南北大路と、外郭南辺築地と平行に走る東西大路を基準とした方格地割りが施工されていたことが判明している。この地割りは、南北大路と東西大路の交差点を基準に、南北方向のものが東に３条、西に９条、東西方向のものが北に３条、南に２条確認されている。一方、調査が進展するに伴い、小路については道路間の距離が109～152mと統一性がないこと、各道路の規模についても時期や地点によって、1.6～9.3mと様々であることなどから、施工基準が一律でない可能性が指摘されるようになってきている。地割り内の遺構の状況についてみると、掘立柱建物跡や、井戸跡、区画溝跡などが多数発見されているが、竪穴住居跡は非常に少ない。区画ごとでは、南北大路沿いには計画的に配置された大規模な建物が造られ、公的な空間としての様相を呈している。また、東西大路に面した場所には国司クラスの高級官僚の邸宅を配し、そこから離れた区画には下級役人の住まいを設けるなど、階級による宅地の選定が行われていたことも明らかになってきている。本調査区は、このような方格地割りの西寄りの、東西大路から１区画南に離れた場所に位置し、いわゆる下級役人の住まいとされる地区に相当する。西７南北道路付近と調査区西端部で小規模な掘立柱建物跡が確認されるものの、遺構の密度は閑散としている状況であり、いわゆる国司クラスの建物跡が発見されている東西大路沿いの区画と異なることは明らかである。

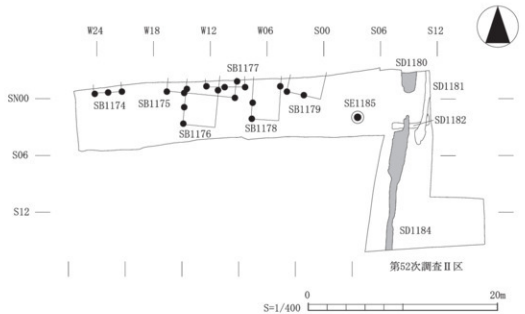
さて、これら方格地割りの施工時期については、Ⅰ期：東西大路と南北大路が造られ、多賀城南面を蛇行して走る河川を改修するなど、水陸の交通網が整備される時期（８世紀後葉頃）→Ⅱ期：南北大路が拡幅され、東西大路を挟んだ南北１区画分の地割りが成立する時期（９世紀前葉頃）→Ⅲ期：Ⅱ期に成立した地割りがさらに南北に拡幅し、方格地割りの範囲が最大となる時期（９世紀中～後葉頃）→Ⅳ期：Ⅲ期後半頃に荒廃した地割りを再整備する段階（10世紀前葉以降）と大きく４段階の変遷で捉えることが可能とする見解が示されている（註４）。今回発見した西７南北道路は、最も古いＡ期の年代が10世紀前葉をさほど遡らない頃、それ以後のＢ・Ｃ期については10世紀前葉以降のものであることが明らかとなっており、さらに西側に近接する建物跡も、これと一致した変遷過程をとることが判明している。今回の調査では９世紀代に遡る道路側溝を発見していないことを考慮すれば、西７南北道路や掘立柱建物跡は前述した地割りの編年で概ねⅣ期に相当するとみられ、本調査区周辺はⅣ期以降新たに整備された地区であると考えられる。

なお、本地区西半部では、地割りが施工される以前の８世紀中葉頃のＳＫ1201土壙が発見されている。出土遺物に漆容器に使用した土師器甕があり、周辺に漆に関係するような施設の存在が想定されよう。

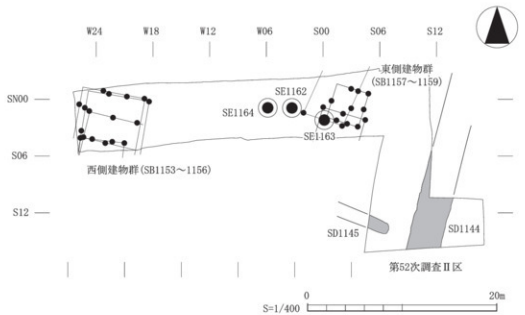
②中世

今回の調査では、Ⅳ・Ⅴ層上面で中世Ⅰ・Ⅱ期（以後Ⅰ期・Ⅱ期とのみ記載）の遺構を発見した。これ

（註４）鈴木孝行『多賀城外の方格地割』第32回古代城柵官衙遺跡検討会―資料集―　2006



中世Ⅰ期（Ⅴ層上面）遺構模式図



中世Ⅱ期（Ⅳ層上面）遺構模式図

第47図　中世の遺構模式図

らは共に東側に比較的規模の大きな区画溝（Ⅰ期：ＳＤ1180・1184、Ⅱ期：ＳＤ1144）を伴っており、その西側に掘立柱建物跡や井戸跡などを配置している。建物と区画溝の方向についてみると、Ⅰ期では北で１～14度東に傾くのに対し、Ⅱ期では７～24度と傾きが大きくなる傾向が認められる。建物の配置では、Ⅰ期は調査区東端部を除くほぼ全域に展開しているのに対し、Ⅱ期になると東端部と西端部に集中する傾向が窺える。東端部では３時期、西端部では５時期の変遷が想定されるが、年代を推測できる資料がなく、新旧関係も不明なものが多いことから、両地区の変遷過程を把握することはできなかった。柱穴を個別に見てみると、Ⅰ期のものは掘り方が一辺50㎝前後の方形を基調としているものが多いのに対し、Ⅱ期では円形を基調とした小型の掘り方が主体を占めるようになるなどの違いが認められる。井戸はⅠ期のものを１基、Ⅱ期のものを３基確認しており、全て素掘りのものである。いずれも屋敷の東側に設けられており、底面はⅨ層下層の粗砂層にまで達している。これらの年代については、Ⅰ期はⅥ層上面検出遺構及びⅡ期との関係から16世紀以前の中世、Ⅱ期についてはＳＥ1162井戸跡出土遺物やⅢ層との関係から概ね16世紀頃と考えている。

さて、このような中世の遺構についてみると、本遺跡北側に位置する八幡・伏石地区や西側の新田遺跡寿福寺地区、大日南遺跡などで発見された屋敷跡と類似している。これらは溝によって方形に区画されており、その内部からは掘立柱建物跡や塀跡、井戸跡等が多数発見されている。年代的には12～14世紀頃の古い段階のものと、15・16世紀の新しい段階のものに大別できる傾向が窺え（註５）、特に15・16世紀のものについては新田遺跡から本遺跡にかけて大規模な屋敷群を形成していたと推測されている。今回発見したⅡ期の年代については16世紀頃のものと考えていることから、それら屋敷群の一部である可能性が高い。Ⅰ期については、具体的に年代を示す資料がないことから12～14世紀頃の古い段階に対応するものか、15～16世紀の新しい段階に対応するものかは明らかにすることができなかった。しかし、Ⅰ期を直接覆うⅣ層（Ⅱ期検出面）が自然堆積層であることからⅡ期成立まである程度の時間が経過していたと考えられることや、Ⅱ期の遺構埋土からの出土ではあるものの太宰府市の陶磁器分類でⅣ類としている白磁椀（もしくはⅢⅡ類）（註６）が出土していることから、11世紀後半～12世紀前半頃の遺構の存在が推測される。したがって、Ⅰ期については12～14世紀頃の古い段階対応の遺構群である可能性を指摘しておきたい。

５．まとめ

１）　Ⅸ層で多量のプラント・オパールが検出され、周辺地区の調査成果から古墳時代前期の水田層であることが明らかとなった。

２）　古代の西７南北道路跡、掘立柱建物跡、土壙を発見した。方格地割りに関連する遺構については10世紀前葉以降のものが主体を占めており、比較的遅れて整備された地区であることが判明した。

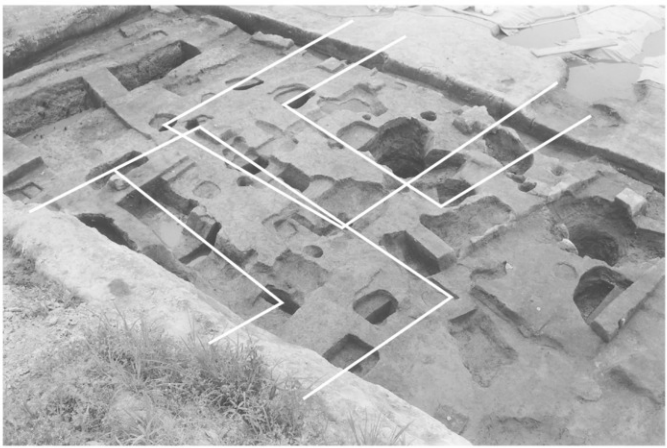
３）　中世の屋敷跡を発見した。このうち新しい段階の屋敷は16世紀頃のものであり、新田遺跡から本遺跡にかけて確認されている大規模な屋敷群の一部であると考えられる。

（註5）新田遺跡寿福寺地区では、Ⅲ層を挟んで下層のＡ期（12～14世紀前半）と上層のＢ期（15・16世紀）に、山王遺跡八幡地区の屋敷跡については、自然堆積の間層を挟んで下層の「古い屋敷跡」（12～13世紀頃）と上層の「新しい屋敷跡」（15～16世紀頃）に大別している。大日南遺跡で発見した屋敷跡は同一面での検出であるが、出土遺物や遺構の新旧関係からⅠ期（13世紀後半頃）とⅡ期（15世紀以降）に区分している。なお、いずれの屋敷跡についても、居住者については武士階級を想定している。

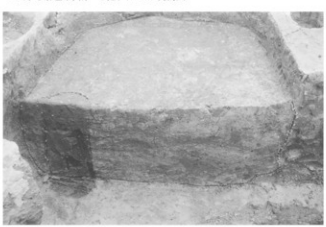
（註6）太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集　2000

【引用・参考文献】

鈴木孝行 『多賀城外の方格地割』第32回古代城柵官衙遺跡検討会―資料集― 2006
永井久美男 『新版中世出土銭の分類図版』 2002
藤澤良祐 『瀬戸市史 陶磁史編 四』 1993
藤澤良祐 「瀬戸系（施釉陶器生産技術の伝播）」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集 2005
山本信夫 「中世前期の貿易陶磁」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995
太宰府市教育委員会 『太宰府条坊跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集 2000
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 『古代の官衙遺跡―１遺構編―』 2003
宮城県教育委員会 『山王遺跡Ⅰ―仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書―』宮城県文化財調査報告書第161集 1994
宮城県教育委員会 『山王遺跡八幡地区の調査―県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ―』宮城県文化財調査報告書第162集 1994
宮城県教育委員会 『山王遺跡Ⅱ―多賀前地区遺構編―』宮城県文化財調査報告書第167集 1995
宮城県教育委員会 『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集 1997
宮城県教育委員会 『山王遺跡町地区の調査―県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ―』宮城県文化財調査報告書第175集 1998
宮城県教育委員会 『山王遺跡八幡地区の調査２―県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅳ―』宮城県文化財調査報告書第186集 1998
宮城県教育委員会 『山王遺跡伊勢地区の調査―県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅴ―』宮城県文化財調査報告書第198集 2004
多賀城町誌編纂委員会 『多賀城町誌』 1967
多賀城市 『多賀城市史１―原始・古代・中世―』 1997
多賀城市埋蔵文化財調査センター 『新田遺跡（第４・11次調査報告）』多賀城市文化財調査報告書第23集 1990
多賀城市埋蔵文化財調査センター 『山王遺跡ほか－発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第29集 1992
多賀城市教育委員会 『山王遺跡Ⅰ－仙塩道路建設に係る発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第45集 1997
多賀城市教育委員会 『多賀城市内の遺跡１－平成15年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第77集 2005
多賀城市教育委員会 『多賀城市内の遺跡２－平成16年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第78集 2005
多賀城市教育委員会 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
多賀城市埋蔵文化財調査センター 『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成5年度－』 1995
多賀城市埋蔵文化財調査センター 『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成8年度－』 1998

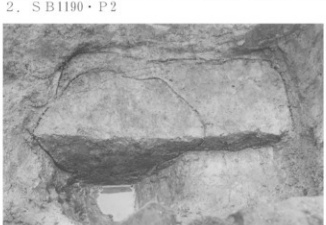


1．東側建物群（北西より撮影）



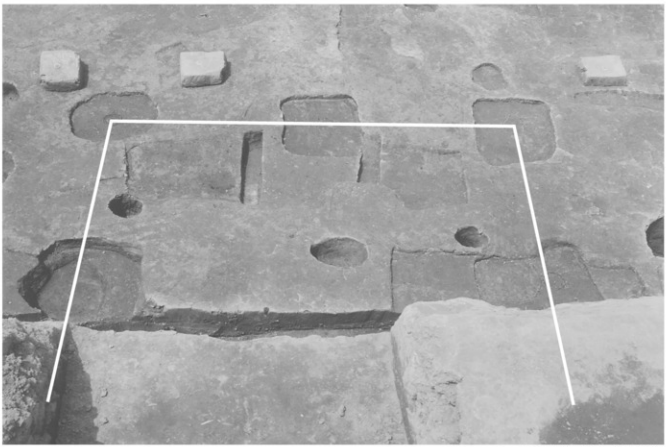
2．ＳＢ1190・Ｐ2

3．ＳＢ1192・Ｐ9

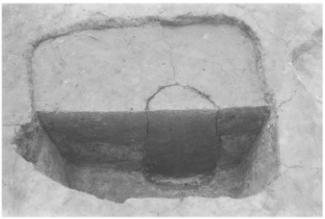


4．ＳＢ1189・Ｐ2

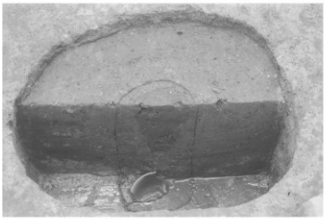
5．ＳＢ1189・Ｐ3



1．ＳＢ1191（南より撮影）



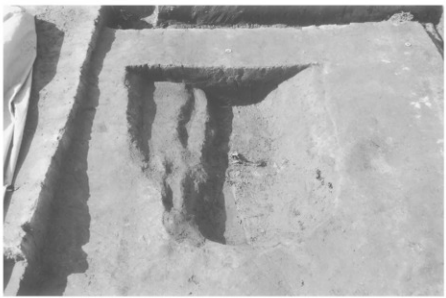
2．ＳＢ1191・Ｐ3



3．ＳＢ1191・Ｐ1

4．ＳＢ1191・Ｐ5

5．ＳＢ1191・Ｐ5底面



1．SD1180（南より撮影）

2．SE1162（南より撮影）

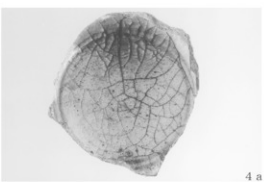
3．SE1185（北より撮影）

写真図版3

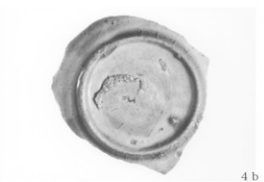
1

2

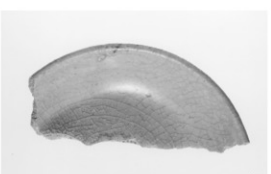
3



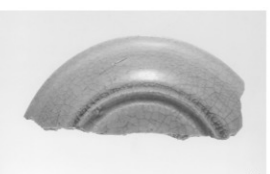
4 a



4 b



5 a



5 b

1　土師器甕・第18図１・R23
2　土師器杯・第18図３・R22
3　須恵器杯・第18図４・R21
4　施釉陶器丸皿・第35図２・R1
5　施釉陶器丸皿・第35図１・R2

1

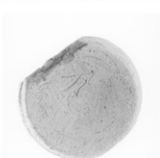
2

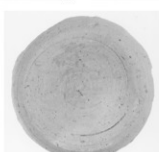
3

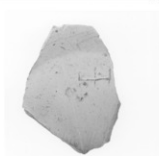
4

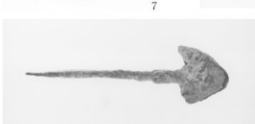
5

6

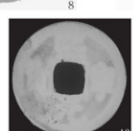

7

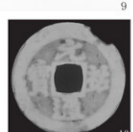

8


9


10

11


12


13

1　須恵器杯・第43図４・Ｒ３
2　須恵系土器杯・第43図11・Ｒ９
3　須恵系土器杯・第43図12・Ｒ10
4　須恵系土器杯・第43図13・Ｒ11
5　須恵系土器杯・第43図14・Ｒ13
6　須恵系土器杯・第15図２・Ｒ12
7　土師器杯・ヘラガキ・第44図１・Ｒ18
8　土師器杯・墨書・第43図５・Ｒ20
9　土師器杯・ヘラガキ・第44図２・Ｒ19
10　鉄鏃・第44図６・Ｒ１
11　鉄鏃・第44図７・Ｒ２
12　熙寧元寶・Ｒ３（X線写真）
13　元祐通寶・Ｒ４（X線写真）

写真図版５

附章2　多賀城市山王遺跡第54次調査のプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

山王遺跡第54次調査区は、ＪＲ陸前山王駅南側の砂押川右岸の沖積平野上に位置する。今回の分析調査では、古代以前の堆積層を対象にプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討を行う。

2．試料

調査地点は、調査区西壁と東側南壁の２地点である。分析試料は、両地点とも上位よりⅧ層、Ⅸ層、Ⅹ層の３層準より採取された６点である。このうち、Ⅸ層は古墳時代の堆積層と考えられている。なお、試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

3．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１g中のプラント・オパール個数（試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属型は0.75である。

4．結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１、図１に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

（１）西壁

イネはⅨ層のみで検出されている。プラント・オパール密度は高い値である。ヨシ属はⅨ層とⅩ層で検出されている。Ⅸ層では高い密度である。ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型はすべての層で検出されている。Ⅷ層とⅨ層でクマザサ属型が比較的高い密度である。

（２）東側南壁

イネはⅧ層とⅨ層で検出されている。このうち、Ⅸ層では高い密度である。ヨシ属はすべての層で検出されている。Ⅸ層では高い密度である。ススキ属型はⅧ層とⅨ層で検出されている。Ⅸ層では高い密度である。ネザサ節型とクマザサ属型はすべての層で検出されており、Ⅷ層ではいずれも比較的高い密度である。

5．考察

古墳時代とみられるⅨ層では、西壁、東側南壁ともにイネのプラント・オパールが7,000個/g以上の高密度で検出されている。これは稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを大きく上回っている。また、両地点ともヨシ属が随伴して高い密度で検出されている。こうしたことから、Ⅸ層では調査区の広い範囲で水田稲作が営まれていたと判断される。また、近傍にはヨシ属の生育する湿地が広がっていたと推定される。Ⅷ層でも東側南壁においてイネのプラント・オパールが検出されているものの、密度は1,200個/gと低い値である。また、西壁からは検出されていない。このことから、当該層について稲作跡である可能性を積極的に支持することはできない。

その他の分類群では、東側南壁のⅨ層でススキ属型が高い密度で検出されている。上述したようにⅨ層堆積時の調査地周辺は湿地の環境が想定されることから、ここで検出されたススキ属型は湿地を好むオギである可能性が高い。Ⅷ層ではネザサ節型やクマザサ属型が優勢であることから、当該層堆積時の調査地は概ね乾いた環境であったと考えられる。なお、Ⅹ層では両地点とも検出されたプラント・オパール量が少ないことから、イネ科草本の生育には適さない環境であったか、堆積速度が速かったことが考えられる。

6．まとめ

山王遺跡第54次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、古墳時代とされるⅨ層では調査区の広い範囲で水田稲作が営まれていたと判断された。なお、Ⅸ層堆積時の調査地は湿地の環境であり、上位のⅧ層の時期になると調査地は乾いた環境へと移行したと推定された。

(文献)

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学，同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表1　プラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位	西壁			南壁		
	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
イネ科:Gramineae (Grasses)						
イネ:*Oryza sativa*		*71*		*12*	*72*	
ヨシ属:*Phragmites*		*36*	*18*	*6*	*36*	*6*
ススキ属型:*Miscanthus type*	*6*	*30*	*6*	*25*	*60*	
タケ亜科:Bambusoideae (Bamboo)						
ネザサ節型:*Pleioblastus sect. Nezasa*	*60*	*36*	*18*	*74*	*24*	*6*
クマザサ属型:*Sasa (except Miyakozasa) type*	*97*	*89*	*12*	*93*	*38*	*6*
その他:Others	42	24		25	12	6
未分類等:Unknown	133	172	91	174	252	102
プラント・オパール総数:Total	338	458	145	409	492	126

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ:*Oryza sativa*		*2.09*		*0.36*	*2.11*	
ヨシ属:*Phragmites*		*2.25*	*1.15*	*0.39*	*2.27*	*0.38*
ススキ属型:*Miscanthus type*	*0.07*	*0.37*	*0.08*	*0.31*	*0.74*	
ネザサ節型:*Pleioblastus sect. Nezasa*	*0.29*	*0.17*	*0.09*	*0.36*	*0.12*	*0.03*
クマザサ属型:*Sasa (except Miyakozasa) type*	*0.72*	*0.67*	*0.09*	*0.70*	*0.27*	*0.04*

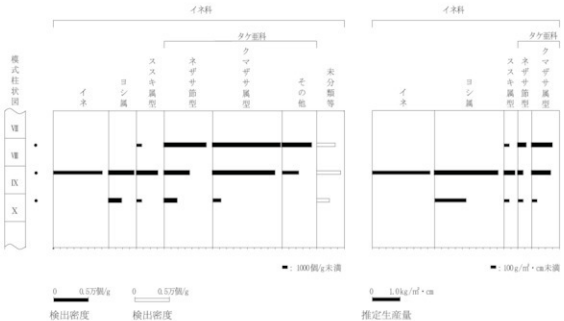
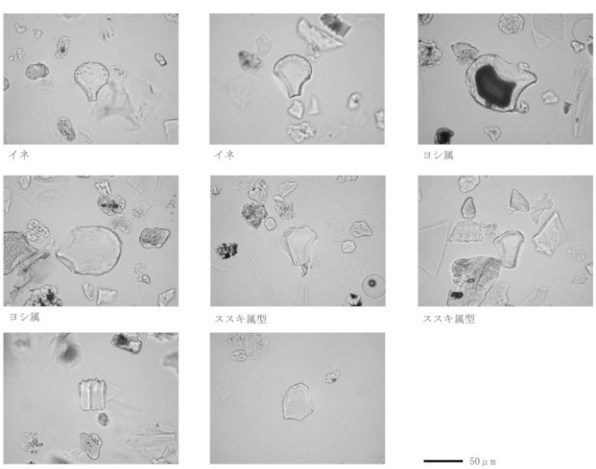


図１　山王遺跡第54次調査区地点におけるプラント・オパール分析結果



プラント・オパールの顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき
書名	山王遺跡
副書名	第51・54・57次調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第81集
編著者名	武田健市・村松　稔
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号　TEL 022-368-0134
発行年月日	西暦2006年3月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山王遺跡（さんのう）（第51・57次）	宮城県（みやぎけん）多賀城市（たがじょうし）山王字三千刈（さんのうあざさんぜんがり）25－1 山王字掃下し（さんのうあざはさおろし）1-1	042099	18013	38度17分46秒	140度58分26秒	(51次) 20050408 20050622 (57次) 20051003 20051018	442㎡	宅地造成
山王遺跡（さんのう）（第54次）	宮城県（みやぎけん）多賀城市（たがじょうし）山王字前田（さんのうあざまえだ）9－1外2筆（ほかふつ） 山王字山王（さんのうあざさんのう）四区7（よんく）	042099	18013	38度17分39秒	141度58分53秒	20050531 20050804	264㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡（第51･57次）	集落・都市・屋敷	中世	区画溝、井戸、土壙、	青磁、無釉陶器 銭貨、砥石、ヘラ状木製品	大規模な溝に区画された屋敷を発見
		古代	掘立柱建物	土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器	桁行４間の掘立柱建物や区画溝を発見
		古墳時代	水田	土師器	畦畔、水路、水口を発見
山王遺跡（第54次）	集落・都市・屋敷	中世	掘立柱建物、区画溝、井戸、土壙	白磁、施釉陶器、銭貨	溝に区画された屋敷を発見
		古代	道路、掘立柱建物、土壙	土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、緑釉陶器、漆付着土器、墨書土器、鉄鏃	西７道路を発見
		古墳時代	水田		

多賀城市文化財調査報告書第81集

山　王　遺　跡

－第51・54・57次調査報告書－

平成18年３月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（０２２）３６８－０１３４

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話（０２２）３６８－１１４１

印刷　有限会社　工陽社
宮城県塩竈市尾島町８番７号
電話（０２２）３６５－１１５１

R100 PRINTED WITH SOY INK 古紙配合率100%再生紙を使用しています
印刷には大豆油インキを使用しています